

靈界物語 第五三卷 眞善美愛 辰の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第五三卷』愛善世界社

2005(平成17)年11月06日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

## 目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 毘丘取風 びくとるおろし

第一章 春菜草 はるなぐさ（一三六四）

第二章 蜉蝣 かげろふ（一三六五）

第三章 軟文學なんぶんがく（一三六六）

第四章 蜜語みつご（一三六七）

第五章 愛縁あいえん（一三六八）

第六章 氣縁きえん（一三六九）

第七章 比翼ひよく（一三七〇）

第八章 連理れんり（一三七一）

第九章 蛙かへるの腸はらわた（一三七二）

第二篇 貞烈龜鑑ていれつきかん

第一〇章 女丈夫ぢよぢやうふ（一三七三）

第十一章 艷兵えんぺい（一三七四）

第十二章 鬼おにの戀こひ（一三七五）

第十三章 醜嵐しうしん（一三七六）

第一四章 女の力をんな ちから〔一三七七〕  
第一五章 白熱化はくねつくわ〔一三七八〕

第三篇 兵權執着へいけんしふちやく

第一六章 暗示あんじ〔一三七九〕  
第一七章 奉還状ほうくわんじやう〔一三八〇〕  
第一八章 八當狸やつあたり〔一三八一〕  
第一九章 刺客しかく〔一三八二〕

第四篇 神愛遍滿しんあいへんまん

第二〇章 背進はいしん〔一三八三〕  
第二一章 軍議ぐんぎ〔一三八四〕

第二章 天祐（一三八五）

第二三章 純潔（一三八六）

序文

靈界物語は阿呆陀羅に長い物語で、實に平凡で讀むに堪へないと言つてゐる人  
士が偶にあるやうだ。然し瑞月は元より眞理なるものは平凡だと思ふ。だから假  
令この物語が平凡であるとしても、世人が誰も未だ氣の附いてゐない様な事柄な  
らば、千言萬語を連ねても之を説く必要があらうと思ふ。何程シカツメらしい  
文章や言葉でも、今日迄に世間に知れ渡つた事を著述したり、論説するのならば、  
決して堂々たる學者の態度とは思はれない。要は陳腐常套語である。かかる著述  
に對しては、吾人は輕侮嘲笑せず讀んだり聞いたりすることは出来ない。今日  
の學者は辨舌としても巧妙で人の肺腑を突く譯でも無く、また文章としても平板

的なものである。今日の學者の著述を見るに、先づその第一頁からして脱線調子外れのものが多い。乾燥無味にして蠟を嚼む位なら未だしも辛抱が出来るが、全然刃の缺けた鯉削きで、松魚節を削いてゐるやうな迷文章だから堪らない。今日の學者が揃ひも揃うて、アンナ拙劣醜惡な文字を聯ねて自分で夫れを恥とも思はないのだらうか、今迄世に有ふれた平凡陳套の内容を、書きなぐりの出鱈目な文字で綴つて、是を世に公にしても平氣な程までに學者といふものは厚顏無恥になれる者だらうかと、不思議に思はる位である。そして吾々の口述書を見て史實に無いとか、空想だとか、怪亂狂妄の言説だとか仰しやるのだから困つてしまふ。豚に眞珠、猫に小判とかいふ比喻を思ひ出さずには居られなくなつて來る。深き痛ましき人間味や人生味に透徹せず、岐路に彷徨せる現代の學者が、如何にして深遠微妙なる神靈界の消息が判つてたまるもので無い。現代の錚々たる學者すらも未だ神靈界の何たるを了解し得ない世情だから、一般人が何程鯁錐立になつた所で、この神示の物語が批判されやう筈がない。瑞月王仁は今日まですべての迫害と妨止とを突破して、漸く茲に累計五十三卷、原稿六萬枚餘を脱稿したのも、

決して世にありふれたる事實を著したのではない。平凡な狂妄な著述と見る人は見ても好い。それが各人の御勝手だから。斯く大膽に放言する時は世人は瑞月を全くの發狂者と嘲笑さるるかも知れない。然し自分に取つては極めて眞面目である。その代り現代人に讀んで貰ふといふやうな野心は無い。千年の後に知己を得れば良いといふ考へを持つて口述しておくのである。とは言ふものの時代と神靈とに眼の醒めた人士が現はれて、假令一人なりとも愛讀して呉れられる方があれば實に望外の幸であります。

大正十二年一月十四日 舊十一年十二月廿九日

於教主殿



回顧すれば今より三年前（滿二年）の今月今日は我大本に取りて、最も深刻なる記念日である。都鄙十萬の讀者に對して、大責任を負ひ、大大坂の玄關口、梅田の大正日々新聞本社に於て、社長として大活躍を試みて居た折しも、突然二三の冥使の爲に攫はれて、「インフアナル」に等しき牢獄の中に收容された日である。裏の筆先に……大正十年は變性女子の身魂に取りて、後にも先にもない工ライ事が出来る年であるぞよ。節分祭が濟みたら、女子の肉體を神が連れ參るから、心配して下さるなよ。誰もお供は許さんぞよ。後には金勝要神、木花咲耶姫の御魂が御守護あるに仍つて、役員は安心して御用をして下されよ……と示されてあつた。併し乍ら過去を繰返すは餘り氣分の好いものでないから、其時の事情は省略する。

世界は御神示の如く、時々刻々に變轉し、滿二箇年を経たる今日、新聞紙に依つて紀元節當日の内外の出來事中、其主なるものを擧ぐれば、實に今昔の感に打

たれざるを得ないのである。首相樞府の容易ならざる會見問題、及貴族院の外交問題追及に付いて、政府側大に狼狽し、研究會に泣付いて、此難關を切抜けんとしてゐる。幸無兩派又密々に凝議して外交振肅の道を講ずるあり。全國の普選論者は、普選即行の宣言決行をなして、東京での普選聯合大懇親會の席上にて火の如き熱辨を揮ひ、満場を白熱化するあり、東京、名古屋、岡山、福岡、八幡などにては、大に氣勢を擧げ、事態容易ならざる形勢を示して居る。労働總同盟と向上會一派四千名、朝鮮人二百名を先頭に、警戒線を破つて警官隊と争ふあり。社會主義者の檢束東京丈にて三千名の大衆に及び、又八幡の官勞示威行列三千名、待伏せに社會主義者現はれ、ピラを撒布し數名引致され、もと勞友會長の淺原健三は八幡市で暴漢に襲撃され、瀕死の重傷を負ふあり。農民大會にては、土地を國有にせよ、而して管理權を小作人に與へよ、醫術を國有にせよ、と決議をなし、全國百五十萬の所謂部落民は、自分たちも水平線上に浮び出たいもの、と主張し、其運動愈熾烈となつたが、折角の努力も相互の意思疎通せず却て反感を増すのみにて、收拾す可らざる破目になり、内務省は非常に頭を悩まして居る。性の悪い

流行性感冒猖獗を極め、内務省からは各府縣に通牒を發し、其豫防に苦心してゐる。浄土宗の内訌爆發し、宗會選舉の紛擾、愈大袈裟となつてゐる。返咲の農村振興策は又一頓挫し、陸縮の憲政案は遂に延期となつて了つた。普選聯合大懇親會では、櫛がけの暴漢が、木劍や鶴嘴を振つて、會場に突入し、大亂闘を始め、負傷者を出し、阿鼻叫喚場と化した。労働團の氣勢は益々烈しく、示威運動各地に起り、在野黨からは警視廳に向つて、會場不法取締の難詰問題を持出すあり。羅馬法王廳使節派遣問題に付き、外務省の辨明の妄を破らんとし、姉崎、吉村兩博士が辨護論の矛盾を駁撃するあり、京都の無産者大會にては、時代に反する惡法たる、過激社會運動取締法案、労働組合法案、小作爭議調停法案反對の狼火をあぐべく、岡崎市公會堂で、京都無産者大會と銘打つて、激烈なる演說會を開いた。西陣織友會、京都印刷工組合有志、京都水平社有志、日本労働同盟、其他參加の數團體では、當日大會の氣勢を煽るべく、午前中八臺の自動車飛ばして、市内の要所々々に、數萬枚の宣傳ビラを撒布し、時間と共に喊聲を揚げつつ大會會場へ繰込んだ。一方警察部ではそれが爲異常の狼狽を來し、府高等課では、早

朝から所轄川端署に陣取つて、凄い目をギョロつかせてる外、別室には市内各署の高等刑事連が額を鳩めて、重大らしく構へ込み、久家別室主任の机の上には各方面から時々刻々に集まつて来る報告書類が堆く積まれ、主任者が青い顔をして頭をひねくるなど、市内高等警察總出の大警戒振は實に仰々しい事である。十一日正午から岡崎公園市公會堂に開かれた無産者大會は、朝來自動車を以て、市中に宣傳ビラを配布したのと、祭日日曜の事とて、十一時頃から早晝飯をすまして、電車や徒歩で押寄せる群衆は引も切らず、十二時には既に會堂の大半を埋むる盛況を呈してゐたが、萬一を慮つてゐる府警察部では、其警戒の爲、市内の非番巡查全部を召集し、場の内外を警戒する、其物々しさ、假川端署たる妙傳寺境内では焚火をなして、サーベル連が之を圍んでゐる有様は、宛然戰場を思はしめるものがあつたと報告してゐる。大正十年の今月今日は二百數十人のサーベル連が火を圍み慄ひ乍ら、どこかの境内で要らざる「おせつかい」をやつてゐた事を思ひ出すと、實に面白き對象であると思ふ。東本願寺の大谷光瑩伯の遺骸愈東京から本山に着し、京都驛に迎へた三百餘の坊主に前後を守られて、手輿に移乗され、

黄色の水干を纏つた十二名の力者に擔ぎ上げられると、直に列を整へて本山に向ふ、驛頭からは七條署の前田警部が恭しく御先頭を勤めた。

次に全國佛教の管長が東京に集まり、羅馬法王廳使節交換反對運動も漸く效を奏し、十二日の下院豫算委員總會に於て、該案は削除され、愈十三日から本會議にかかるとの筈であるが、之も大多數にて削除される事に確定し、貴族院に於て該豫算案は復活する様なことはなからうと思はれる。右の次第により、佛教聯合會にては、十四日の伏見元帥宮國葬には各宗教管長の參列を促し、之も同時に十五日午前十時より、芝の増上寺にて、各宗管長會議を開き、本問題の經過を報告すると同時に、將來の聯盟を益々鞏固にせむものと協議を重ね、僧參問題は下院請願委員會に於て、參考として本會議に送附することとなり、境内還附問題も本會議で片付けようと意氣卷いてゐる。又海外にては獨逸政府はバーデン地方の占領に對し、佛國に抗議した。獨逸食糧大臣ルーテル氏は佛國の行動により、ルール地方の鐵道交通中止とならば、同地方住民に食糧の定期供給をする爲自動車を用意をした。一方佛軍はエルベルフエルド地方に對し、侵入を繼續し、獨逸人は食糧

殊に馬糧及家具の徴發益々急なる爲、甚しく困窮してゐる。生活必要品の價格は絶えず騰貴してゐる。又英國政府は巴里當局に對し、土耳其に對する一定の定案は之れある事を諷刺した。併しローザン又會議は此上繼續する事は拒絶した。印度より派遣された英國の數個大隊は、モスール油田に向ふ様命令に接した。併しバリマタン紙はかかる手段で英國が土耳其を能く脅迫し得るやを疑つてゐる。一方土耳其が種々威喝した試みを意とせず、英國海軍は十分なる着弾距離を備へた軍艦二隻をスミルナに派遣した。英國商議院總裁ロイドブリーム其他ロンドンの主なる政客中、英國がメソポタミヤより手を引く事を主張し、同地に手を出す事は性質不良にして危険であると云つてゐる。尤も英、佛、米三國とも、土耳其がスミルナより外國軍艦の退去を要求したるには反對してゐると、電通ロンドン特電九日發にて、新聞紙に記載されてゐる。又米國下院の移民委員會は、市民權獲得の資格なき者の米國入國禁止法案に關する報告をした。因に米國大審院は最近日本人は米國人民たるを得ずといふ判決を下した。右の排日法案は千八百九十年に母國を離れて米國に移住せる國民の未亡人等を除く外、すべての者に制限を加

ふるものであると、合同ワシントン十日發電に現はれてゐる。

佛軍は更に獨逸の西南及西北に亘る各地點を占領し、オッフエンベルヒ及アン

テムワイアールに來た。此等地方住民代表者や市長等はバーデインに會合し、協

議する所があつた。獨逸大統領エベルト氏は外國の暴戾なる壓迫の下には少しも

屈する所なく守勢的反抗を繼續する手筈を整へた。尤も佛國の占領地域に於ては、

追放逮捕相次ぎ旅客列車は閉鎖され、郵便物の押收も頻々と起つてゐる。生活費、

必要品の價格は佛軍が未だ占領しなかつた一箇月前に比し四百倍に昂騰した。而

して佛軍は去る八日初めて白耳義に向け、石炭を三列車輸送するを得たと、電通

ロンドン特電十日發にて報告されてゐる。又電通パリ特電十日發に依れば、ルー

ル地方に於ける形勢に關し、佛國首相ポアンカレは、代議院外交委員會の要求

にかかる報道を拒絶した爲に、パリにては人心震動したと傳へてゐる。其他種々

雑多のいまはしき報道は全紙面を埋め、世界は宛然地獄餓鬼畜生修羅の光景を暴

露してゐる有様である。今後忌はしき諸種の出來事は何處まで發展するか測り知

る可らざるものがある。吾人は大神の神示に仍つて、前途の暗澹たる光景を洞察

し、世界の爲に憂慮に堪へざるものである。故に一日も早く世界の人類に對し、五六七神政の福音を傳達し、無明暗黒の現代をして、神慮に叶へる黄金時代に化せしめんと、晝夜寢食を忘れて、之れに従事しつつあるのである。

ああされど、地獄道に靈の籍を置ける當局者を始め、現代人は自然愛と世間愛のみに惑溺し、神の光明に反き、智慧證覺を曇らせ居れば、如何なる大聲叱呼の喊聲も、雷霆の響も、警鐘亂打の聲も、到底耳には透らない悲しむべき世態である。記して以て後日の参考に供するのみ。ああ惟神靈幸倍坐世。

大正十二年二月十二日（舊十一年十二月廿七日）

於龍宮館 王仁識



第一篇 毘丘取嵐

第一章 春菜草（一三六四）

水<sup>みづ</sup>温<sup>ぬる</sup>み、木<sup>き</sup>々<sup>ぎ</sup>の梢<sup>こずえ</sup>は膨<sup>ふく</sup>らんで、花<sup>はな</sup>咲<sup>さ</sup>き匂<sup>にお</sup>ひ、鳥<sup>とり</sup>歌<sup>うた</sup>ひ蝶<sup>てふ</sup>は舞<sup>ま</sup>ひ、陽<sup>かげ</sup>炎<sup>る</sup>閃<sup>ひら</sup>き、野<sup>の</sup>は  
一<sup>いち</sup>面<sup>めん</sup>に青<sup>あ</sup>毛<sup>まう</sup>氈<sup>せん</sup>を布<sup>し</sup>きつめたやうに春<sup>はる</sup>めき渡<sup>わた</sup>つた。目<sup>め</sup>も届<sup>とど</sup>かぬ許<sup>ばか</sup>りの廣<sup>ひろ</sup>きライオン  
河<sup>が</sup>の西<sup>せい</sup>岸<sup>がん</sup>に瓢<sup>ふう</sup>をさげて逍<sup>せう</sup>遙<sup>えう</sup>しつつ、悠<sup>いう</sup>々<sup>いう</sup>たる川<sup>かは</sup>の流<sup>なが</sup>れを眺<sup>なが</sup>め乍<sup>なが</sup>ら、雑<sup>ざつ</sup>談<sup>だん</sup>に耽<sup>ふけ</sup>つて  
ゐる四<sup>し</sup>五<sup>ご</sup>人<sup>にん</sup>のバラモン信<sup>しん</sup>者<sup>じゃ</sup>兼<sup>けん</sup>兵<sup>へい</sup>卒<sup>そつ</sup>があつた。

甲<sup>か</sup>「オイ俺<sup>おれ</sup>達<sup>たち</sup>は何<sup>なん</sup>と云<sup>い</sup>ふ仕<sup>し</sup>合<sup>あ</sup>せ者<sup>もの</sup>だらうな。齋<sup>い</sup>苑<sup>そ</sup>の館<sup>やかた</sup>の進<sup>しん</sup>軍<sup>ぐん</sup>に際<sup>さい</sup>し、ランチ、片<sup>かた</sup>  
彦<sup>ひこ</sup>兩<sup>らう</sup>將<sup>しやう</sup>軍<sup>ぐん</sup>が敗<sup>はい</sup>北<sup>ぼく</sup>してくれたお蔭<sup>かげ</sup>で、斯<sup>か</sup>様<sup>やう</sup>な結<sup>けつ</sup>構<sup>こう</sup>な所<sup>ところ</sup>で婦<sup>ふ</sup>女<sup>ぢよ</sup>を姦<sup>かん</sup>し、牛<sup>うし</sup>、羊<sup>ひつじ</sup>、豚<sup>ぶた</sup>を  
無<sup>む</sup>料<sup>れう</sup>で徴<sup>ちやう</sup>發<sup>はつ</sup>し、酒<sup>さけ</sup>迄<sup>まで</sup>口<sup>くち</sup>八<sup>はち</sup>で喰<sup>くら</sup>ひ、誰<sup>たれ</sup>憚<sup>はば</sup>る者<sup>もの</sup>もなく、日<sup>にち</sup>々<sup>にち</sup>歡<sup>くわん</sup>喜<sup>き</sup>の生<sup>せい</sup>活<sup>くわつ</sup>に酔<sup>よ</sup>うてゐる  
の<sup>の</sup>も、全<sup>ま</sup>くバ<sup>ま</sup>ラ<sup>ら</sup>モ<sup>も</sup>ン<sup>ん</sup>神<sup>がみ</sup>のお蔭<sup>かげ</sup>だ。大<sup>たい</sup>將<sup>しやう</sup>を持<sup>も</sup>つなら、ど<sup>ど</sup>うして<sup>も</sup>久<sup>く</sup>米<sup>めい</sup>彦<sup>ひこ</sup>さま、鬼<sup>おに</sup>春<sup>はる</sup>  
別<sup>わけ</sup>さまのやうな明<sup>めい</sup>智<sup>ち</sup>の將<sup>しやう</sup>軍<sup>ぐん</sup>の部<sup>ぶ</sup>下<sup>か</sup>にならなくちや駄<sup>だ</sup>目<sup>め</sup>だなア」

乙「ウンさうだ。ランチ、片彦さまが、猪武者であつて見よ、俺達は今頃は齋苑の館で血河屍山の犠牲になつてゐるに違ひないのだ。何と云つても部下を愛する大將でなくちや駄目だ。何程國家の爲、大黒主の爲だと云つても、命を取られちや、世界の平和も糞もあつたものだない。軍術の達人は能く遁走す……と云ふぢやないか。本當に吾々は都合の好い大將に仕へたものだ。強い奴には蛇の如く鳩の如く敏捷に逃げ、弱い奴とみれば、疾風迅雷的に押寄せて敵を殲滅するのが孫呉の兵法だ。鬼春別將軍吾意を得たりと云ふものだ。アハハハハ」

丙「それだと云つて、吾々は齋苑の館に進撃するのが使命ではないか。其使命も果さずに、こんな所迄退却して、倫安姑息、土地の人民を苦め、沒義道なことをして、吾れよしの行き方をやつて居つても、大自在天様は、御立腹遊ばさないだらうか、チツト考へねばなるまいぞ」

甲「馬鹿だなア、貴様はそんな古い頭だから、何時迄も一兵卒として上官の頭使に甘んじ、馬の掃除や靴磨き計りさされるのだよ。人間は何と云つても、伶俐に敏活に立廻らなくちや、生存競争の世の中に立つて、理想の生活を營むことは出

來ないぞ」

丙「ハハハハハ、理想の生活が聞いて呆れらア、強盜強姦、所在惡事を盡して、それが理想の生活か。能く間違へば間違ふものだなア。そして貴様は俺に對し、何時迄も馬の掃除や靴磨きをしてゐると吐したが、貴様だつて、ヤツパリ靴磨きだないか、どこに高下勝負があるのだ」

甲「俺は未來の總理大臣兼元帥様だ。貴様の様な頭では、何時になつても駄目だ。俺は大に未來を有するのだ。前途有望の青年だぞ」

乙「兔も角、現代は表面に善を装ひ、立派な熟語を使ひ、そして多數の人間をチヨ口まかせ、聖人君子、英雄豪傑と思はしめなくちや、到底大人物にはなれない。

又上官に對しては能ふる限り巧妙な辭令を用ひ、お髭の塵を拂ひ、何から何迄能く氣をつけて、うい奴、可愛い奴と言はれなくちア駄目だぞ。それだから俺達は鬼春別、久米彦兩將軍のお氣に入るやうに、其意志を忖度して、大將が女を弄べば、俺達も女を弄ぶ、酒に酔へば酒に酔ふ、つまり共鳴をするのだ。抑も軍隊は一個人の形式に仍つて組織されてるのだから、頭の思ふ所を手足たる吾々が柔順

に行へば、それで完全に職務が勤まるのだ。云はば將軍は吾々……多數の兵卒を統轄した一個の人格者である。そして吾々は其個體である。全體は個體に和合し、個體は全體に和合するのが社會の秩序を維持する上に於て、最必要な條件だ。丙の如き陳腐な言説は最早今日には通用しないぞ。チツト脳味噌の詰替をせなくちや、いつも人後に撞着たらねばならぬ、社會の廢物となるより道はなからう、フツフフ」

丙「俺はモウこんな惡虐無道な思想を持つてゐる連中と伍するのは飽々して來た。一層のこと、深山幽谷にでも隠れて、仙人を氣取り、閑寂な生活を送り、靈の淨化に努めたいと思ふのだ」

甲「そんなら何故、一時も早くお暇を頂いて、隠君子を氣取らないのか。ヤツパリ貴様も口先計りの人間だ。本當に貴様の言ふことが、心の底から湧いたのならば、不言實行と出かけたなら可いだないか。將軍様は來る者は拒まず、去る者は追はずとの大襟度を持つてゐられる、智勇兼備の名將だからのう」

乙「時にランチ、片彦將軍は浮木の森に滯陣して、英氣を養ひ武を練り、やがて

齋苑館に捲土重來するといふ方針だと云ふことだが、實際戦ふ心算だらうかなア。どうも怪しいものだぞ。河鹿峠の戦鬪に於て、片彦將軍の手竝は遺憾なく、其卑怯振を暴露したのだから、ヨモヤ捲土重來の勇氣はあるまい、加ふるに全軍の勢力を兩分して了つたのだから、随分怪しいものだなア

甲「ナア二、ああ言つて、あこに糞詰りといつて空威張りをしてるのだ。三年たつても五年たつても、齋苑館へ進軍などとは思ひもよらぬことだ。さうでなければ、あのやうな半永久的な陣屋を造る筈がない。キツと持久戦をやる心算だらうよ。何程敵が強いと云つても、敵の大將の年が老れば、戦はずして死んで了ふのだから、それを待つてゐるのだよ。ハハハハハ」

乙「此ビクトル山の陣營も比較的立派なものが出来てゐるなり、先繰々々、増築してゐることを見れば、ランチ將軍の行り方に倣つて、何時迄も此處に滞陣する心算だらうかなア」

甲「きまつた事だ。よく考へて見よ。ハルナの都へは何程厚顔無恥の將軍だとて、のめめと之丈の軍隊を引率れて歸る譯にはいかうまい、ぢやと申して齋苑の館

へは猶更行けず、何でもエルサレムの黄金山へ攻めよせるといふ宣言だが、之も亦怪しいものだ。たつた一人の治國別の言靈とやらに、脆くも逃散つた將軍だもの、黄金山と雖も、治國別以上の人物が二人や三人は居るのはきまつてゐる。さうだから先づ此處で王者氣取りとなつて、新しい國を造り、ビクトル山を中心に王城を作り、刹帝利氣取となつて永住する考へだと、俺は直覺してゐるのだ。さうでなくちや、こんな手間の要つた陣構へをする筈がない……だないか」

乙「さう聞けばさうかも知れぬのう。オイ丙の奴、チツと頭を改良して、ここ一年許り辛抱したらどうだ。伍長位にはなれるか知れないぞ」

丙「俺の考へではビクトル山の陣營は到底永續せないだらうと思ふよ。どうしてもロートル・ダンゼーが迫つて来る様な心持がしてならないワ。よく考へて見よ。齋苑の館からは、仄聞する處に依れば、照國別、玉國別、黄金姫、初稚姫、治國別と云ふ宣傳使隊が、ハルナの都へ押寄せて行くといふことだないか。そして其行掛の駄賃に所在バラモン軍を言向和して、暴風の原野を薙ぐ如き勢で進んで來るといふことだから、キツとビクトル山へも押寄せて來るに違ひない。貴様は此

處にへ張りついてさへ居れば、やがてオー・シヤンスが吾身に降つて来るやうに  
思つてゐるが、そんな泡沫に等しい考へは念頭よりキツパリ削除せなくちや、ア  
フンと致さなならぬ破目に陥るぞ、チツとコンモンセンスを輝かして、前後の状  
況を考へて見よ」

甲「ヘン、一寸先は暗の夜だ。吾々如き人間の分際として、世の中の變遷が分る  
ものかい。刹那心を楽しむのだ。三五教の教理にも……取越苦勞をすな、又過越  
苦勞も致すな……とあるだないか。其時や其時の又風が吹くさ、萬々一、三五教  
の連中が猛虎の勢で迫つて來た時には將軍様に倣つて戦術の奥の手を出し、尻に  
帆をかけて、逸早く遁走すれば、それで可いのだ。それがセルフ・ブリサベーション  
の最必要とする要件だ。アハハハハ」

丙「何とマア、貴様達は、善とも惡とも判別し難き代物だなア。それでも人間だ  
と思つてゐるのか」

甲「ヘン、馬鹿にするない。之でもヤツパリ一人前の哥兄さまだ。世の中は表面  
は軍律だとか、法律だとか、道徳だとか、節制、カウンテネンスだとか云つて、

リゴリズムを標榜してゐるが、其内面はヤツパリ内面だ。詐り多き現代に處して、馬鹿正直なことを墨守してゐても、世の中に遅れる計りで、しまひには廢人扱にされて了ふよ。それよりも大自在天様から與へられた同様の此盗み酒、ホリ・グレルを傾けて、神徳を讚美し、生き乍ら天國の生涯を、假令一瞬間なりとも樂しむが人生の極致だ。世の中は食ふ事と飲む事とラブする事を疎外したら、到底生存することは出来ない。ぢやと云つて、斯かる殺風景な陣中に於て、ラブ・イズ・ベスト論を提出した所で、有名無實だから、先づ手近にあるホール・ワインでも傾けて、浩然の氣を養ひ、イザ一大事と云ふ場合には、吾れ先に戰術の奥の手を發揮さへすれば至極安全といふものだ。貴様の様にクヨクヨと致して、サイキツク・トラーマを續けてゐると、遂には神經衰弱を來し、地獄界の餓鬼さんの様になつて了ふぞ。人間は心の持様が第一だ。今日は新しい人間の社會だ。一日も早く悔い改めて、ジウネス・アンテレク・テューエルの域に進み、社會の波に呑まれない様にせなくちや人生は嘘だ。素より神經質な道德論に捉はれてゐるやうな者が、惡虐無道のバラモン軍に従軍するものか。貴様は軍人になるなんて、



性に合うてゐない。サイコ・アナリスに仍つて調査したならば、キツと汝の心中には弱蟲が團體を組んで、現世を呪うてゐる馬鹿者の軍政署となつてゐるだらうよ。悪人は悪人とユニオンし、善人は善人と結合するのだから、貴様は此河を向ふへ渡つて、治國別さまでもお迎へ申し、辨當持でもさして頂くが性に合うて居らうぞや、イヒヒヒヒ

と論争してゐる。河の向方より七八人のナイトは三葉葵を染めなした手旗をかざし、長閑な流れを驀地に渡つて、ザワザワと此方に向つて渡り来る。一同は何事の突發せしならむと、酒の酔も醒め、目をみはつてゐる。

(大正一二・二・一二 舊一一・一二・二七 於龍宮館 松村眞澄録)

## 第二章 蜉蝣(一三六五)

ライオン河の下流ビクトル山を中心として、此處はウラル教を信ずるビクトリ

ア王が刹帝利として近國の民を守つてゐた。此王國は東西十里、南北十五里（三十六町一里）の餘り廣からぬ國であつた。國名をビクトリア王は本年殆ど七十才に餘る老齡である。而して不幸にして嗣子がなかつた。後のヒルナ姫は元はビクトリア姫の侍女であつたが、何時の間にか王の手がかり、次第に權勢を得て、城中の花と謳はれ、一切を切りまはしてゐた。而して年齡は正に二十三才、女盛りである。ヒルナ姫の歡心を得むとして數多の官人共は媚びを呈し、國政は日に月に紊亂し、國民怨嗟の聲四方に充ち、所々に百姓一揆の如きもの勃發し、收拾す可らざるに立到り、ビクトリア王家は已に傾かむとするに立到つた。左守神のキュービットは極めて忠實な老臣であり、王の爲に苦心を重ねて、國家を守らむとしてゐた。之に反して右守神のベルツは奸佞邪智の曲者にして、ヒルナ姫に取り入り、いろいろの入れ智恵をなして、刹帝利も百官も眼中におかない位な横暴振を發揮してゐた。ヒルナ姫の意見はベルツの意見であり、ベルツのすべての畫策は、すべて、ヒルナ姫の口に仍つて傳へられてゐた。そして左守神のキュービットにはエクスといふ忠良な家令があり、右守のベルツにはシエールと

いふ奸悪な家令があつて、主人の右守と共にあわよくば、ビク國を占領せむと日夜肝膽を碎いてゐた。ベルツはシエールを吾居間に招き、一間を密閉してヒソビソと協議を凝らしてゐる。

ベルツ「オイ、シエール、どうだらうな、ヒルナ姫は殆ど藥籠中の者となつたが、併し乍ら頑強なビクトリア王は何となく某を嫌忌する様子現はれ、キュービットを近付け吾進言に一切反抗的態度を試みられるのは、實に吾々の目的の一大障害と言はねばならぬ。將を射る者は先づ馬を射るといふから、彼れキュービットを排斥するか、或はして了はなくちや、九分九厘迄成功した吾々の陰謀が水泡に歸するのみならず却て如何なる重刑に處せらるるやも計り難い、何とか可い工夫はあるまいかな」

シエール「右守様、それは御心配に及びませぬ。ビクトリア王は已に七十の坂を越えた老人、餘り急がず共、餘命幾何もありますまい。なまじひに事をあげて、國民の信用を失墜し、惡逆無道不忠不義の徒と言はれるよりは、ここ暫くの御辛抱だから、御待ち遊ばすが上分別と存じます。ひるがへつて國民の状態を考へま

すれば、生活難に苦しみ重税に怨嗟の聲は四方に満ち、何時暴動が勃發するやも計られませぬ、革命の機運は日に日に盛んになりつつある矢先、無理な事を致せば益々天下の紛亂を増やうなものでムいませう、幸ひビクトリア王には嗣子もなく、又ヒルナ姫様は腰元の成上りですから、王の没後は貴方の自由自在でムいませう。今の内に充分なる畫策をめぐらし、ヒルナ姫様が貴方を御信任遊ばすを幸、潜勢力を養つておけば、まさかの時になつて、貴方の願望は自ら成就致しませう。夫れが上分別と考へます」

ベルツ「それもさうだなア、併し乍らビクトリア王は至つて身體健全なれば、まだ二十年位は大丈夫だらう。何程時節を待つと云つても、此先二十年も待つ事は英氣に充ちた吾々、腕鳴り、胸轟いて、こらへ切れるものではない。モツと手早く埒よく目的を達する方法手段はあるまいかな」

シエール「知識の寶庫と綽名をとつた私、如何なる妙案奇策も持つて居りますが、今日の事情が即行を許しませぬ。如何となれば、今日は國內紛亂の極に達し、極端なるレーストレイントを加へて漸く、現状を維持してゐる状態でムいませれば、

あわてずに時を待つが上分別だと考へます。王の勢力日々衰へ、四海をコントロールする實力なき今日、何人の神算鬼謀も之を鎮定することは容易の業ではありませぬ。故に吾々は寧ろ、今日の世態を利用し、益々手をまはして國民を煽動し、ビクトリア王をして手を施すに術なからしめ、自發的に退隱させざる方が、最も賢明なる行り方と愚考致します」

ベルツ「成程、それは妙案だ。就いては、シエール、お前に成案があるだらうな」  
シエール「ない事はムいませぬが、後の喧嘩を先にせいといふ事がムいますから、貴方が刹帝利にお成りになれば、私をキツと左守に任命して下さるでせうか。それが決定せなくちや、働き甲斐がありませんから」

ベルツ「ハハハハ如才のない男だなア、目的成就の上はキツと重く用ゐてやる。それを楽しみに一つ骨を折つてくれ」

シエール「只重く用ゐると云はれた丈では、朦朧としてをります。キツパリと左守にすると云ふ言質を預かつておきたいものです」

ベルツ「苟もビク一國の刹帝利たる者は、賢臣を選んで國政を任さねばならぬ。」

何程シエールが伶俐だと云つても、到底國政を料理する丈の技能は未だ備はつて居ない。そんな取越し苦勞を致さずに主人の命令だ。實行に着手したら如何だ」

シエール「ハツハハハハ、御主人様、貴方も随分ズルイお方ですな。狩獵つきて獵狗煮らるる様な不利益な事は、賢明なる私には到底出来ませぬ。要するに貴方は私に對し、左守の資格がないと仰有るのですな。宜し、左様の事ならば、かやうな反逆を企てて危い藝當をするよりも、貴方の陰謀を王の前に素破抜きませうか、如何でムる」

とソロソロ爪を隠してゐた猫が、カギ爪の先をみせかけた。ベルツは驚いて、ベルツ「あ、ウム、さう怒つちや話が出来ない。實の所はお前を左守に任じてやる事はチャンと心の中に決定してゐたのだ。併し乍ら、お前の熱心を調べる爲に一寸擲擧つてみたのだよ。ハハハハ」

シエール「御主人様、擲擧ひ所でありますまい、千騎一騎の正念場ですよ」

ベルツ「英雄閑日月あり、假令陣中に於ても歌をよみ、尺八を吹き、悠悠閑々として、おめず臆せず、騒がず焦らず、談笑の間に一切萬事を解決すると云ふ英雄

的襟懷だ。何と智勇兼備の勇將の心事は違つたものだらう。オツホホホ  
シエールは悪人の癖に、比較的馬鹿正直な奴である。ベルツの舌にうまく舐  
られて、身知らず的に途方途徹もない悪事を遂行せむと腕をうならして、雄健び  
してゐる。

シエール「成程、一切萬事諒解致しました。かかる名君とは知らず、無禮の申條、  
何卒御容赦を願ひます」

ベルツ「義に於ては主従なれ共、情に於ては親と子の關係だ。言はば拙者は親、  
其方は子である。親が子を愛するのは天然自然の道理だ。そして其子の心膽を練  
り、知識を啓發し、有爲の人材となさしめむとして、苦言を吐き、鞭撻を加ふる  
は、ワイズベアレント・フツドとも云ふべきものだ。今後は何事に係はらず、暫  
く吾意思のままに、舍身的活動をやつて貰ひたいものだなア」  
シエール「へへへ持つ可きものは家來なりけり……否主人なりけりだ。然らば  
之より君の命に仍つて、千變萬化の祕術を盡し、君をしてビク一國の刹帝利たら  
しむべく活動仕らむ。吾成功を指折り數へ、お待ち下され」

ベルツ「ああ勇ましし勇ましし、汝が雄健び、前途有望、目的の彼岸に達するは間もあるまい、ても扱ても心地よやなア」

と之れ又兩手を伸ばし、拳を握り、左右の膝を交々起伏させ乍ら、床もおちよとばかり雄健びしてゐる。

餘りの高い聲が聞えるので、ベルツの妹カルナ姫は次の間に走せ來り、兩人の談話をスツカリ立聞き、顔を顰め乍ら、さあらぬ態にて、

カルナ姫「お兄い様、御免なさいませ」

と這入つて來た。シエールは兩手を仕へ、さも恭しく、

シエール「これはこれは、カルナ姫様、御壯健なお顔を拜し、シエール家令身に取、恐悦至極に存じます」

カルナ姫「お前はシエールだないか、最前からお兄様と面白さうに話をしてゐましたね、襖に隔てられ、ハツキリ何事か分りませなんだが、容易ならざる事のやうに思はれます。どうぞ聞かして下さいませ」

シエール「へ、イヤ何でもムいませぬ、御主人様とお酒に酔ひまして、つい昔の



英雄物語を致して居りました。へへへへ、随分面白い話でムいましたよ」

カルナ姫「昔の物語にもビクトリア王様やヒルナ姫様、キュービットの左守など

いふ方がおありなさつたのでムいますか」

と優しい目を光らせ、少しく語氣を強めて、睨つけるやうに言った。右守のベル

ツは……此陰謀を妹に聞かれちゃ大變だ。妹の奴、左守神の倅ハルナに秋波をよ

せてゐよるのだから、もしや内通でも致しはしようまいか、戀愛に熱した時は、

親兄弟までも脱線して忘れるものだ、ハテ困つたことだ……とハートに波を打た

せたが、ワザと素知らぬ面で、

ベルツ「ハハハハハ、面白い様な……殺伐な昔物語、女の聞くべきものではない、

お前は早く奥へ行つて、お前の好きなラムールでも繙く方が可いワ」

カルナ姫「何だか、貴方方のお話を聞くと、胸騒ぎが致しまして、ヒストリア・

アモリスなどを耽讀する氣にもなれませぬ。實に殺風景な貴方の御計畫、額に凶

徴が遺憾なく現はれて居りますぞや」

ベルツ「男の居間へ女が来るものではない、支那の聖人がいつただらう。男女七

才さいにして席せきを同おなじうせずと云いふだないか。サ、早はやく彼方あちらへ行ゆかつしやれ」

カルナ姫ひめ「何なんとアマ、お口くちは重寶ちゆうほうなものですなア。最前さいぜんからの事情じじやうは、實じつの所ところは

スツカリ聞ききました。何程なにほどお隠かくしになつても、最も早はや駄目だめでムいますよ」

ベルツ「チヨツ、困こまつた妹いもうとだなア、オイ、カルナ、お前まへは兄あにを助たすける氣きはないか」

カルナ姫ひめ「ハイ、貴方あなたの出様でやうによつて、お助たすけせない事こともムいませぬ。貴方あなたは左さも

守司りのかみさま様の御子息ごしそくハルナさまと結婚けつこんさしてくれませんか」

ベルツ「ウム、さうだなア、又また、考かんがへておかう」

カルナ姫ひめ「貴方あなたが目めの上うへの瘤こぶ、目的もくてきの邪魔じやま者と附つけ狙ねらふ左守さもり様の御子息ごしそく、ハルナ

さまへ妹いもうとをやるのはさぞ御迷惑ごめいわくでせう。併しかし乍ながら、戀愛れんあい問題もんたいと貴方あなたの問題もんたいとは別べつ

物ものですから、御心配ごしんぱいなく許ゆるして下くださいませ。私わたしとハルナさまとの仲なかには決けつして忌いま

はしい關係くわんけいは結むすんで居をりませぬ。相思さうしの間柄あひだからで、極きはめてチヤステイテイーな戀愛れんあい

でムいます。何時いつ迄までも年頃としごろの娘むすめを、セリバシーにしておくのは、兄あにとしての役やくが

濟すみますまい。ホホホホ」

ベルツ「ヤア、今時いまどきの女性ぢよせいの厚顔無恥こうがんむちには實じつに呆あきれ返かへらざるを得えないワ」

カルナ姫「貴方が政治欲に耽り、ヒルナ姫様に秋波を送つてゐるやうなものですよ。併し貴方は決して正當と認める事は出来ませぬ……が、私の請求するコンジユギアール・ラブは正當の婦人としての権利ですから、此プロブレムに就いては、貴方も無暗に拒む譯には参りますまい。なア、シエール、さうぢやないか」と言葉を家令の方に移した。

シエール「成程、姫様のお言葉は少しも矛盾はありません。イヤ、私も大に共鳴致します。就いては姫様に考へて頂かねばならぬ事がある。貴方はハルナさまを熱愛してゐられる如く、左守神もヤツパリ愛して居りますか」

カルナ姫「戀しき夫の父君でゝいますもの、愛するといふよりも寧ろ尊敬を拂つて居りまする」

シエール「お兄様を尊敬なさる程度に比ぶれば餘程の徑庭があるでせうなア」

カルナ姫「そらさうです共、兄妹は他人の始まりといふだありませんか、ハルナさまと夫婦になり、子が出来ようものなら、それこそ親密な親子の關係が實際的に結ばれるのですから、左守神さまを兄に勝つて尊敬するのは當然ですワ」

シエール「イヤ、此奴ア怪しからぬ、モシ、姫様、元を考へて御覽なさい。御兄様は本當の同胞でありませぬか、ハルナさまはアカの他人ですよ。只結婚と云ふ形式に仍つて、夫婦となり親子と名がついたものでせう。そこをよくお考へに  
ならなくちや、肝心のお兄さまに對し、血で血を洗ふやうな、慘事が突發する  
かも知れませぬ。能く胸に手を當てて考へて戴きたいものですな」

カルナ姫「ハイ、何れ熟考の上御返事を致しませう」

ベルツ「切つても切れぬ、同じ母體から生れた兄妹といふ事を忘れないやうにして  
くれよ。ああ困つた妹だなア。之だから女に高等教育を施すと困るのだ。俺の  
両親は新しがりやだつたから、たうとうこんなアバズレ女にして了つたのだ」  
カルナ姫「ホホホホ、私ばかりか、お兄い様迄、こんな惡黨に、高等教育を施し  
て作り上げて了つたのですよ」

ベルツ「チヨツ、コレ、カルナ、能く思案をして、利害得失を考へたがよいぞや。  
キット兄妹の爲にならないやうな事をしてはなりませんぞ」

カルナ姫「ハイ承知しました。何卒兄妹のために兄妹の戀愛を妨害するやうな事

は考へて貰つちやなりませぬぞや、ホホホホ、左様ならばお二人さま、十分に御  
思案をなさいませ。そして良心に恥るやうな事は一刻も早く改めて頂きたいもの  
です。ハイエナ・イン・ベデコーツ的行動をやつて、吞臍の悔を残さないやう、  
そののみ何卒も一度御熟考を願ひします<sup>□</sup>  
と二人を諫め悠々として、吾居間に歸り行く。後に二人は呆然として吐息をもら  
し、暫し無言の幕を開いてゐる。

(大正一二・二・一二 舊一一・一二・二七 於龍宮館 松村眞澄録)

### 第三章 軟文學(一三六六)

ビク王國の制度は、左守司は王の師範役となり、國內一切の樞要なる事務を取  
扱ふこととなつてゐた。そして右守司は軍馬の權を握り、内寇外敵の鎮壓に努む  
る職掌であつた。左守司のキュービットは、家令のエクスと共に密談を凝らして

ある。

左守「エクス、どうも今日の國情は日に月に悪化し、國民怨嗟の聲は四方に充ち、各所に動亂起り、暴徒は其隙に乗じて民家を焼き放ち、白晝強盜往來し、人を斬り、婦女を辱め、天下は麻の如く紊れて來たではないか。ビクトリア王様も御老齡の身を以て、日夜宸慮を惱ませ玉ひ、餘に向つて種々と鎮壓の道をお尋ね遊ばすけれ共、何を云うても斯かる時には兵馬の權を握つてゐない爲に、強壓的に一時なり共鎮壓することが出来ない。何とかして右守司の職權を左守に移さなくては仕方がない。何とか妙案があるまいかな」

エクス「何と申しまして、右守司、奸佞邪智にして、ヒルナ姫様に取入り、權を恣に致して居りますれば、刹帝利様も、左守司様も、殆ど有名無實の有様、實に殘念でムいます。加ふるに右守司、野心を包藏し、國內の動亂を煽動し、紛擾をして益々大ならしめむとするの傾向がムいます。モ少し早く軍隊を動かさし、鎮撫にかかつたならば、斯様な事にはならないのですが、右守司は胸に一物ある事として、此紛擾を傍觀し、軍隊を以て民に向ふは、政治の本義ではない、民心を

怒らしむるは危険至極だと主張し、蔭から暴動を煽動し、自發的に貴方の退位を餘儀なくせしめ、自ら取つて代らむとの野心が仄見えて居ります。何とか今の内に用意を致さねば、取返しつかぬ大事が起るだらうと、私も晝夜心膽を碎いて居ります。加ふるに、甚申上げ難い事乍ら、左守司の跡をお繼ぎ遊ばすべき御賢息様は、耽美生活だとか、軟文學だとか云つて、荐に妙な議論をまくし立て、國家の事などはチツトも念頭においてゝらぬのだから、困つた事でゝいます。左守「如何にも、親の目にも、彼奴は困つた奴だと思つてゐるのだ。何とか彼を甘く改心させ、王様の爲に舍身的の忠勤を勵むやうにさせたいものだ。併し仄かに聞けば倅のハルナは右守の妹、カルナに對しラブ・レタースを取交してゐるとやら聞いたが、それが果して眞なら、何とかして此結婚を成立させ、災を未發に防ぐ手段を廻らさねばならぬ。國內の紛擾を治めむとすれば、先づ城内の暗闘を防ぎ、一致團結しておかねば右守司の術中に陥るやうな事があつては實に困るからなア」

アクス「如何にも御尤もな御説、ハルナ様とカルナ姫との間に、左様な消息があ

るとすれば、一つハルナ様に此處に来て貰つて、御意見を承はつた上、何とか工夫を致さうだありませぬか」

左守「それも一つの方法だ。エクス、お前一寸俵に會うて、意見を叩いて来てくれまいかな」

エクス「ハイ畏まりました。直様ハルナ様に御面會を願ひ、御意見を承はつた上、詳細なる復命を致しませう」

と左守の室を後にしてハルナの居間を訪れた。ハルナは一生懸命に机に凭れて、少し青白い顔をし乍ら、マトリモーニアル・インステイチューションズを繕き、読み耽つてゐた。そこへ頑強な無粋な忠義一途のエクスが、古い頭をニユツと突出して、糊つけ物のバチバチを着たやうな四角張つたスタイルで、ソツと襖を引あけ、

エクス「ハイ、御免下さいませ。エクスでムいます」

ハルナは此聲が耳に這入らぬとみえて、一生懸命に結婚制度史の上に目を注ぎ、ゲツティング・マリドだとか、フヱジオロチー・オブ・ラブなどと首をかたげて



かんが 考へて居る。エクスは頓狂な聲を出して、

エクス「モーシ、ハルナ様」

と呼はる聲にハツと氣がつき、慌てて結婚制度史を机の引出しにしまひこみ、素知らぬ顔をして、膝の上に両手をキチンとおき、

ハルナ「ヤ、お前はエクスだないか、僕が勉強してる所へ突然やつて来たものだから、面くらつて了つたよ」

エクス「又軟派文學でも耽讀してゐられましたのでせう」

ハルナはハツとし乍ら、首を左右に振り、

ハルナ「アイヤイヤ、軟派の文學などは青年の讀むべきものでない、俺は硬派文學を耽讀してゐるのだ」

エクス「それでも、貴方、机の上にマトリモーニアル・インステイチューションズがチヨコチヨコおいてあるだありませぬか」

ハルナ「ウンあれか、あれは結婚制度史だから、お前のやうな既婚者は必要はないが、吾々には強ち不必要と斷ずることは出来ない。併し乍ら少し許り軟派でも

硬派を研究比較上、一度は読んでおかなくちやならないからなア」

エクス「もし、ハルナ様、私は軟文學が好物でムいますよ。貴方の不在中にも、

チヨコチヨコ拜借しまして、覗き読みをさして頂きましたが、随分面白いもので

すな」

ハルナ「吾々の参考書を無断で、お前は讀んだのか、怪しからぬだないか」

エクスは頭を掻き乍ら、

エクス「へー、誠に濟みませぬ、餘り面白いものですから、お父上に、ソツとお

見せ申しました所、此様な軟文學は汚らはしい、雪隠壺へでも放り込んで了へ：

…とお目玉を頂くかと思ひの外、流石はハルナ様のお父さま丈あつて、へへへへ

へ、開けたお方ですよ。内の倅もここ迄徹底したか、流石は私の息子だ。これな

らば左守の後を繼がしても大丈夫だ…と以ての外のお喜び、口を極めて御讚嘆、

イヤもう此頑固爺も意外の感に打たれ、それから後といふものは、スツカリ軟派

に改悪…否改良致しまして、此古い頭もチツと許り新しくなりました。此書籍

のお蔭で全くエータ・ヌーバの氣分になり、どこともなしに心が若やいで來まし

たがな、アハハハハ

とうまくハルナの精神にバツを合さうとしてゐる其老獺さ。ハルナはエクスの中を知らず、大に喜んで、

ハルナ「成程父上様も、時代に目覺め遊ばしたと見えるなア、イヤ有難い有難い。元より左守家は殺伐な軍馬の權を扱ふ家だない、文學の家だから、お父さまがさうなられるのも當然だ。お前も今迄の様に拙者の戀愛論に就て、此上ゴテゴテ苦情は云はないだらうなア」

エクス「ハイ、仰せ迄もムいませぬ、頭は禿げても、氣はヤツパリ十七八、貴方の御主義に全部共鳴して居ります。アハハハハ」

ハルナ「父上様はそこ迄人間味がお分りになつた以上は、僕の主義にキット賛成して下さるだらうかな。レター・ライタの中に普通一般の往復文の中にラブ・レターズが混入してゐる今日の教育法だから、ラブ・イズ・ベストの眞理は分つてゐるだらうなア。コーエデュケーションの行はれてゐる今日、古い道徳に捉はれて、夫婦別あり、男女席を同うせずなどと、舊套語をふり廻したり、門閥結婚、

強壓結婚、無情結婚、自分以外の者が定める結婚などの迷夢は醒まされたであらうなア

エクス「決して御心配なさいますな。お父さまはジュネス・アンテレック・テールですよ。キヨロキヨロしてゐると、貴方よりも遙かに新しうなられますからな」

ハルナ「さうすると、僕のゲツティング・マリドに就ては決して干渉せないと云ふ御方針だな。今迄お前達の云つて居つた、アメージング・マリーチな事を強られると、俺のやうな文明人士はサイキック・トラウマを來し何時の間にか、ヒステリックになつて了ふ。今日の親はすべてを其子の自由意志に任すのが賢明なる親たるの道だからなア」

エクス「實に貴方は明敏な頭腦の持主ですな、此親にして此子あり、イヤ早、此頑固なエクスも恐れ入りました。付いては貴方が理想の妻となさる御方はきまつて居りますか」

ハルナ「きまつたでもなし、きまらぬでもなし、今熟考中だ。何ぞ好い機會があ

つたらお前まへに相談さうだんしてみたいと思おもつてみたのだが、何なに分ぶん今いま迄までのお前まへと俺おれとは思想しきう上やうの距離きよりが餘あまり甚はなしいので、つい言いひ出だしかね、今日こんにち迄まで煩はん悶もん苦く惱なうを續つづけて來きたのだよ」

エクス「ハハハ、そんな御ご心しん配ばいがいりますか、娘むすめが乳う母ぼに打うちあけるやうに、私わたしは左さ守もり家けの家か令れいでムごいますから、萬まん一いちお父とうさまが亡なくなられた後あとは、貴あな方たの直ち接よくせつの御ご家け來らい、どんな事ことでも、腹ふく藏ざうなく仰おつ有しやつて頂いたきたうムごいます。心こころの祕ひ密みつを家か令れいの私わたしにお打うち明あけなさらぬとは、實じつにお水みづ臭くさい御お心こ根ころね、エクスはお恨うらみ致いたします」

とワザとに袖そでに空から涙なみだを拭ぬぐふ。ハルナは得意とくになり、ハルナ「ヤア、そんなら打うち明あかすが、實じつの所ところは右う守もり司のかみの妹いもうとカルナ姫ひめとゲツティング・マリドの豫よ約やくが出來できてゐるのだ」

エクス「エツ、何なんと仰おほせられます、あのカルナ様さまと情じやう約やく締てい結けつが整ととのうたと仰おつ有しやるのですか……ヘーエ……何なんと貴あな方たも辣らつ腕わん家かですな。此このエクスもゾツコンから感かん服ぷく致いたしました。ヤ、大おほいにおやりなさいませ、雙もろ手てをあげて家か令れいのエクス贊さん成せい致いたします」

ハルナ「お前まへは贊さん成せいしてくれても、肝かん心しん要かなめの父ちち上うへの御ご意い思しを伺うかはねば、まだ安あん心しん」

する所へは行けない、よく考へて見よ。右守左守兩家の暗闘は時々刻々に激烈になつて來てゐるのだからなア」

エクス「貴方にも似合ぬ事を仰有いますなア。兩家の暗闘は暗闘だありませぬか。人生に取つて肝心要の、それが爲に、結婚問題までも犠牲にするといふ事がありますか、ソレヤ問題が違ひますよ。キットお父上も此問題に就いては賛成遊ばすことは受合です。貴方の決心が定まれば、一時も早く、及ばず乍ら此エクスが幹旋の勞をとらして戴きます。御安心なされませ」

ハルナはさも嬉しげに、包みきれぬやうな笑を頬に泛べて、恥かしげに俯いた。エクスはしてやつたりと、心中に頷き乍ら、  
エクス「ハルナ様、善は急げでムいますから、直様お父上に申上げ、先方に掛合ふ事に致しませう」

とイソイソとして、此場を立出で左守司の居間に一伍一什を報告すべく進み行く。後にハルナは天にも上る心地して、  
ハルナ「あああ、時節が來たかなア、よく開けた父上だ。盤古神王様、何卒此戀

が完全くわんぜんに成就じやうじゆいた致しますやう様に、守まもらせ玉たまへ、幸さきはひ玉たまへ、惟かむながらたま神靈ちはへ幸倍ませ惟かむながらたま神靈ちはへ幸倍ませ  
ませ」

と合掌がつしやうし、結婚けつこんの成立せいりつを祈願きぐわんした。天井てんじやうから鼠ねづみがクウクウクウ　チウチウチウ  
チーチー　ドドドドド、バタバタバタと鳴なき乍ながら走はしる聲こゑが聞きこえて來くる。

(大正一二・二・一二　舊一・一二・二七　於龍宮館　松村眞澄録)

#### 第四章　蜜語みつご（一三六七）

ビクトリア城じやうの一ひと間まにはヒルナ姫ひめが只ただ一人ひとり、琴ことを弾だんじながら述懐じゆつくわいを歌うたつてゐる。

ヒルナ姫ひめ　此世このよの司つかさと現あれませる　盤古ばんこ神王しんのう鹽長彦しほながひこのみこと命ことは

四方よもの神々かみがみ民草たみぐさを　常世とこよの春はるの神國しんこくに

救すくひまさむと御心みこころを　惱なやませ玉たまふぞ有難ありがたき

妾は若き身を以て

ビクトリア姫に宮仕へ

朝な夕なに赤心を

籠めて誠を盡しつつ

樂しき日をば送る折

王妃の君は如何しけむ

無常の風に誘はれて

あの世の人となりましぬ

妾は歎き悲しみて

朝な夕なに大神に

其冥福を祈れども

逝きにし人は歸り來ず

いとど淋しき秋の夕

野邊にすだく蟲の聲

いとど晴れを催して

生くる甲斐なき惱みに沈む

草葉の露に照る月も

何處ともなく光褪せ

星の影さへおぼるげに

見ゆる折しも後より

ヒルナ ヒルナと玉の聲

乙女の胸は轟きつ

後振返り眺むれば

思ひもかけぬビクトリア王の君

此方に來れとさし招き

妾を居間に伴ひて

いとも優しき言の葉に

姫君様の御心を



推し量らひて一度は 否みつれ共なかなかに

許し玉はぬ吾君の 厚き心に絆されて

女御更衣を踏み越えて 後の宮とのぼりける

さはさり乍ら何となく 心おちぬ思ひにて

三歳四歳を越ゆる内 此上なき者と妾をば

慈まししが君は 今は冷たき【あき】風の

吹き荒むこそ悲しけれ せめて妾が心をば

慰めくるる者あらば 永き一夜を語らひて

吾身の憂を晴らさむと 思ふ折しも顔容

いと美はしき右守の司 べルツ司が忠實かに

何くれとなく妾が身を 守り玉へる嬉しさよ

誠のこもる彼が心に絆されて 割りなき仲となりつれど

人目を忍ぶ戀の仲 女御更衣や下女

下僕等に二人が仲を 悟られはせぬかと朝な夕な心を碎き

身を苦しむることは幾度か 日に日に積もる戀の淵  
 深くはまりし二人が仲 もしや吾背の御耳に  
 響きはせぬかと 心を千々に砕きつつ  
 悲しき月日を送る身の 何と詮方なく涙  
 盡きせぬ縁を永久に 守らせ玉へウラル教の  
 教を守り玉ふ 鹽長彦の大神よ  
 吾背の君は七十路を 早くも越えさせ玉ひぬれど  
 いとど頑固にましまして 妾が新しき思想を  
 汲ませ玉はず 古き聖の道をのみ  
 朝な夕なに楯となし 世は追ひ追ひと紊れはて  
 社稷危くなりつれど 左守司のキュービット  
 彼が頑迷不靈より 時代思想に逆行し  
 益々世をば亂し行く 實に淺まし世の中よ  
 時代に目醒めし右守司 ベルツの司は逸早く

妾が心を汲み取りて

古き尊きビクの國

いや永久に守らむと

赤き心の限りをば

盡させ玉へど背の君や

左守の君は一々に

右守の言葉を否みつつ

至治太平の經綸を

申上ぐれど何時とても

手もなく拒絶ましましぬ

ああ如何にせむビクの國

柱ともなり杖となり

千代に八千代に支へむと

思ふ人としてあらざるか

右守司は幸に

兵馬の權を握れ共

妄に兵を動かすは

却て世人の心をば

悪化せしむるものなりと

平和の意見を主張して

防ぎもやらず何時迄も

如何なる奇策のましますか

動かざるこそうたてけれ

さはさり乍ら妾とて

吾背の君を振り棄てて

道ならぬ道を行くべき

女にあらねども

世の成行を伺へば

右守うもりに依よるより外ほかはなし　ああ惟かむながらかむながら神々々  
神かみの御魂みたまの幸さちひて　一日ひとひも早はやく背せの君きみや  
左守さもりの司かみの頑迷くわんめいを　晴はらさせ玉たまひてビクの國くに  
いや永久とこしへに守まもらせ玉たまへ　ヒルナの姫ひめが大前おほまへに  
玉たまの小琴をことを弾だんじつつ　神慮しんりよを慰なぐさめ願ねぎまつる  
』

斯かかる所ところへ恭うやうやしく衣紋えもんを繕つくろひ、二三にさんの城內じやうないの役員やくゐんに導みちびかれて、參上さんじやうしたのは右守うもりのベルツであつた。ベルツは主人しゅじん氣取きとりで、さも横柄わうへいに入り來きたり、三人さんにんの役員やくゐんに向むかひ、

ベルツ「ヤア、御苦勞ごくろうでムごまつた。少時しばし國政上こくせいじやうの事ことに就ついて、姫様ひめさまにお伺うかがひ致いたした事ことあれば、汝等なんぢらは元もとの席せきに歸かへつたがよからう」

「ハイ」と三人さんにんは其場そのばを立去たちさつた。そして三人さんにんはソツと次つぎの閒まに姿すがたを隠かくして、二人ふたりの談話だんわを一いち言ごんも洩もらさじと聞耳ききみみ立ててゐた。之これはラム、リツト、ベールといふ城內じやうないの屬官ぞくわんである。そしてヒルナ姫ひめと右守うもりの司かみの閒柄あひだがらが此頃このころ少し變へんなので、左守さもりの

司の内意を受けて常に注意の眼をみはつてゐたのである。

ヒルナ姫、ベルツはラム、リット、ベールの三人が次の間に聞いてゐるとは少しも氣付かなかつた。ベルツは横柄に姫の前に胡座をかき、煙草を熏らし乍ら、ベルツ「姫さま、俄に御相談申したい事が出来ましたので、一寸参りました」  
ヒルナ姫「貴方は何とか なんとか云つて、妾に遠ざかること計り考へて居りますね。今日の御相談と云ふのは、又、例のお惚氣でせう。左様な事は、國家多事の今日、耳を藉す譯には参りませぬ。貴方はテーナさまの所へ行つて、御相談なさる方が可いでせう、チツと方角違ひぢやありませんか」

ベルツ「さう、いきなり攻撃の矢を向けられては恐れ入ります。八尺の男子も到底太刀打が出来ませぬ。今日参りましたのは左様な陽氣な事ぢやムいませぬ。小にしては右守家の一大事、大にしてはビク一國の一大事でムいます。夫れ故貴女様にトツクリと御相談を申し、御意見を承はつた上處決しようと思ひ、罷出でました。何卒眞面目にお聞き下さい。貴女は此右守を藥籠中の者となし、御都合の好い時計りうまく利用して、用がなくなれば、弊履を捨つるが如き残酷な目に會

はす御考へでせう、どうもマ一つ、貴女に對して氣のゆるせない所があるやうに思はれてなりませぬワ」

ヒルナ姫「ホホホ、ようそんな事が、どこを押へたら仰有れますか、貴方と私の仲は切つても切れぬ關係が結ばれてゐるぢやありませんか。イターナルにユニオンして此國家を守らうと御約束されたでせう。それに就いても貴方の要求を入れて、女の行く可らざる道迄行つたではありませんか。左様な事を仰有るとは、實に殘酷と申すもの、少しは妾の心も推量して下さいませ。假令二人がインフルノの底へ墜ちても、共々に國家の爲に盡さうと誓つた仲だありませんか」

ベルツ「イヤ、恐れ入りました。それに間違ひは無いませぬ。併し乍ら今日御相談に參つたといふのは眞劍です、私の妹カルナ姫、人もあらうに左守司の馬鹿息子ハルナに戀着致し、何時の間にかラブ・レターズを往復させ、最早挺でも棒でも動かない様になつて了つたのでムいます。就いては貴女も御存じの通り、頑迷不靈な左守の倅ハルナの如き柔弱漢に、妹をやるといふ事は、總ての計劃上に於て、大變な番狂はせを來しはせまいかと、家令のシエールと共に頭を悩めて居り

ます。姫様の御考へは如何でムいますか

ヒルナ姫は俯むいて少時考へてゐたが、やがて微笑を洩らし乍ら、

ヒルナ姫「コレ右守さま それは願うてもなき出来事でありませぬか、此結婚が

うまく行けば、カルナさまは貴方の妹、何かにつけて萬事都合が宜しいでせう、

言はばスパイを敵の陣中に放つた様なもの、こんな好都合はありませんまい

ベルツ「併し乍らカルナといふ奴ア、左様な融通の利く女とは、どうしても考へ

られませぬ。彼は只々ラブ・イズ・ベストだと云つて、戀愛計りに心を傾け、且

又拙者の行動を諫め様とする傾向がムいますから、却て左守司の家に遣はさうも

のなら、なまじひ道徳論に惑溺して、兄貴に弓を引くやうな事が出来致さぬかと、

それ計りが心配に堪へませぬ。願はくば貴女様より刹帝利様に言葉を盡して、此

縁談が成功せない様に水をさして戴きたいと存じまして、御相談にあがりました。

刹帝利様の言葉ならば鶴の一聲いかに熱烈な戀の擒となつた妹のカルナも、之に

は反く譯には参りますまい。何卒一つ御骨折を願ひたいものでムいます。家令の

シエールと種々協議を凝らしてみましたが、どうしてもそれより方法はなきもの

と考へます。一度は妹を左守家へ遣はした方が目的遂行上、都合が好からうかと存じ、略それに内定して居りましたが、翻つて熟考すれば、こんな危険なことはないと考へました。何卒此縁談に就いては到底兄の力では破ることは出来ませぬから、貴方の御力を借るより道はムいませぬ」

ヒルナ姫「御心配なさいますな、今日右守家左守家の暗闘を融和させるには、これ位好い機会はありません。如何にビクの刹帝利家が古くから續き、権力があるとは云へ、肝心の左守右守の司たる龍虎互に争ふ時は、どちらも勢全からず、遂には内部より破綻を來し、國家の滅亡を來すは目のあたりでムいます。實に國家の爲、刹帝利家のために、こんな結構な縁談はありますまい。此事許りはヒルナ姫、飽く迄も熟考をして貰ひたい事を主張致します」

ベルツ「成程、それも却て可いかも知れませぬ。然らば何事も姫様にお任せ致します。何分宜しく御願ひ致しますせう」

ヒルナ姫「左様ならば、これから左守司を呼びよせ、篤と妾より申渡すでムいませう。サア又壁に耳あり、天に口あり、或時機まで此秘密が洩れないやう、早く



お歸り下さいませ」

ベルツ「大變に秋風が吹いたと見え、箒で掃くやうになさいますな。マア一服して歸れと仰有つても、餘り罰は當りますまい。又私は一息や二息、ここで煙草位頂いても、餘り差支へない様に考へますがなア」

ヒルナ姫「又そんな事を云つて、私を困らせるのですか、そんなら百年なつと千年なつと、ここでお煙草をあがつて下さい」

ベルツ「ハハハハ、イヤ眞に恐れ入りました。左様なれば邪魔者は直様、御前を下りませう。そこらに箒を逆様にして頬かぶりがさしてあれば、どうぞ元へ直して下さいませ、エへへへ」

と厭らしい笑を残し、スタスタと廊下に足音をさせ乍ら、吾館をさして歸り行く。ラム、リット、ベールの三人は互に顔を見合せて苦笑し乍ら、足を忍ばせ左守司の館をさして急ぎ行く。

(大正一二・二・一二 舊一一・一二・二七 於龍宮館 松村眞澄録)

第五章 愛縁（一三六八）

ヒルナ姫の急使によつて左守司キュービットは倉皇として衣紋を整へ恭しく伺候した。

左守「キュービットがお招きによつて急ぎ參上しました。御用の趣仰せ聞け下されませすれば有難う存じます」

ヒルナ姫「キュービット、其方に折入つて急に相談致したい事があるのだ。そこは端近、近う寄つて下さい」

左守「はい、恐れ多うございますが、御仰せ済み難く失禮致します」

と云ひ乍ら姫の三尺許り前まで進み出でた。ヒルナ姫は聲を低うして四邊に心を配り乍ら、

ヒルナ姫「ヤ、左守殿、外でもないが其方の息子ハルナ殿に嫁を與へ度いと思ふのだがお受けをなさるかな」

左守「これはこれは思ひもよらぬ御親切、左守身にとつて有難き幸福に存じます。

然し乍ら此結婚問題ばかりは本人と本人との意志が疎通せなくては、本人以外の私が何程親だと云つても直様お答する譯には参りませぬ。今日は凡て世の中が昔と變り夫婦關係に就いても結婚問題に就いても、戀愛其ものを基礎とせなくては可かない事になつて居ります。夫婦仲良く暮して呉れるのが所謂親孝行でもあり、凡ての事業のためでもあります。人間生活の本來としては、如何しても相思の男女が結婚を致さねば親の力や権力で壓迫しても到底末が遂げられないでせう。親子が衝突したり、夫婦の間に悲劇の起るのも、所謂思想上の誤謬と、其誤謬ある思想から出来た現代の法則や道徳や、いろいろのものの缺陷や、不完全から生ずるものであります。親の言ひ條につき親孝行せむがために戀人と添ひ遂げられなかつたり、又は或事情のために生木を裂かれて女を離別したりする事は、人間としては斷じて眞直な生活と云ふ事は出来ませぬ。此問題は篤と考へさして頂かねばなりませぬ。

ヒルナ姫「そらさうですとも。人間が拵へた金銭財寶等云ふものが邪魔したり、家族制度に缺點があつたり、法律が不備であつたり又は周圍の人々の物の考へ方

に時代錯誤があつたり、或は其處に野卑不劣な私欲が働いたり、種々雑多の理由によつて、人間的な生活が破壊されて、純正の戀愛其ものは忠孝友誼などの爲にも、斷じて犠牲とせらるべき性質のものではありません。忠信孝貞、何れの美德をとつて見ても其根底には必ず大なる「ラブ」の力が動いてゐるものです。世間に澤山起る戀愛的悲劇について深く考へて見ますと、必ず舅姑の不當の跋扈とか、或は金錢の災とか、結婚當事者の無思慮とか、階級制度の誤謬とか、法律制度の不完全とか、何とかか何とか云つて、眞に人間としては其本質的でない事柄が多く禍根をなしてゐる事を發見するものがあります。それ故互に諒解のない結婚を強壓的に強めるのは、實に危険千萬と云ふ事は、此ヒルナもよく承知してゐます。然し乍ら、妾がハルナ殿に嫁を貰へとお勧めするのは決して政略的でもなければ強壓的でもなく、又御都合主義でもありません。ハルナ殿は戀人の右守司の妹カナルナ姫と互に「ラブ」しあひ、殆んど白熱化せむとする勢で△います。かくの如き神聖な戀愛を等閑に附して置かうものなら何時心中沙汰が突發するか分りません。い。さすれば左守、右守兩家の恥辱のみならず妾等の恥で△いますれば、災を未

然に防ぎ完全なるラブを遂行せしめ、兩家の和合を圖り、國家を泰山の安きに置かむとする一擧兩得の美擧だと考へます。左守殿妾の言葉に無理がムいますか」

左守「はい、實に新しき新空氣を注入して頂きました、この古い頭も何だか甦つた様な心持が致します。成程姫様のお説の通り、私もウロウロ其消息を聞かぬでもムいませぬが、餘りの事で、貴女に申上ぐるも畏れ多いと、今日迄祕密にして居りましたが、姫様にそれ迄お分りになつて居れば、何をか隠しませう。朝から晩まで倅のハルナはりーべ・ライにのみ頭を痛め、殆んど神經衰弱に陥つてる様な次第でムいます。親として一人の倅、その戀を遂げさせてやり度いとは思つて居りましたが、何を云つても、刹帝利様や姫様のお許しが無くては取行ふ事は出来ませず、況して右守司の妹とある以上は口に頬張つてお願する事も出来なかつたのでムいます。何卒何分にも宜しく御執成しをお願ひ申します」

ヒルナ姫「流石は左守殿、早速の御承知、ヒルナ姫満足に思ふぞや」

左守「はい、有難うムいます。貴女が満足して下されば定めて刹帝利様も御承知下さるでせう。次に此左守も満足、倅も嘸満足を致すでムいませう」

ヒルナ姫ひめ「左守さもり殿どの、其方そなたも妾わらわが何時いつも心配しんぱいして居をつたが、新舊しんきゅう思想しきさうの衝突しゅうつうで、右うも守り殿どのと暗闘あんとうが絶たえなかつた様やうだが、之これにて兩家りやうけ和合わがふの曙光しよくわうを認みめ、従したがつて城内じやうないの政治せいぢも完全くわんぜんに行おこなはれるでせう。政略せいりやく上じやうから云いつても、戀愛れんあい至上じやうしゆぎ主義しゆぎから云いつても、閒然かんぜんする所ところなき、願ねがうてもなき縁談えんだんぢや。之これでビクトリアの國家こくがもビクとも致いたし  
ますまい。ああ惟かむ神靈しんれい幸倍しあは坐世ま、盤古ばんこ神王しんのう鹽長しほなが彦命ひこのみこと様さま！」  
左守さもり「姫様ひめさま、重々ぢゆうぢゆうの御心おこころ盡つくし、有難ありがたう存ぞんじます。何卒なにとぞ刹帝利せつていり様さまに早はやく貴女あなた様さまより  
お話しはな下くださいまして、此縁談このえんだん整ととのひます様やうお執成とりなし願ねがひまする」  
ヒルナ姫ひめ「心配しんぱいなさるな。屹度きつと整ととのへて見みせませう。其方そなたの覺悟かくごがきまつた上うへは直すぐ  
様さま此縁談このえんだんに取掛とりかります。一時いちときも早はやく歸かへつて御準備ごじゆんびを願ねがひます。善ぜんは急いそげと申まをしま  
すからな」  
左守さもり「はい、有難ありがたうムございます。左様さやうならば」  
と叮嚀ていねいに禮れいを施ほどこし欣々いそいそとして己おのが館やかたへ歸かへり行く。後あとにヒルナ姫ひめは只ただ一人ひとりニコニコ  
笑わらひ乍ながら、  
ヒルナ姫ひめ「あ、之これにて兩家りやうけの纏もつれもスツパリと和解わかいするだらう。刹帝利せつていり様さまは七十ななそ

路を越えた御老體なり、何時お國替遊ばすか人命の程は圖り知れない。後を繼ぐべき御子様がないのだから、俄に御歸幽にでもなれば、忽ち左守、右守兩家の争ひが勃發し、之を治むべき重鎮なる人物がなくなつて了ふ。さうすれば國家の滅亡も眼前にありと心も心ならず今日迄暮れて來たが、此結婚がうまく行つて兩家和合せば假令刹帝利様が御他界になつても最早大磐石だ。右守、左守司を率ゐて、女乍らも女王となり、此國家を治める事が出来るだらう。それに就いても困つたのは右守司だ。アアア、殘念な事を妾もしたものだ。一つ逃れて又一つ、右守司と手をきる事は實に難事中の難事だ。ホンにままならぬ浮世だなア』と吐息を洩らし思案に暮れてゐる。

(大正一二・二・一二 舊一一・一二・二七 於龍宮館 北村隆光録)

第六章 氣縁(一三六九)

ヒルナ姫は意氣揚々としてビクトリア王の居間に進入つた。ビクトリア王は經机にもたれ、一心不亂にコーランを繚いてみた。

ヒルナ姫「御免下さいませ。ヒルナでムいます」

此聲にビクトリア王は老眼の眼鏡越しに覗く様にして、

刹帝利「ヒルナ姫、今日は何とはなしに元氣のよい顔だな。何か面白い事があり

ましたかな」

ヒルナ姫「はい、エー、早速でムいますが、吾君様にお願がムいますがお伺ひを

致しました、コーランを御研究の最中にも拘らず御邪魔を致しまして済みませぬ」

刹帝利「ア、いやいや別に邪魔でもない。さうして願ひとは何事だ。早く云つて

見たが宜からう」

ヒルナはモジモジし乍ら、満面に笑を湛へ、媚を呈し、言葉淑かに、なめつく

様な聲で視線を斜に向け乍ら、少しく體を揺りシヨナシヨナとして兩手を膝の

上に揉みつつ、

ヒルナ姫「吾君様、今日の國家の危急を救ふには先づ第一着手として城内の内



紛を鎮定せなくてはなりません。それについて妾は日夜心膽を練つてみました。  
漸く今日其曙光を認めましたので御相談に参りました。』  
刹帝利『成程、先づ國民を治めむとすれば、右守、左守司の暗闘を何とかして鎮  
めねばなるまい。然し如何しても彼等は思想が合ない犬猿畜ならぬ仲だから此際  
如何な手段を用ふるも何の効もあるまい。正直一途の左守司に對し權謀術數至ら  
ざるなき奸黠の右守司は、刹帝利としても、如何ともすべからざるものだ。彼の  
家は祖先から兵馬の權を握つて居るのだから、何時反旗を掲げるかも分らない。  
如何に左守司忠勇義烈なりとて兵馬の權を握らぬ中は、國家の禍害を除く事は到  
底不可能だ。何か其方は妙案を考へ出したのか、兔も角云つて見やれ』  
ヒルナ姫『仰せの如く左守司は實に立派な人格者でムいます。それについて右守  
司は才子肌の男で、年も若く且つデモクラシーの思想にかぶれて居りますれば、  
保守主義と革新主義との兩人の争ひ、如何にして之を調停せむかと苦心慘愴の結  
果、思ひつきましたのは左守司の倅ハルナと右守司の妹カルナ姫との結婚問題で  
ムいます』

刹帝利せつていり「成程なるほど、それは至極妙案しごくめうあんだらう。然し乍ら如何しかしても此結合このけつがふは至難事しなんじであらう。一時は刹帝利の命めいに服従ふくじゆうして假令結婚たとへけつこんを致いたすとも忽ち破鏡はきやうの悲かなしみを見るは目の前まあたりだ。さうなつた上は兩家は益々ますます、嫉視反目しつしはんもくの度を高め、遂つひには累るゑをビクトリア家けに及およぼす様やうになつては大變たいへんだから餘程考よほどかんがへねばなるまいぞ。一利いちりあれば一害いちがいの伴ともなふものだ。それにつけても頑強くわんきやうなる律義りつぎ一方の左守司さもりのかみは容易よういに承諾しよつたくは致いたすまい」

ヒルナ姫ひめ「それは御心配遊ごしんぱいあそばしますな。最前さいぜんも左守司さもりのかみを呼よんで其意見そのいけんを叩たたきました處ところ、思おもひの外打解ほかうちとけお國くにのためとなればお受け致うけいたします、嘸さぞせがれ倅まんどくも満足まんぞく致いたしませうと云いつて歸かへりました」

刹帝利せつていり「何なんと、あの左守司さもりのかみがそんな開ひらけた事ことをいつたかな。ウーン、之これも時勢じせいの力ちからだ。忠義ちうぎな家來けらいは融通ゆうづうが利きかず、融通ゆうづうの利きく奴やつは悪わるい事ことを企たくむなり、眞しんに股肱ここうと頼たのむ家來けらいがないので心配致しんぱいいたして居をつたが、左守司さもりもそこ迄開までひらけたかな。それは實じつに結構けつこうだ。併しかし乍なら右守司うもりのかみは如何どうだらうか。彼かれは亦頭またあたまの古ふるい老耄おいほれ爺おやぢと何時いつも排はい斥せきして居をる様やうだが、此縁談このえんだんを承諾しよつたくするであらうかな」

ヒルナ姫ひめ「それは御心配ごしんぱいに及びおよびますまい。實際じつさいの處ところは左守さもりの倅せがれハルナと右守うもりの妹いもうとカルナの間あひだには、已すでに既すでに情約じやうやくの締結ていけつが内々ないない結むすばれたと云いふ事ことでございます。右守うもりは元もとより此縁談このえんだんは餘あまり好このまない様やうでしたが、肝腎かんじんの妹いもうとが諾きかないものですから、到頭たうとう我がを折をつて賛成さんせいをする事ことになりました」

刹帝利せつていり「さうなれば左守さもり、右守うもり相あひ竝ならんで國政こくせいに鞅掌おうしやうし、ビクトリア家けの政治せいぢは萬ばん世不易せふえきだ、ああ實じつに嬉うれしい時節じせつが來きたものだな」

ヒルナ姫ひめ「左様さやうでございます。こんな嬉うれしい事ことはございませぬ。此儘このま兩家りやう暗闘あんとうを續つづけてゐませうものなら兵馬へいばの權けんを握にぎつた右守うもりの司かみは如何いかなる事ことを仕出しでかすか知しれませぬ。遂つひには左守さもりを亡ほろぼし、畏おそれ多おほくも刹帝利せつていり様さまを退隱たいいんさせ、自分じぶんがとつて代からむとする野心やしんを包藏ほうざうして居をるかも分わかりませぬ。否いな確たしかに其形勢そのけいせいが現あらはれて居をります。かかる危急ききふそん存亡ぼんぼうのビクトリア家けを救すくふのは、此結婚問題このけつこんもんだいに越こしたものはございますまい。妾わらははホツト息いきをついた様やうな次第しだいでございます」

刹帝利せつていり「成程なるほど、お前まへの云いふ通とほりだ。然しからば一時いちじも早はやく左守さもりの司かみを呼よび出だし、彼かれに改あらためて申渡まをすであらう」

ヒルナ姫ひめ「早速さつそくその運びはこを致いたしませう。妾わらわはも此事このことが成功せいこう致しますれば、假令たとへし死ししても心こころ残りのこはムいませぬ」

刹帝利せつていり「アハハハハ、二つ目ふためには死しぬのなんのと、左様さやうな心細こころほそい事ことを云いふものではない。七十しちじふの老軀らうしゆくをさげたビクトリアも未まだ二十年にじふねんや三十年さんじふねんは社しゃ會くわいに活くわつ躍やくするつもりだ。お前まへは若わかい身みを持もつて、左様さやうな事ことを思おもつたり、云いつたりするものではない。言こと霊たまの幸さちはふ世よの中なかだから、不吉ふきつの言こと葉はは云いはない様やうにして呉くれ」

ヒルナ姫ひめ「はい不調ぶてう法はふ申ましました。屹きつと度こころえ心得こころえます。盤古ばんこ神しん王わう鹽しほ長なが彦ひこ命こと様さま、見み直なほし給たまへ聞き直なほし玉たまへ」

と合掌がつしやうする。そこへ恭つひやうしく衣紋えもんを整ととのへ參まゐつて來きたのは左守司さもりのかみであつた。左守司さもりのかみは末座まつざに平伏へいふくして言こと葉はもつつましやかに、

左守さもり「吾君わがきみ様さま、ヒルナ姫ひめ様さま、私わたしは左守さもりでムいます」

刹帝利せつていり「いや左守さもり殿どの、いい處ところへ來きて呉くれた。さア近ちかう近ちかう。其方そなたに折入をりいつて申入まをしいれたい事ことがある」

左守さもり「はい、然しからば御免蒙ごめんかつむりませう」

と云ひ乍ら恐る恐る一閒ばかり閒近まで進み寄り平伏した。

刹帝利「左守殿、其方はヒルナに聞いてゐるだらうが、氣に入るまいけれど、ビクトリア家の爲め、國家の危急を救ふために、汝の倅ハルナと右守の妹カルナ姫との結婚を申付けるから、承諾して呉れるだらうな」

左守「はい、恐れ多くも斯様な事までお心を悩まし奉り、實に感謝に堪へませぬ。仰せ畏み慎んでお受を致します」

刹帝利「流石は左守殿、満足々々。さア一時も早く此縁談に取かかつて呉れ」  
ヒルナ姫「左守殿、吾君様のお言葉、有難くお受け致し、圓満に此縁談を解決する様取計らつて下さい。それに就いては内事の司、タルマンを媒介として、此方より差遣はすによつて、其心算で居つたが宜らうぞ」

左守「はい、何から何まで、お心をつげられまして痛み入ります。左様ならば吾君様、ヒルナ姫様、一時も早く館に歸り、準備にとりかかりませう」

と厚く禮を述べイソイソとして吾家へと歸り行く。後にビクトリア王とヒルナ姫は、直ちに神前に向ひ感謝の祝詞を奏上し、姫は慇懃に挨拶を述べて、吾居間に

歸り行く。

(大正一二・二・一二 舊一一・一二・二七 於龍宮館 北村隆光録)

第七章 比翼(一三七〇)

左守の司キユービツトの館に於ては、右守の司の妹カルナ姫と其倅ハルナとの神前結婚式が嚴肅に圓滿に舉行された。宣傳使兼内事の司タルマンは仲介人の事として祭主を勤める事となつた。婚姻の儀式も首尾よく濟んで一同は祝宴に移つた。此の結婚によつて左守、右守兩家の年來の確執は一掃さるる事であらうと、城内一般の注意を惹いた。タルマンは結婚式を祝するため、歌ひ初めたり。

【あ】 有難し有難し  
海より深き戀仲の縁を結び終せたる  
【イ】 ドムの神のはからひで

【お】ほみめぐみ たふと  
大御恵ぞ尊けれ

【き】み みこと  
君の命は云ふも更

【け】い や  
怪しき卑しき村雲を

【さ】ら たまりての交際を  
【こ】ころ  
心の底より拂拭し

【す】めおほかみ  
皇大神のはからひで

【そ】ろ  
揃ひも揃うたよい夫婦

【ち】から かぎ  
力の限り身の限り

【て】あつ  
手厚くもてなし家の中

【な】が  
長きミロクすゑまでの末迄も

【ぬ】さ  
抜き差しならぬ鋌かすがひの

【の】どか  
長閑なホームつくを作りませ

【ひ】  
日もいと永ながくなりぬれば

【メ】ソポタミヤけんおんきやつの顯恩郷

【ま】まりよかうの旅行をなされませ

【か】くも目出度めでたき婚姻こんいんは

【く】にためとも  
國民共に歡あぎ合ひ

【し】た  
親しく結むすぶ今日けふの宵よひ

【せ】かい また  
世界に又またと二人ふたりない

【た】はばか  
誰た憚はばらず今日けふよりは

【つ】ま をつと  
妻は夫をつとを夫は妻をつまを

【と】との おや  
整つかへ親おやによく仕つかへ

【二】コニコニコと睦むつび合あひ

【ネ】ンネを生うんで睦むつまあひ

【は】る やうき  
春はるの陽氣やうきも満みち満みちて

【ふ】うぶ  
夫婦ふうぶは手てに手てを取り交かはし

【ほ】つま  
秀妻しゆつまの國くにへ新しん婚こんの

【み】  
見れば見みる程ほど美うらはしき

娘盛りのカルナ姫

目出度き今日の宴會をば

百歳千歳變りなく

八千代の春の玉椿

抱き抱かれいつ迄も

愉快に暮せハルナさま

縁の絲は大神の

【よ】さしのままに絶ゆるなく

側目もふらず道の爲め

息を合せて勤めかし

現世幽世隔てなく

歡ぎ親しみ神の爲

王家のために勵むべし

ああ惟神々々

御靈幸倍まませよ

と四十五音の言靈歌を以て、兩人の結婚を祝した。左守司のキュービツトは嬉し  
さに堪へず、手を拍つて歌ひ出したり。

☞ 神が表に現れまして  
老先短き左守をば

恵の露を下しまし  
救はせたまふ嬉しさよ



ビクの御國に隠れなき

神徳高きビクトリア

君の命のはからひで

譽も高き右守の司

ベルツの君の御妹

カルナの姫を子に持ちて

倅と共に睦じく

春の花咲くホームをば

作らむ事の楽しさよ

これも全くウラル教

神の柱と現れませる

盤古神王は云ふもさら

刹帝利様やヒルナ姫

タルマン様の御恵み

父祖の代より纏れたる

兩家の暗闘も今よりは

速河の瀬に流し捨て

君の御爲め國の爲め

大臣の道をばよく盡し

國民迄も平けく

いと安らげく知召す

君のみわざを麻柱て

萬世不易の國家をば

守らむ事の嬉しさよ

倅ハルナを始めとし

淑徳高きカルナ姫

幾久しくも吾家に

留まりまして神業に

參加さんかせられよキュービツトが 心を籠こめて頼たのみ入いる

朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも 月つきは満みつとも虧かくるとも

假たとへ令だい大地いちは沈しづむとも 星ほしは空そらより落おつるとも

思おもひ合あうたる此この夫婦ふうふ 假たとへ令い如何かなる事ことあるも

決けつして變かはる事こと非あらじ カルナひめの姫けよ今日けふよりは

卑いやしき吾われを父ちちとして 守まもらせ給たまへ左守さもりの司かみ

赤あかき心こころの其その儘ままを 慈こゝに現あらはし頼たのみ入いる

ああ惟かむながらかむながら神かみ々々 御み靈たま幸さち倍はへましませよ

カルナひめ姫または又うた歌ふ。

神しん徳とく尊たふとき左守さもりの司かみ 珍うづの御おん子こと現あれませる

名望めいぼう高たかきハルナかみさま 尊たふとき神かみの御み恵めぐみに

よりて愈いよいよ結むす婚こんの 式しきを擧あげさせ給たまひたる

今宵の空の明けさ

月は御空に皎々と

輝き渡り諸々の

星は一面煌めきて

天の河原は北南

輪廓正しく流れ居る

七夕姫の神さへも

年に一度の逢瀬ぞと

聞きしに勝る妾こそ

夜と晝との區別なく

夫婦互に顔合せ

清き月日を送る身の

其幸は天國の

天津乙女や天人の

日毎夜毎の楽しみも

吾には如かじと思ふなり

ああ惟神々々

刹帝利様やヒルナ姫

タルマン司の御恵で

嬉しき今宵の首尾を見る

此喜びは何時迄も

孫子の世迄も忘るまじ

左守の父よ兄上よ

いざこれよりは兩家とも

所在障壁撤回し

互に心を合しあひ

君の御爲國のため

いや永久に赤心を

盡つくさせ給たまへ惟かむながら神

神かみの御前みまへに願ねぎまつる』

と歌うたひ終をはり舞まひ終をはり元もとの座ざについた。拍手はくしゅの聲こゑは雨霰あめあられと響ひびき渡わたりける。

（大正一二・二・一二 舊一・一・一二・二七 於龍宮館 加藤明子録）

## 第八章 連理れんり（一三七一）

新しん郎らうのハルナは立たち上あがり扇あふぎを片手かたてに持もち、歌うたひ舞まひ初はじめたり。

高たか天原あまはらに現あれませる 皇大神すめおほがみの御惠おんめぐみ

鹽長彦しほながひこの現あれまして 今日こんにちの慶事けいじを恙つつがなく

結むすばせ給たまひし嬉うれしさよ そも今迄いままでは兩りやうにん人が

父ちちと父ちちとは敵同士てきどうし 何彼なにがにつけてさまざまと

衝突したる淺ましさ

此慘状を治めむと

年も幼き時分より

案じ煩ひ居たりしが

幸なるかなカルナ姫

吾と相思の戀に陥ち

思ひ切られぬ身の因果

如何なる宿世の因縁か

父と父とは敵同士

到底も戀路は遂げざらむ

假令此世で添へずとも

死して未來で睦じく

地獄の底まで手を曳いて

落ちなむものと思ひつめ

戀の涙に暮れけるが

父と兄との理解力

幸ひなして今此處に

鴛鴦の契を結びたる

今宵の首尾の嬉しさよ

天には比翼の鳥となり

地には連理の枝となり

夫婦互に睦び合ひ

親と兄とは云ふも更

畏き君に赤心を

捧げて清く仕ふべし

ああ惟神々々

御靈幸倍ましまして

二人の縁をどこ迄も

缺かぐる事ことなく守まもりませ  
天あめの御柱みはしら廻めぐり合あひ

國くにの御柱みはしら取とり巻まいて  
天あめと地つちとの經綸けいりんに

仕つかへて御子みこを數多あまた生うみ  
左守さもりの家いへの繁榮はんえいを

いや永久とこしへに祈いのるべし  
ああ惟かむな神がら々々かむな

鹽長彦しほながひこの大前おほまへに  
畏かしこみ畏かしこみ祈ねぎまつる

と歌うたひ終をはる。左守さもりの家令かれい、  
エクスは雀躍こをどりしながら其尾そのをについて祝歌しゆくかを歌うたふ。

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも  
月つきは盈みつとも虧かくるとも

星ほしは天てんより落おつるとも  
地震雷火ぢしんかみなりひの車くるま

假令たとへ一度いちどに來きたるとも  
この縁談えんだんが恙つつがなく

調とこのつた上うへはこのエクス  
假令たとへ死しんでも構かまやせぬ

刹帝利せつていりさま様は云いふも更さら  
左守さもり右守うもりの兩宗家りやうそうけ

和合わがふなされた其上そのうへは  
ビクの御國みくには穩おだやかに

治まり榮え行くだらう

今迄纏れに纏れたる

犬と猿との間柄

今日は目出度和解して

此宴席に打ち解けて

竝ばせたまふ嬉しさよ

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

世の過は宣り直せ

これぞ全く三五の

教の道の歌なれど

斯やうな時に應用して

今日の宴會を祝ぎつ

幾久しくも御兩所よ

上は御國の御爲に

下はお家の安泰を

守らむ爲に睦じく

暮らさせたまへ惟神

今日の喜びいつ迄も

忘れぬためにこのエクス

舞ひつ踊りつ歌歌ひ

お酒に酔うて後前も

分ぬばかりに土堤切らし

命限りに踊りませう

ああ有難い有難い

カルナの姫やハルナさま

【あなた】も嘸や嬉しかる 日頃の思ひが相達し

相思の夫婦が睦じく 新しがつて暮すのも

全く神の御守護ぞや 夢にも神の御恩徳

忘れる事があつたなら この結構な良縁も

中途に破裂するだらう そんな憂ひの無いやうに

今日から心を改めて 皇大神を敬拜し

清き教をよく守り 君には忠義親に孝

隣人迄も憐みて 神の形に造られた

人たるものの本分を お盡しなされや左守家の

家令エクスが赤心を 籠めて注意を致します

ああ惟神々々 御靈幸倍ましましてよ

シエールは又歌ふ。



右守うもりの司かみと現あれませる  
ベルツつかさの司かきの家令かれい職しよく

シエールこが此處まこころに赤心まこころを  
捧ささげて今日けふの結けつ婚こんを

嬉うれしく祝しゆくし奉たてまつる  
兵馬へいばの權けんを握にぎります

ビクみくにの御國けんりよくしやの權けん力りよく者しや  
ベルツきみの君きみの其威勢そのめせい

朝日あさひの如ごとく輝かがきて  
飛とぶ鳥とりさへも落おとすよな

ベルツつかさの司いもつとぎみの妹君いもつとぎみ  
カルナひめの姫ひめを賞もらひうけ

女房にようぼうとなしたハルナさま  
嘸さぞやさぞさぞ御満足ごまんぞく

なさつた事ことでムごいませう  
家令かれいのシエールはお二人ふたりの

其嬉そのうれしげな顔かほを見みて  
やつと安心あんしん致いたしました

さうして何なんだか羨うらやましよう  
なつて來きたよに思おもはれる

これもやつぱり人ひとの云いふ  
法界はふかい悋りん氣きぢやあるまいか

世界せかいに名な高たかき美男びなんと美人びじん  
こんな配はい偶ぐうがまたと世よに

三千さんぜん世界せかいにあるものか  
木この花はな姫ひめの顔かほに

似にさせたまへるカルナ姫ひめ  
お姿すがた見みても目めが眩くらみ

後光がさすよな心地する 私もちと若ければ

こんな美しい女房が 貰へるだらうと思つたら

何だか浮世が厭になる 蜥蜴が缺伸をしたやうな

アバタだらけの山の神 無理に持たされ四五人の

餓鬼をゴロゴロ拵へて 生活難に追はれつつ

青息吐息の爲體 ほんに人間の運命は

これ程懸隔あるものか 折角人と生れ来て

天地の花よ萬物の 靈長なりと誇るとも

同じ月日を送るのに これだけ幸と不幸とが

分ると云ふは先の世の 宿世の罪が報いしか

實につまらぬシエールの身 ハルナの司に比ぶれば

天と地との相違あり さはさりながらこんな事

愚癡つて見たとて仕様が ない 因縁づくぢやと諦めて

今日の結構な御結婚 幾久しくと赤心を

籠こめて祝ことほぎ奉たてまつる  
あゝ惟かむながら神かむながら々々  
御みたま靈さち幸はへ倍はへましませよ  
』

と歌うたひ終をはり座ざにつきぬ。

左さ守もり 』昔むかしより山やまと積つもりし塵ちり埃あくた  
散ちりにし今日けふの吾われぞ嬉うれしき  
』

右う守もり 』何なに事ことも唯ただ惟かむながら神かむながら々々  
神かみの心こころに任まかすのみなり  
』

タルマン 』鴛をしどり鴦つがひの番はな離なれぬ睦むつじさ

見るにつけても羨ましきかな

ハルナ 唯神縁の絲に結ばれて  
この世を渡る吾ぞ樂しき

カルナ姫 天渡る月の御影を眺むれば  
笑はせたまひぬ吾顔を見て

エクス 姫様を娶りたまひしハルナの君  
春咲く花と榮えますらむ

シエール「類なき松と松との睦み合ひ  
千代の榮を祝ふ今日かな」

斯く歌ひ終り目出度結婚の式を終へ、左守、右守の兩家は表面稍打ち解けたる如く見えしが、右守の司の心中は容易に和らはず、依然として左守の司を邪魔者扱ひ爲し居たりけり。

(大正一二・二・一二 舊一一・一二・二七 於龍宮館 加藤明子録)

## 第九章 蛙の腸(一三七二)

ビクトリア王の奥殿には、王を始めヒルナ姫、竝に内事の司兼宣傳使たるタルマン及左守のキュービット、右守のベルツ、ハルナ、カルナ姫の七人が列を正し、左守右守の兩家が結婚に仍つて、和睦の曙光を認めたる祝意を表する爲、王に招

かれて、此異數の酒宴に列したのである。左守司は先づ王に一禮し、順を逐うて  
叮嚀な挨拶をした。

左守「吾君様始め、ヒルナ姫様の深厚なる御仁慈に仍りまして、愚なる倅に名聲  
たかき右守殿の妹カルナ姫を「めあは」し下さいまして、實に左守は申すに及ばず  
倅に取つても無上の光榮で△います。それにも拘はらず、今日は又盛大なる宴會  
を開いて、吾等が爲にお心をお盡し下さいます、其御仁慈、終生忘れは致しま  
せぬ。此上は身命を抛つても、君國の爲に赤心を盡し、萬分一の御恩に酬い奉る  
所存で△います」

刹帝利「いかにも、汝の言ふ通り、今回は實に奇縁であつた。之といふのも全く  
盤古神王様の思召、神は未だビクの國を始め、ビクトリア家を見捨て玉はざる御  
證據、此方も實に満足であるぞよ。今日迄は左守家右守家は犬猿畜ならず、常に  
暗闘を續けて来た。之に就いては此方は非常に頭を悩ませてゐたのだ。かくなる  
上は文武一途に出で、協心戮力上下一致して以て、國家を守り、民を安からしめ、  
五六七の神政を招來することが出来るであらう」

と非常に喜んで挨拶を返した。左守はハツと許りに差俯き、嬉し涙に暮れて居る。右守司は威丈高になり、右守「只今吾君の仰せには、「文武一途に出よ」と仰せられたやうでムいますが、左守家は文學の家、右守家は武術の家でムいますれば、其根底に於て職掌を異に致し、到底氷炭相容れざる家柄でムします。併し乍ら私的交際に於ては、切つても切れぬ親戚の間柄、従前に増して親密の度を加へ、兩家和合致すでムらう。抑も武は國家を守る必要の機關にして、武備なき國家は、翼なき鳥も同様、到底國としての存立は望まれませぬ。故に武は非常の時に必要のもの、文學は平時に民を導き、世を治むる上に於て必要なものたる事は、賢明なる刹帝利の御熟知さるる所でムいませう。文武兩家の職を混同して、内事外交に臨む時は、却て殺伐の氣、天下に充ち國家の擾亂を來すでムらう」

ヒルナ姫「右守殿の御意見、一應尤も乍ら、今日の如き内憂外患の頻到する時に際し、文武兩家が力を併せ、國家を守り、民を安むるは時宜に適したる行り方と考へます。右守殿、御熟考を願ひませう」

右守「これはしたり、ヒルナ姫様、左守家が萬一武術の權を握らば、軍學に經驗なき御身なれば軍隊の統制は宜しきを得ず、却て内亂の種を播くやうなものではムらぬか。大工は家を建て、左官は壁を塗り、傘屋は傘を作る、すべて各の職に應じて特色を持つてゐるものでムる。左官は家を造る事を知らず、大工は又壁を塗る事を知らない、同様に文官は武術を辨へず、況してや三軍を統率するの權威は俄に備はるものではムいますまい。之に反して武門の右守、如何に文學方面に心を注ぐとも、到底完全なる結果は得られませんまい。文武兩道相竝んでこそ國家の安全は保持されるのでせう」

刹帝利「アイヤ右守殿、左様な心配は要り申さぬ。吾は之より刹帝利として、吾祖先が汝の祖先に預けておいたる兵馬の權を改めて受取り、左守右守をして、文武の兩道を管掌せしむる事に致す考へだ。ヨモヤ違背はムるまいなア」

右守「祖先が預かりましたか、或は祖先が刹帝利様を擁立して此國家を造つたか、記録もなければ、遠き昔の事、私には少しも分りませぬ。私は右守の武家に生れ、父より兵馬の權を譲渡された者、恐れ乍ら吾君にお還し申す理由はチツとも認め



申さぬ<sup>まを</sup>」

と氣色<sup>けしき</sup>ばんで息<sup>いき</sup>を喘<sup>はづ</sup>ませ、刹帝利<sup>せつていり</sup>の前<sup>まへ</sup>をも省<sup>かへり</sup>みず、傍若無人<sup>ばうじゃくぶじん</sup>に言<sup>い</sup>つてのけた。流<sup>さす</sup>石<sup>が</sup>のヒルナ姫<sup>ひめ</sup>も、タルマンも呆氣<sup>あつけ</sup>に取<sup>と</sup>られ、左守<sup>さもり</sup>右守<sup>うもり</sup>兩人<sup>りやうにん</sup>の顔<sup>かほ</sup>を見<sup>み</sup>つめりたり。タルマンは宣傳使<sup>せんでんし</sup>兼<sup>けん</sup>内事<sup>ないじ</sup>の司<sup>つかさ</sup>として、左守<sup>さもり</sup>右守<sup>うもり</sup>の上<sup>うへ</sup>に座<sup>ざ</sup>を占<sup>し</sup>むる特別<sup>とくべつ</sup>の地位<sup>ちゐ</sup>であつた。彼<sup>かれ</sup>は始<sup>はじ</sup>めて口<sup>くち</sup>を開<sup>ひら</sup>き、タルマン<sup>タルマン</sup>「ビクの國<sup>くに</sup>の主權者<sup>しゅけんしや</sup>ビクトリア王<sup>わうさま</sup>様<sup>さま</sup>のお言葉<sup>ことば</sup>は所謂<sup>いはゆる</sup>神<sup>かみ</sup>の御託<sup>ごたく</sup>宣<sup>せん</sup>で<sup>ごさ</sup>る。今日<sup>こんにち</sup>迄<sup>まで</sup>は右守<sup>うもり</sup>家<sup>け</sup>兵馬<sup>へいば</sup>の權<sup>けん</sup>を奪<sup>うば</sup>ひ、上<sup>かみ</sup>はビクトリア家<sup>け</sup>を惱<sup>なや</sup>ましまつり、下<sup>しも</sup>國民<sup>こくみん</sup>の膏<sup>かう</sup>血<sup>けつ</sup>を搾<sup>しぼ</sup>り、それが爲<sup>ため</sup>に國內<sup>こくない</sup>には紛擾<sup>ふんぜう</sup>の絶<sup>た</sup>え間<sup>ま</sup>なく、革命<sup>かくめい</sup>の機運<sup>きうん</sup>は國內<sup>こくない</sup>に漂<sup>ただよ</sup>うてゐる。今<sup>いま</sup>にして吾君<sup>わがきみ</sup>の仰<sup>おほ</sup>せを承<sup>うけたま</sup>はり、兵馬<sup>へいば</sup>の權<sup>けん</sup>を御返<sup>おかへ</sup>し申<sup>まを</sup>さざるに於<sup>おい</sup>ては、民<sup>たみ</sup>の怨<sup>えん</sup>府<sup>ぶ</sup>となりし右守<sup>うもり</sup>家は直<sup>ただ</sup>ちに覆滅<sup>ふくめつ</sup>の悲運<sup>ひうん</sup>に接<sup>せつ</sup>し、延<sup>ひ</sup>いて害<sup>がい</sup>を王家<sup>わうけ</sup>に及<sup>およ</sup>ぼすは、火<sup>ひ</sup>を見<sup>み</sup>るより明<sup>あき</sup>かで<sup>ご</sup>る。右守<sup>うもり</sup>殿<sup>どの</sup>、よく胸<sup>むね</sup>に手<sup>て</sup>を當<sup>あ</sup>て、時代<sup>じだい</sup>の趨勢<sup>すうせい</sup>に鑑<sup>かん</sup>み、其方<sup>そのほう</sup>が聰<sup>そう</sup>明<sup>めい</sup>なる頭腦<sup>づなう</sup>に仍<sup>よ</sup>つて、最善<sup>さいぜん</sup>の方法<sup>ほうはふ</sup>を取<sup>と</sup>られむ事<sup>こと</sup>を忠告<sup>ちうこく</sup>致<sup>いた</sup>します。之<sup>これ</sup>は決<sup>けつ</sup>してタルマン<sup>マン</sup>が私言<sup>しげん</sup>ではムらぬ、盤古神<sup>ばんこしん</sup>王<sup>わう</sup>鹽長彦<sup>しほながひこ</sup>命<sup>のみこと</sup>様の御託<sup>ごたく</sup>宣<sup>せん</sup>の傳達<sup>でんたつ</sup>で<sup>ごさ</sup>るぞや」

と思<sup>おも</sup>ひ切<sup>き</sup>つて宣示<sup>せんじ</sup>した。

右守はタルマンをハツタと睨み、

「名のみあつて實力なき其方の言葉を耳に挟むやうな右守ではムらぬぞ。察する所、汝は左守司に抱き込まれ、或は牒し合せ、右守が兵馬の權を横奪し、遂には軍隊の力を以て、國民を威壓し、時を待つてビクトリア家を亡ぼし、左守と汝が取つて代らむとの野心を包藏することは、此慧眼なる右守の前知する所でムる。刹帝利様の災を招かむとする曲者奴、下りおらう」

と反對に呶鳴りつけた。左守司は之を聞くより奮然として立上り、

左守「こは心得ぬ右守の言葉、何を證據に左様な無體な事を仰せらるるや、證據があらば承はりたい」

右守「アハハハハハ、悪人威々しいとは其方のこと、證據は心にお尋ねなされ。」

人間はば鬼はるぬとも答ふべし

心の問はばいかに答へむ

とは、左守司及タルマン輩の心の情態でゐる。いかに隠さるる共、其面貌及言語に表はれて居りますぞ」

左守「これは怪しからぬ、右守こそ野心を包藏せりと云はれても辨解の辭はありますまい。何となれば君命に反き、兵馬の權を私するは、之れ全く王家を脅かすもの、右守にして一點の、王家を思ひ國家を思ふ赤心あらば、國家の主權者たるビクトリア王様になぜ奉還なさらぬか」

右守「お構ひ御無用でゐる。王家はビクの國の飾り物、其實權はすべて右守家に握つてゐるのは避く可らざる事實でゐる。いかに王家と雖も、左守家と雖も、右守家に對し地位こそ高けれ、國家の實權を握るは、軍隊を統率する者の手裡にあるは當然でゐる。右守に一片の野心あらば、時を移さず、吾軍隊を指揮して、恐れ乍ら王家を亡ぼし、左守家を粉碎し、自ら取つて刹帝利と成るは朝飯前の事ではムらぬか。斯かる實力權威を具備する某が汝如き老耄の下位に甘んじ、忠實に勤めてゐるのは、野心のなき證ではムらぬか。左守如き頑迷不靈の宰相に兵馬の權を握らせようものならそれこそ氣違ひに松明を持たせたも同様、危険千萬で

る。餅は餅屋、傘は傘屋、下駄は下駄屋でゐる。及ばぬ野心を起すよりも、左守家相當の職を守り、君國の爲に盡されたがよからう」

ヒルナ姫「右守殿、左守司は決して左様な野心は毛頭ゝらぬ。何事も善意に解し、兩家和衷協同して、君國の爲に、國家危急の場合、下らぬ争ひを止め、共に共に力を國家の爲に盡して下さい。況して親密なる親戚の間柄、御兩人の争ひをハルナ、カルナ姫殿が聞かれたならば、さぞ苦しい事でゝいませう。そこは賢明なる右守殿、平靜に御考へを願ひたうゝいますなア」

右守「ハルナ、カルナの兩人は戀愛至上主義を振り翳し、結婚を致した者でゝる。云はば私的關係ではゝらぬか。軍職は所謂天下の公機、一夫一婦の私的關係を以て公職を混同するは天地の道理に背反したる大罪惡ではゝらぬか。此右守暗愚なりと雖も、斯様な道理の分らぬ男ではゝらぬ。親戚は親戚、國家は國家、職務は職務、區劃整然として自ら法則あり。察する所、左守司やタルマンの野心より兵馬の權を右守から掠奪せむとする計略に出でたる事はよく見え透いて居ります。姫様、必ず御心配遊ばすな。此右守は左守やタルマンの杞憂する如き反逆人では

ムらぬ。手なづけておいたる軍隊を以て王家を守り、國家を保護致しますれば、今日の提案は刹帝利様のお言葉を以て、速かに御撤回あらむことを希望致します」といつかな動かぬ磐石心、流石の刹帝利も手を下すべき餘地がなかつた。右守の妹カルナは右守に向ひ、

「兄上様、貴方は何時も武術の家に生れながら、兵は凶器だとか、殺伐だとか言つて、蛇蝎の如く忌み嫌つて居られるではありませんか。文化生活といふものは、武備撤廢迄行かねば到底駄目だといつても仰有つたでせう。それ程御嫌ひな軍隊なら、左守殿の仰せに従ひ、刹帝利様に速に奉還なさつたら如何です」

右守「女童の容喙する所でない、スツ込み居らう。某の理想が出現する迄は軍隊の必要がある。理想世界が現はれた以上は、軍備全廢を誓つて致す拙者の考へだ。汝の如き半可通のナマ・ハイカラが何を知つてゐるか。ハルナの美貌に迷ひ、生家を忘れ、兄に楯つくとは不都合千萬、今日より兄妹の縁を切る。さう覺悟を致せ」

カルナ姫「それは貴方の御勝手になさいませ。何時迄も兄上の世話になる譯には

行きませぬ。妾は最早夫の家が大切でムいます」

右守「ヨシツ、よう言つた、其言葉を待つてみたのだ。今日より左守右守兩家は親戚でない程に、汝一人の爲に吾目的……否々……我國の國力發展の目的を妨害するには忍びない。キツパリ暇をつかはすツ」

と嗚鳴りつけた。ハルナは慌てて立上り、

ハルナ「お兄様、カルナ姫の申した事、お氣に障ませうが、何を云つても女の申した事、又兄妹の間柄だと思つて、斯様な氣儘な事を申したのでムいませう。折

角刹帝利様、ヒルナ姫様の思召に仍つて、兩家和合致し、其祝宴として、勿體な

くも王様よりお招きに與つた此宴席に於て、左様な事を仰せらるるとは、君に對

して不忠と申すもの、何卒見直し聞直し、冷靜にお考へを願ひたうムいます」

右守「默れツ青瓢箪、汝の如き木端武者の知る所ではない」

と云ひ乍ら、ヒルナ姫の顔を一寸覗いて見た。ヒルナ姫は差俯き、兩眼よりハラ

ハラと涙を落とし、齒をくひしばつてゐる。かかる處へ慌ただしく入り来るは、ラ

イオン河の關守の長カントであつた。

カント「ハイ申上げます、夕夕大變な事が出来致しました」

刹帝利「カント、大變とは何事だ、詳細に言上せよ」

カントは胸を撫で乍ら、息苦しき聲を張り上げて、

カント「只今ライオン河の彼方より、三葉葵のしるされたる旗、數百旒を押し立て、數千のナイトは單梯陣の姿勇ましく、暴虎の勢を以て、旗鼓堂々攻めよせ來りまする。如何致せば宜しきや、心も心ならず一目散に走せ參じ、御注進に參りました」

と聞くより一同は面色を變へ、暫し雙手を組んで各沈黙に入る。

(大正一二・二・一三 舊一一・一二・二八 於龍宮館 松村眞澄録)

## 第二篇

貞烈龜鑑

第一〇章 女丈夫（一三七三）

カントの報告に打驚いて、一同は暫く沈黙の幕を下ろした。諺にも兄弟櫓にせめぐ共、外其侮りを防ぐとかや、父死して家にせめぐ子なし、……とは宜なるかな。國家の危急存亡目睫の間に迫れるを聞いて、流石の右守も今迄の爭論をケ口りと忘れ、兔も角外敵を防がむとのみに焦慮し出した。右守は慌てて口を開き、右守「刹帝利様、國家の危急、目睫に迫りました。斯様な時に内紛を醸すのは最も不利益千萬でムいます。此右守は君の爲、國の爲、一切の主張を曲げて、吾君様、ヒルナ姫様、左守殿に一任致します、何卒よきに御取計らひを願ひませう」と打つて變つた挨拶に、ビクトリア王は漸く顔をあげ、刹帝利「汝の赤心は只今現はれた。人は愈の時にならねば本心の分らぬものだ。サア是から左守、右守、タルマン、一致の上防ぎの用意を致されよ」ヒルナ姫「左守殿、如何でムる。其方は三軍を率ゐ、右守殿と力を協せ、防戦にお向ひなさらぬか」



左守「ハイ、委細承知仕りました。然らば之より、右守殿、軍隊を二手に分ち、其一班を拙者が預りませう」

右守「これは怪しからぬ、軍學に經驗なき其方、左様な事が如何して出来ませうか。此防戦は拙者にお任せ下され。一兵も動かさずして、樽俎折衝の間に解決をつけてみせませう」

かかる所へ第二の使者として、慌ただしく入り来るはエムであつた。エムは一同の前に平伏し、汗を拭ひ乍ら、

「御注進申上げます、敵は目に餘る大軍、バラモンの勇將、鬼春別、久米彦兩將軍指揮の下に數千騎を以て押寄せ來り、忽ち表門を破壊し、陣營を焼拂い、民家に火を放ちました、時遅れては一大事、一時も早く防戦の用意あつて然るべし。いで某は、命を的にあらむ限りの奪戦を致し、君の爲に一命を捨て申さむ。早く御用意あつて然るべし」

と言ふより早く、韋駄天走りに驅け出だし、何處ともなく消え失せたり。

左守「只今となつて、拙者は貴殿の意思に反き、内紛を續くる事を好み申さぬ。」

然らば吾君の御身邊の保護を仕るべければ、貴殿は之より三軍を率ゐ、華々しく戦ひめされ、日頃鍛へし武術の手竝、現はし玉ふは此時ならむ。サ早く早く御用意あれ」

とすすむれど、右守司は泰然として動きさうにもない。

ヒルナ姫「右守殿、國家危急の場合、一時も早く防戦におかかりなさらぬか」

右守「これはこれはヒルナ姫様のお言葉とも覺えませぬ。敵は目にあまる大軍、

勝敗の数は既に決してをりますぞ。あたら勇士の屍を戦場に曝すよりも、暫く

敵の蹂躪に任し、極端に無抵抗主義を發揮して、敵をしてアフォンと致さすが兵法

の奥義でゐる。右守が胸中に貯へたる神算鬼謀を發揮するは瞬く内、まづまづお

待たせあれ。急いては事を仕損ずる、英雄閑日月あり程の度量がなくては國家を

處理する事は出来すまいぞ。アハハハハ」

とクソ落着きに落着き、何か心に期する所あるものの如くなりき。其實右守は實

際の卑怯者で早くも腰を抜かしてゐたのである。併し乍らヒルナ姫及其他竝る

歴々の手前、驚いて腰が抜けたといふ譯にも行かず、さりとて軍隊を左守に渡せ

ば、再び兵馬の權は吾手に還つて來ない。出でて武勇を現はさむとすれば、已に腰が抜けてゐる。又勝算の見込がない。なまじいに戦つて敗北をなし、自分の沽券を墮すよりも、太刀を抜かざれば、其勝劣が分らないであらう、何とかならうから……といふズルイ考へが咄嗟に起つた。ヒルナ姫は心に弱點があるので、右守司に對して厳しく叱咤する事が出來ず、實に煩悶苦惱の極に達した。刹帝利は心焦ち、

「アイヤ右守殿、早くお立ちなされ、日頃軍隊を練り鍛ふるは、斯様な時の必要ある爲ではないか。汝が武勇を現はすは此時ではないか、サ早く早く」と急き立つる。左守も側によつて、

「右守殿、早くお出ましなされ。貴殿に於て不贊成とあらば、拙者が軍隊を預り、防戦に出かけませう。早く返答を聞かして下さい」  
と雙方から詰めかけられ、右守は一言も答へず腰を抜かした儘、首を左右に振つてゐる。

カルナ姫は側近く寄つて、

「お兄さま、君の御心慮を慰め、貴方が忠誠を現はすは、今此時でムいます。飾りおいたる弓矢の手前、かやうの時に働きなさらねば、却て武門の恥辱でムいまするぞ」

右守「エエ小ざかしき女の差出口、構つてくれな、右守は右守としての成案があるのだ。燕雀何ぞ大鵬の志を知らむやだ。ひつ込みをらう」と妹に向つて、噴火口を向けた。

カルナ姫「エエ不甲斐ない兄上、ようマア右守司だと言つて、今日迄威張られたものだ。こんな卑怯未練な兄があるかと思へば、カルナ姫残念でムいます。イザ之よりは此カルナが三軍を指揮し、戦陣に向ひませう、兄上さらば」

といふより早く立出でむとする、右守はカルナの手をグツと握り、目を怒らして、「コレヤ妹、女の分際として戦陣に向ふとは何事だ。越權の沙汰ではないか」

カルナ姫「エエ此場に及んで、越權も鐵拳もありますか、上はタルマンを始め下一兵卒の端に至る迄、力を合せ心を一にして、王家と國家を守らねばならぬ此場合、ササそこ放して下さい」

ともがけど、剛力に掴まれたカルナ姫の細腕は容易に離れなかつた。カルナ姫は幸左の手を握られてゐたのだから、右の手にて懐劍の鞘を拂ひ、右守の二の腕をグサツと突き刺せば、パツと散る血潮と痛さに驚いて手を放したり。カルナ姫は、ハルナ殿、サア、ムリませ。妾と共に防戦の用意、吾君様、ヒルナ姫様、御身を御安泰に

と言ひ乍ら、一目散に駆け出した。

刹帝利「汝不届至極な右守司、此場合になつて、卑怯未練にも防戦の用意を致さぬとは、不忠不義の曲者、一刀の下に斬りつけてくれむ、覺悟いたせ」

と大刀をスラリと抜いて斬りつけむとする。ヒルナ姫は王の腕にすがりつき、

「吾君様、暫くお待ち下さいませ。妾が悪いのでムいます、ここに一切の罪科を自白致しまする。何卒右守をお斬り遊ばすならば、それより先に妾を御手にお掛け下さいませ。そして臨終の際に申上げておかねばならぬ事がムいます。此右守は表に忠義面を装ひ、數多の軍隊を擁し、内々手をまはして國民を煽動し、各地に暴動を起させ、收拾す可らざるに至るを待ち、已むなく王様を退隠致させ、

自ら取つて代つて、刹帝利たらむとの野心を抱いて居ります。妾は陰になり陽になり、此野謀を悔い改めしめ、王家を救はむ爲に、彼と不義の交はりを致しました。これも全く王家を思ふ一念より女の「あさはか」な心から、女として行く可らざる道を通りました不貞の罪、萬死に値致しますれば、何卒妾を先へ御手にかけ下さいまして、右守を御成敗下さいませ、偏に願ひ申します」

刹帝利は之を聞いて、怒髪天を衝き、一刀の下にヒルナ姫を斬り捨つるかと思ひきや、刀を座敷に投げ捨て、ドツカと坐し、両手を組み、涙をハラハラと流して云ふ、

刹帝利「ヒルナ姫、其方の心遣ひ、吾は嬉しう思ふぞよ。女の行く可らざる道を行つて迄も、王家を守らむとした其誠忠、實に感歎の餘りである。併し乍ら其自白を聞く上は、最早吾妃として侍らす事は出来ない。可愛相乍ら、夫婦の縁を切る。併し乍ら以前に變らず、王家の爲に盡してくれ、其方の赤心は實に感謝致すぞよ」

とヒルナ姫の背を撫でて慰めた。ヒルナ姫は王の愛情に絆され、立つてもゐても

みたたまらず、懐劍を抜くより早く吾喉につき立てむとしたるを、タルマンは目  
敏く之をみて姫の手を固く握り涙と共に、

「姫様、吾君のお許しある上は、國家危急の場合、自殺などなさる所では  
せぬ。そこ迄の覺悟をお定めなされた以上は、王家の爲に今一息の命を存らへ、  
敵の陣中に駆け入り、假令一人なり共敵を惱ませ、勇ましく討死なされたらどう  
でございませう。さすれば姫様の死花が咲くといふもの、勇猛な女武者として、千  
載に其芳名が傳はるでせう、暫く思ひ止まつて下さいませ」

と涙乍らに諫止する。姫は打ち頷き、

「ああ如何にも、其方の言ふ通り、王様の爲に陣中に駆け込んで命を捨てませう。  
今此處で自害して果つれば、犬死も同様、不義不貞腐れの女よと、醜名を後の世  
に流すのも残念でございませう。ああよい所へ氣がついた」

と氣を取直し、俄に武装を整へ、後鉢巻凍としめ、薙刀小脇に掻い込み、門外さ  
して只一人、トウトウトと足早に駆け出す其勇ましさ。王は後姿を見送つて、  
手を合せ「盤古神王守らせ玉へ」と祈願を凝し、且つ姫が天晴、功名手柄を顯は

して、華々しく凱旋せむ事を祈願した。左守司は老齡の事とて、王の命により王の側近く仕へた。タルマンは、タルマン「われも之より戦陣に向ひ、一當あてて敵の肝を冷してくれむ、吾君様、さらば」

と言ひ残し、武装を整へ、表をさして一目散に驅けり行く。

(大正一二・二・一三 舊一一・一二・二八 於龍宮館 松村眞澄録)

## 第一章 艷兵(一三七四)

鬼春別の股肱と頼む、シヤムは驀地に城内を襲ひ、ハルナの指揮する軍隊を片ツ端から斬りちらし、薙倒した。城内の味方は周章狼狽し、武器を捨て、卑怯にも一目散に四方八方に散亂した。ハルナは槍を提げて敵の陣中に入り、縦横無盡に戦へども、敵は目に餘る大軍、遂に力盡き、身に十數創を蒙り、無念の齒を食



ひしばり乍ら、ドツと倒れた。シヤムは部下に命じ、高手小手に縛つて捕虜となし、城内の庫に投込み繋いでおいた。夫れより王の殿中に阿修羅王の如き勢にて進み入り、右守のベルツを苦もなく捕縛し、之れ又ハルナを投込んだ庫の中に繋いでおいた。ビクトリア王、キュービットは弓に矢をつがへ、よせ来る敵を七八人倒した。王の弓弦はプツツと切れた、最早運命之れ迄なりと、短刀を引ぬき自殺せむとする一刹那、左守は弓の手をやめて、王の手に縋りつき、涙と共に自殺を思ひ止まらむ事を諫めた。

左守「モシ吾君様、短氣をお出しなされますな。神様のお守りある以上は、屹度此戦ひは恢復が出来ます。貴方がお崩御になれば、どうして三軍の指揮が出来ます。ませう。國家の爲に死を思ひ止まつて下さいませ」  
と一生懸命に止めようとする、王は決心の色を浮べ、  
刹帝利「此期に及んで、卑怯未練に命を存らへむとし、却て名もなき雑兵に首を渡せば王家の恥辱、其手を放せ」  
左守「イヤ放しませぬ」

と争ふ所へ進み来るシヤムは、有無を言はせず、數十人の雑兵と共に二人を捕縛し、猿轡をはめて、同じ庫の中に繋ぎ、バラモン軍の萬歳を三唱した。

カルナ姫は到底味方の勢力にては敵し難しと見て取り、俄に武装を解き、美々しき身を装ひ、蓑笠を着け、旅人と扮し、軍隊の進み来る路傍に呻き聲を出して、ワザと倒れてゐた。久米彦將軍の副官エミシは百餘の軍隊を引率して、進み来る路傍に何者か倒れてゐるのを見て、部下のマルタに命じ、調査せしめた。

マルタ「コレヤ、其方は吾々が進軍の路傍に横たはり、不都合千萬、何者だ」と言ひ乍ら蓑笠を無雑作に引「むし」つた、みれば妙齡の美人が苦し相にウンウンと呻いてゐる。

マルタ「モシ、エミシ様、ステキ滅法界の美人でムいますぞ。これは旅人と見えますが、餘り澤山な軍隊の勢に恐れ、女の小さき心より吃驚を致して、目を廻したのでムいませう、何と美しい者でムいますなア」

エミシ「成程、立派な女だ。何は免もあれ、久米彦様の御前に連れ参り、將軍のお慰みに供したならば如何であらうか」

マルタ「如何にも將軍は定めて満足さるるでせう。然らば之より拙者がお届け申  
しませう」

エミシ「マルタ、決して其方の手柄に致しちやならぬぞ、……エミシが將軍様に  
お届け申せ……と云つたと傳へるのだぞ」

マルタ「へへへ、決して如才はムいませぬ、御安心下さいませ」

と三四人の部下に擔がせ、マルタは後に跟いて、將軍の假陣營へ送り行く。エミ  
シは城内を指して、四邊の民家に火をつけ乍ら、猛虎の勢、勝に乗じて進み行く。

一方ヒルナ姫は到底戦利あらずと見て取り、同じく旅人の風を装ひ、軍隊の進  
み来る路上に横たはり、黄泉比良坂の戦ひに、大神が桃の實の紅裙隊を用ひ玉ひ  
し故智に倣ひ、敵の主將を吾美貌と辨舌を以て説服せしめむと忠義一途の心より  
危険を冒して待つてゐる。此處へ隊伍を整へ堂々とやつて來たのは、鬼春別の股  
肱と頼むスパールであつた。スパールは目敏く、ヒルナ姫を見て、其美貌に肝を  
つぶし、軍隊の進行を止め、ヒルナ姫の前に進みよつて、  
スパール「其方は進軍の途上に何を致して居るか、早く立去らないか」

とワザと聲高に罵りける。

ヒルナ姫「ハイ、妾は旅の女でムいます。ビクトル山上の盤古神王様の祠へ参拜の爲、遙々参りました所、餘り澤山のお武家様で肝を潰し、腰を抜かし、一步も歩めなくなりしました、何卒お助け下さいませ。決して身に寸鐵も帯びない女なれば、お手向ひは致しませぬ」

と涙含みつつ言ふ。スパールはヒルナ姫の美貌を熟視し、首を傾け舌をまき乍ら、ウツトリとして見とれてゐる。

暫くあつてスパールは顔色を和らげ、

スパール「イヤ、旅のお女中、決して御心配なさるな、拙者が貴女の身の上は安全に守つて上げませう。……従卒共、鬼春別將軍の御前に、スパールが此女を宜しくお頼み申したと云つて送り届けて来い」

「ハイ」と答へて、前列の兵卒二名、従卒二名と共にヒルナ姫を大事相に擔いで、鬼春別將軍の陣營に送り届けたり。

鬼春別、久米彦兩將軍の陣營はテントを張りまはし、若草の芝生の上に臨時に

造られてあつた。そして兩將軍とも一つのテントを隔つるのみにて、二間許りの距離を有するのみであつた。久米彦將軍は味方の勇士の戦報を聞きつつ、ビクトリア城内外の地圖を披いて、敵味方の配置を調べてゐた。そこへマルタは四人の兵卒に美人を昇かせて入來り、マルタ「エー、將軍様に申し上げます、城内の敵は殆ど殲滅致しました様子でいますれば、先づ御安心遊ばせ。就きましては何處の者とも知らず、吾々軍隊の威勢に恐れ、路傍に倒れ目を眩かしてゐる女がムいますので、強い計りが武士の情でない、と、近寄つてみれば、かくの如き妙齡の美人、やうやう介抱を致し、息を吹返させました。所が貴方の副官エミシ殿が一目みるより目を細くし、涎をくらせ玉ひ……惜いものだなア、此女を陣中の無聊を慰むる爲、吾女房にしたいものだ……などと蟲のよい事を申します。併し乍ら、此女をみつけたのも、介抱致したのも、拾つたのも此マルタでムいます。言はば戦利品同様、中々エミシの自由には致させませぬ、之は將軍様に献上し、陣中のお慰みに供したいと思ひ、ワザワザ送つて参りました。何卒首實檢の上、お受け取り下さいますれば有難う存じ

ます』

と追従を竝べて述べ立てた。久米彦は一目見るより恍惚として、目を細くし、涎の滴るのも知らなかつた。されど隣のテントには上官の鬼春別が陣取つてゐる事とてワザと聲を尖らし、

久米彦「不都合千萬な、此陣中に女を持ち運ぶとは、武士にあるまじき其方の所業、汚らはしい、トツトと持ち歸れ」

マルタ「へー、貴方は日頃の御性質にも似ず、斯様な美人がお氣に入りませぬか。左様なれば是非には及びませぬ、此戦争がすむ迄どつかにしまひおき、私の女房に致し、軍隊を辭して、樂しき一生を此ナイスと共に送ることに致しませう。何程軍人なればとて、女一人を見すてるは武士の取るべき道ではムいますまい。お氣にいらねばどつかへ連れて参ります」

と四人に目配せして伴れ歸らうとする。久米彦は、慌てて、手を頻りに振り乍ら、久米彦「アア、イヤイヤ、汚らはしいと云ふは表、ソツと其女をここへおツ放り出し、其方は一時も早く戦陣に向つたがよからう」

マルタ「へッへへへ、ヤツパリお氣に入りましたかな。猫に松魚、男に女、何程軍人だとして、女の嫌ひな男はムいますまい。併し乍ら喉をならして欲しがつてゐる男も澤山ムいますから、餘り、お氣に進まぬものを無理につきつけようとは申しませぬ。これ程の美人を貴方に獻るのに、苦蟲を嚙んだやうな面をして居られちや、根つから張合も骨折甲斐もムいませぬワ」

久米彦「軍人は戦争さへすれば可いのだ。ゴテゴテ申さず、早く立去つて戦陣に向へ、怪しからぬ代物だ」

とワザとに隣室に聞えるやう、唼鳴り立てた。マルタは面をふくらし、ブツブツ小言を言ひ乍ら、シヨゲシヨゲとして再び陣中に進み入る。

久米彦は四邊の幕僚を種々の用を言ひつけ、遠ざけおき、女の側近く寄り、背を撫で乍ら、猫撫で聲を出し、

久米彦「其方は何處の者だ。殺氣立つた軍隊に出會ひ、嘸驚いたであらうのう。此方は久米彦將軍と云つて全軍の指揮官だ。最早吾懐に入る上は大丈夫だ、安心

致せよ」

女をんな「ハイ、妾わらわははカルナと申まをしまして、此國このくにの生うまれでこいます。日頃ひごろ信仰しんかう致いたします  
盤古ばんこ神王しんのうさま様に參拜さんぱいせむと、一人ひとりの伴つれと共に此處ここ迄こ參まりました途中とちゆうに、澤山たくさんなお  
武家ぶけさま様に出會であひ、ビツクリ致いたし、目めが眩くらみ路傍ろぼうに倒たふれて居をりました。所ところがお情深なさけぶか  
いお武家ぶけさま様に助たすけられて、斯様かやうな嬉うれしい事ことはこいませぬ。モウ歸かへりましても氣遣きづか  
ひはこいますまいかな、何なんならば貴方あなたさま様のお印しるしを頂いたき、それを以もつて軍隊内ぐんたいないを通過つうくわ  
し、歸國きこくさして貰もらへますまいかな」

久米彦くめひこは折角せつかく手に入いった此美人このびじんを歸かへしては大變たいへんだと直ただちに言葉ことばを設まうけ、

久米彦くめひこ「武士ぶしは情なさけを見知みしるを以もつて第一だいいちとする、併しかし乍ながらここ暫しばらくの間あひだはいろいろ  
雜多ざつたのよからぬ軍人ぐんじんも交まじつて居をれば、實じつに險難けんなん千萬せんばんだ。此戰このいくさが片かたづく迄まで、吾陣營わがぢんえい  
に居をつたらどうだ。それの方が其方そちの身みの爲ためには安全策あんぜんさくだと思おもふ。先まづ先まづ親おやの  
懷ふところに入はいつた心算つもりで、氣きを落おち着つけてゆつくり致いたすがよからうぞ」

カルナ姫ひめ「ハイ有難ありがたうこいます。左様さやうなればお言葉ことばに甘え、お世話せわに與あづかりませう」  
久米彦くめひこ「ヨシヨシ、それで俺おれもヤツと安心あんしん致いたした」

カルナ姫ひめ「何なんとよい陽氣やうきになつたものでこいますな。此この青あをい芝しばの上うへにテントをめ



ぐらし、陣營を構へて、三軍を指揮し遊ばす將軍様の御勇姿は、實に何とも言へぬ崇高な念に驅られます。妾も女と生れた上は、どうかして軍人の妻になりたいものでムいます、ホホホ

久米彦「其方はまだ未婚者と見えるなア」

カルナ姫「ハイ、現代の男子は總て戀愛神聖論とか、デモクラチックだとか、耽美生活だとか言つて、實は女の腐つたやうな男計りでムいますから、妾の夫と

して定むる男子が見當りませぬので、未だ獨身生活を續けて居ります」

久米彦「其方の理想とする夫は、さうすると軍人だと言ふのかな、軍人位單純な潔白な勇ましいものはない。夫に持つのならば軍人に限るなア、アハハハ」

カルナ姫「何程妾の如き者が、軍人の夫を持たうと思ひましても、駄目でムいます。軍人にもいろいろムいまして、上は將軍より下は一兵卒に至る迄、ヤツパ

リ軍人でムいますが、靴磨きや馬の掃除をするやうな軍人なら、眞平御免です。どうかしてせめて、士官位な夫が持ちたいと希望致して居ります」

久米彦は自分の鼻を抑へて、

久米彦「拙者はお氣に召さぬかな」

カルナ姫「あれマア何仰有います、御勿體ない、妾は士官級で結構で△います。

將軍様は將官級では△いませぬか。そんな事は夢に思つても罰が當ります、ホホ

ホホホ、御冗談仰有らないやうにして下さいませ。ね工將軍様」

久米彦は策戰計畫も地圖も何も放つたらかして、隣のテントに鬼春別が控へて

居る事も忘れて了ひ、ソロソロ、ド拍手のぬけた、惚氣聲を出して、カルナを膝

元に引よせ、カルナの肩を撫で乍ら、

久米彦「オイ、カルナ、さう男に恥をかかすものだない。どうだ、キツパリと將

軍に身を任すと云つたらどうだい」

カルナ姫「貴方は最早奥さまもあり、お子様も大きくなつてゐらつしやるでせう。

何程顯要な地位に立たれる貴方だとて、妾になつて女の貞操を弄ばれるのはつま

りませぬからなア、そんな御冗談はやめて下さいませ」

とワザとにプリンと尻をふつてみせた。久米彦はたまりかね、目を細くし乍ら、

久米彦「イヤ、御説御尤も、併し乍ら拙者も理想の女がないので、恥し乍ら、今

日迄にちまで獨身生活どくしんせいくわつを續つづけてゐるのだ」

カルナ姫ひめ「ホホホホ、四十しじふの坂さかを越こえてゐ乍ながら、獨身生活どくしんせいくわつを續つづけてると仰おつしや有るのは、どこか御身體おからだの一局部いつきよくぶに缺點けつてんがお有ありなさるのでムいませぬか。貴方あなたは男をとこらしい立派りつぱな男をとこ、況まして顯要けんえうの地位ちゐにあらせらるる將軍様しやうぐんさまですから、澤山たくさんの女をんなにチャホヤされ包圍攻撃はうゐこうげきをくつて、遂つひには肝心かんじんの機械きかいを毀損きそんし、六〇六號ろつびやくろくがうの御厄介ごやくかいにお預り遊あそばしたのではムいますまいか。そんな事ことであつたならば折角無垢せつかくむくの妾わらわの體からだに病毒びやうどくが感染かんせんし、一生不幸いつしやうふかうに陥おちいらねばなりません、併しかし失禮しつれいの段だんはお許ゆるし下さいませ」

と早くもカルナは久米彦くめひこの自分じぶんに惚のろけ切きつてゐるのを看破かんぱしたので、ソロソロ厭いや味み半分はんぶんに擲からか拵かひ、チラさうと考かんがへてゐる剛膽不敵がうたんふてきの女をんなである。

久米彦くめひこは目めを細ほそうし、聲こゑの調子迄狂てうしまでくるはせて、

久米彦くめひこ「コレヤ、ナイス、餘あまり男をとこを馬鹿ばかにするものでないぞ、エエー。お前まへは美うつくしい顔かほにも似にず、随分思ずいぶんおもひ切きつた事ことをいふ女をんなだな。大抵たいていの女をんなならば、かやうな男をとこ計ばかりの殺風景さつふうけいな陣中ぢんちゆうへ送おくられて來きた時ときは、ブルブル慄ふるうて、一言ひとこともよう言いはない

ものだが、お前の言葉から考へても、どうやら女子大學を卒業した才媛とみえる。どこともなしに、お前のいふ事は垢抜けがしてゐるよ。此夫にして此妻ありだ。軍人の妻たる者は軍隊を恐るるやうな事では勤まらない、今時の女性は活氣がなから實に困つたものだ。併しお前は新教育を受けた丈あつて、實に明敏な快活な頭腦を持つてゐる。イヤそれが久米彦將軍にはズツと氣に入つた。どうだ俺の奥様になる氣はないか」

カルナ姫「ハイ、有難うムいます。願うても無い御縁でムいます。併し乍ら何程新しい女だと云つても、妾には兩親がムいますから、此戦ひの終局次第、兩親の許しを受けてお世話に預りませう。貴方も今やビクトリア城攻撃の眞最中に於て、女を相手となさる譯にも行きますまいからねエ。本當に好きな將軍様だワ」

久米彦「そんな氣の永い事を言つて待つてゐられるものだない。俺はモウ情火燃え擴がり殆ど全身をやき盡さん許りになつてゐる。どうだ、此處で一つ情約締結をやらうではないか」

カルナ姫「左様ならば、互に心の底が分つたのでムいますから、豫定の夫婦と致

しておきませう。それから相當の仲介人を頼んで、兩親に掛合つて貰ひ、そこで内定といふ順序をふみ、いよいよ確定に進むべきものですから、マア楽しんで、互に吉日良辰の來るを待つ事に致しませうかねえ」

久米彦「成程、豫定、内定、確定、ヤア面白い。いかにも新教育を受けた丈あつて、お前のいふ事は條理整然たるものだ。丸で軍隊式だ、ヤ、益々氣に入つた、アハハハハ」

と他愛もなくド拍子の抜けた聲で笑ふ。カルナ姫は所在媚を呈し、「ホホホホ」と何氣なき體で笑つてゐる。併し心の中では、……夫のハルナさまはどうなつたであらうか、もしや討死をなさつたのではあるまいか、但は捕虜となつて、敵に捉はれてゐるのではあるまいか、刹帝利様や父上は如何なり行き玉ひしか……と氣も氣でなかつた。併し乍ら大事の前の一小事と、胸底深く包んで少しも色に現はさなかつたのは、天晴な女丈夫である。

鬼春別將軍は久米彦將軍の笑ひ聲に聞耳を立て、様子を窺へば、何だか艶かしい女の聲、そしてどうやら久米彦と情意投合したやうな氣配がするので、嫉けて

堪らず顔を眞赤にしてテントを出で、久米彦將軍の室に進み來り、聲を尖らして、  
鬼春別「久米彦殿、ここは陣中でムるぞ。其狂態は何事でムる」  
と怒氣を含んで叱責した。

久米彦は頭を抑へ乍ら、

久米彦「へー、エ、何でムいます、これには一寸様子があつて……」  
と頻りに腰を屈め、手を揉み、此場を糊塗せむと焦つてゐる可笑しさ。カルナ姫  
は思はず、

「フツフツフツ」

と吹出し、俯いて腹を抱へてゐる。

（大正一二・二・一三 舊一一・一二・二八 於龍宮館 松村眞澄録）

第一二章 鬼の戀（一三七五）

鬼春別は嚴然として姿勢を整へ、佩劍の柄を左手に握り、蠟螋が立上つたやうなスタイルで、

久米彦殿、陣中に女を引入れる事は、軍律の上から見ても許す可らざる所で、何故斯の如き美人を陣中に引よせ、軍務を忘れ、狂態を演じらるるか」

久米彦「ハイ、拙者が軍律に反き、女を引入れたと云つてお咎めになるならば、是非は△いませぬ。只今限り責任を帯びて辭職を仕ります」

鬼春別は久米彦將軍に今辭職されては大變だと心に驚き乍らも、平然として、鬼春別「貴殿が辭職が望みとあらば、辭職を許してもやらう、併し乍ら今日は許

す事は罷りなりませぬ。一時も早く此女を追出しめされ」

久米彦「此女を追出す位ならば、只今限りお暇を頂きませう」

カルナ姫は二人の中に葛藤を起さしめ、バラモン軍を根底から攪亂するは此時と、心中に畫策を定め、

カルナ姫「これはこれは、勇壯な活潑な、凜々しき男らしき、最敬愛する、音に名高き英雄豪傑、其御威勢は日月の如き鬼春別將軍様、初めて御目にかかります

る。女の身として陣中に入り来る事は、軍律上不都合かは存じませぬが、妾は決して自ら望んで陣中を御訪問申したのでは無いませぬ。ビクトルル山の神王の森へ参拜せむと、一人のお友達と共に来る折しも、貴方の部下に出會ひ、路傍に蹴り倒され、目を眩かしてゐました。實に無残な武士もあるもので無いませぬ。そこへエミシ、マルタの士官様が御通り遊ばし、妾を助けて此處へ送り届て下さいました。其御親切は決して忘れは致しませぬ。之も全く將軍様の日頃の御訓練と御統率の宜しきを得たるが爲で無いませぬ。妾が救はれましたのは、全く鬼春別將軍の御余光と感謝致して居ります。何卒々々仁慈の御心を以て、此陣營に静養さして下さいませれば、お肩も揉みまするし、御飯も焚かして貰ひます。如何に軍律厳しき陣中なればとて、三軍を指揮遊ばす將軍様に、女がなくては不都合で無いませぬ。一兵卒ならばいざ知らず。苟も尊貴の身を以て、假令軍中とはいへ獨身生活とは恐れ入つた事で無いませぬ。

鬼春別はカルナ姫の阿諛諂佞の言葉を眞に受けて、俄に態度を一變し、閻魔顔は忽ち地藏顔と變じて了つた。そして言葉やさしく、カルナに向ひ、



鬼春別おにはるわけ 成程なるほど、其方そなたの云いはるる通りとほだ。久米彦將軍くめひこしやうぐんは辭職じしよくを致いたすと云いふなり、さすれば拙者せつしやは只一人ただひとり、此軍隊このぐんたいを統率とうそつするには、最不便もつともふべんを感かんずる次第しだいだ。其方そなたは察さつする所ところ、高等教育かうとうけういくを受けてる様やうだから、女をんなだつて將軍しやうぐんが勤つとまらない筈はずはあるまい。只今ただいまより久米彦將軍くめひこしやうぐんの後あとを襲おそはしめ、女將軍ぢよしやうぐんとして任にんずるであらう。伊邪那岐大いざなぎのおほか神みは黄泉比良坂よもつひらさかの戦たたかひに、松竹梅まつたけうめの女將軍ぢよしやうぐんを使つかはし、大勝利だいしやうりを得えられた例ためしもある。女房にようぼうとしておくのは軍律ぐんりつに反そむくかは知らねども、將軍しやうぐんとして相あひなら並び軍機ぐんきに盡つくすは軍律違反ぐんりつゐはんでもない。と勝手かつてな理窟りくつを捻ひねり出し、カルナ姫ひめを自分じぶんのものにせむと早はやくも野心やしんを起おこし出した。

カルナ姫ひめ「ハイ、有難ありがたうムいます。妾わらはは久米彦將軍くめひこしやうぐん様が、軍籍ぐんせきに將軍しやうぐんとしてゐられるのが大變氣たいへんきに入いりましたので、實じつの所ところは假情約かりじやうやくを締結ていけつ致いたしましたなれど、女をんなに心こころを奪うばはれ、千騎せんき一騎いつきの場合ばあひに、將軍職しやうぐんしやくを辭じするといふやうな腰こしの弱よわいハイカラ男子だんしにはホトホト愛想あいさうが盡つきましてムいます。何卒なにとぞ鬼春別將軍おにはるわけしやうぐん様、憐あはれな女をんなでムいますから何卒なにとぞ々々可愛かあいがつて頂いたきたうムいます。其代そのかはり妾わらははあらむ限かぎりのべ

ストを盡し、其任務を恥しめない考へでムいます」

久米彦は慌てカルナ姫の口に手をあてる様な風で、

久米彦「イヤイヤ、カルナ殿、決して拙者は辭職は致さぬ。御安心なされ、鬼春

別將軍が餘り拙者の戀愛を干涉なさるものだから、つひ言ひ上りになつて、辭職

を致すと申したのだよ。ここ迄捏ね上げた地位を、さうムザムザと捨てる馬鹿者

があるか、よう考へてみよ。吾々の自由意志を束縛し、壓迫せむとする者あらば、

假令上官と雖も自己保護の爲に切り捨ててみせる。マアマア安心を致すがよい、

かう見えても拙者は沈勇だ。ハツハハハ」

カルナ姫「ああさうでムいましたか、それを聞いてヤツと安心致しました、然ら

ば貴方様と夫婦たることを豫約致しませう。ねえ久米彦將軍様」

鬼春別はムツとした顔で又もや怒り出し、

鬼春別「いかに久米彦將軍が軍職に止まらむと致す共、總司令官たる某が承諾致

さぬ限りは駄目だ。一旦武士の口から辭職を申出た以上は、ヨモヤ撤回すること

は出来まい、それでは男子とは申されぬ。覆水は盆に返らず、吐いた唾は呑めな

い道理、鬼春別は斷然と久米彦が職を解き、カルナ姫を以て副將軍と致すに仍つ

て、久米彦殿、劍を投出し、軍服を着替へて、早々に此場を退却めされ

久米彦「これは又理不盡な、何咎あつて、大黒主より任命されたる拙者の將軍職

を褫奪せんとなさるるか、チツとは僭越でムらうぞや。そんな亂暴な御命令には、

久米彦斷じて服従仕りませぬ

と聲を尖らし抗辨した。

鬼春別「何と云つても、上官の命令は大黒主の命令だ。グツグツ言はずに退却め

され。カルナ殿、如何でム。拙者の權威は此通り、假令久米彦將軍たり共、只

一言の下に左右する權能があるのだからなア、ワツハハハハ

カルナ姫「成程貴方は本當に好もしい將軍様、私、貴方になれば命まで差上げま

す、本當に凜々しい威嚴の備はつた、絶對無限の權力者でムいますな

久米彦は形勢益々不良と見て、燒糞になり鬼春別を睨つけ、刀の柄に手をかけ

て、只一打に斬り倒し、一層の事、自分が總指揮官とならむかと決心して、隙を

狙つてゐる。鬼春別も久米彦の様子のみならず心に心を許さず、寄らば斬らむと

柄つかに手てををかけ、互たがひに阿あうん吽うんの息いきを凝こらして、山門さんもんの仁王にわうの如ごとくつつ立つてゐる。カルナは此この態ていを見みて、

カルナ姫ひめ「ホホホ、何なんとマア御ごりやうにんさま兩人にん様の凜りり々りしいお姿すがた、どちらを見みても、花はなあやめ、甲かぶを取とらうか、乙おつを取とらうか、花はなと花はな、月つきと月つき、揃そろひも揃そろうた立派りっぱなお方かただ事こと、あああ體からだが二ふたつあつたなら、一ひとつは鬼春別おにはるわけしやうくんさま將軍しやうぐん様に従したがひ、一ひとつは久米彦くめひこしやうぐん將軍しやうぐん様に仕つかへるのだに、儘ままならぬ浮世うきよだなア」

鬼春別おにはるわけ、久米彦くめひこはカルナの美貌びぼうにゾツコン心こころを盪とろかしてゐた。カルナの精神せいしんを測はかりかね、仁王立にわうだちになつた儘まま、眼計めばかりキヨ口くちつかせてゐる。そこへワイワイとどよめき乍ながら一人ひとりの美人びじんを昇かいてやつて來たのは鬼春別おにはるわけの副官ふくわんスパール「モシ鬼春別おにはるわけ様さま、陣中ぢんちゆうに於おいて斯かやう様な美人びじんを手てに入いれました、どうか貴方あなたの御用ごように立たちますればと存ぞんじ、ワザワザ伴つれて歸かへりました。城内じやうないの戦たたかひは味方みかたの大勝利だいしやうり、最も早はや後顧こうこの患うれひは△いませぬ。何卒どうぞ此女このをんなをトツクリお調しらべ遊あそばして、よきに御處分ごしよぶんを願ねがひます」

と慇懃いんぎんに述のべた。鬼春別おにはるわけは此聲このこゑにハツとして、女をんなの面つらを見みれば、カルナ姫ひめに優まさる

数等の美人である。そして何とはなしに氣品高く、潤ひのある黒い目、如何なる男子も惱殺する程の魅力が備はつてゐた、鬼春別は久米彦との争ひをスツカリ忘れて了ひ、

鬼春別「スパール、其方は愛い奴だ、ここは久米彦の居間だ、此方の居間へ此女を通せ」

と言ひ乍ら先に立つて自分のテントに歸り、胡座をかいてニコニコして居る。スパールは美人を伴なひ、鬼春別の前に手を仕へ、

スパール「君の御命令に依り、城内を指て攻め行く折しも、吾部下のシヤム、某が計畫通りよく遵奉して、刹帝利を始め左守司其他の勇將を生捕に致しました。

最早戦ひは大勝利、御安心なさいませ。然るに、これなる女、ビクトル山の神王の宮へ参拜の途中、癩氣を起し路上に倒れて居りました故、救ひ上げて御前へ伴ひ参りました。どうぞ可愛がつておやり下さいませ」

鬼春別はニコニコし乍ら、

鬼春別「ウン、よく伴れて来た、褒美は後より遣はす。汝は之より陣營に向ひ、

十分じふぶんの注意ちゅういを拂はらつて、違算あさんなき様やうに致いたすがよからう』

スパールは『ハイ』と答こたへて、後振返あとふりかへり振返ふりかへり、出いでて行く。

此女このをんなはヒルナ姫ひめである。

ヒルナ姫ひめ『これはこれは將軍様しやうぐんさま、始はじめてお目めにかかります。妾わらははスパール様の仰おほせの如ごとく、神王しんわうの森もりへ參拜さんぱいの途とちう中しやくけ癩氣おこを起おこし、命危いのあやふき所ところを助たすけられた者ものでございます。バラモンの軍人ぐんじんといふものは實じつに仁慈じんじぶか深い方計かたばかりですなア。之これも全まったく貴方あなたさ様の御訓練ごくんれん宜よろしきの致いたす所ところと感謝かんしゃ致します。要えうするに妾わらはの命いのちを助たすけて下くださつたのは貴方様あなたさまでございます。貴方様あなたさまは妾わらはの爲ためには命いのちの親おやさま、不束ふつつかな者ものなれど、どうぞ何なになりと御用ごようをさして頂いたければ有難ありがたう存ぞんじます』

鬼春別おにはるわけは満面まんめんに笑ゑみを湛たたへ、ニコニコし乍ながら、

鬼春別おにはるわけ『ウン、ヨシヨシ、汝なんぢは之これから此方このほうの側近そばちかく仕つかへて、某それがしが顧問こもんとなり、内ない助じよの勞らうを執とつて下くだされ』

ヒルナ姫ひめは、

ヒルナ姫ひめ『將軍様しやうぐんさま有難ありがたうございます』

と鬼春別の手をワザと固く握り、鬚武者の頬に、白き柔かき頬をピタリとあてた。  
鬼春別はグデングデンになり、背筋の骨迄ぬかれたやうな調子で姫の膝を枕にし、ゴロンと横たはり、

鬼春別 鬼春別の將軍は 神力無雙の大勇士

神の御言を蒙りて 音に名高きエルサレム

黄金山へと攻めのぼる 其行がけの副事業

ビクトリア城をば占領して 刹帝利始め其後妃

左守右守は云ふも更 百の軍や司人

皆悉く斬りなびけ 戦は豫定の大勝利

帷幕の中に畫策を めぐらしめたる折もあれ

木花姫か棚機の 姫の命にまがふなる

古今無雙の美人の其方 媚びを呈してやつて來る

仁義の軍に敵はない 吾名聲に慄れて

やつて来たのはバラモンの 神の命の御たまもの

ホんに愉快な事だナア 隣に陣取る久米彦は

カルナの姫とか云ふナイス 側に近付け脂さがり

現をぬかす不態さよ 軍律厳しき中なれど

女に目のない久米彦は ドン栗眼を細うして

此上なき者と慈み 恥しげもなくデレてゐる

カルナの姫に比ぶれば 天と地との相違ある

古今無雙のヒルナ姫 どの娘か知らね共

氣品の高い此ナイス 鬼春別が枕邊に

朝な夕なに侍らして 久米彦將軍に見せたいものだ

ああ面白い面白い 男と生れた其甲斐にや

こんなナイスを一夜でも 宿の妻よと愛しつつ

楽しく嬉しく此世をば 渡つて見たいものだなア

アハハハハ、アハハハハ コリヤコリヤ久米彦將軍よ



俺おれの腕うで前まへ此この通とほり

女房にやうばうの容貌きりやうを比くらべようか

靈相みたまさう應おうといふ事ことは

ヤツパリこんな時ときに現あらはれる

鳥かじすは鳥かじす鷺さぎは鷺さぎ

權威けんゐの強つよい男をとこには

格別かくべつ綺麗きれいな女房にやうばうが

つき添そふものだ

神かみの教をしへにウソはない

ホんに愉ゆ快くわいな事ことだなア

ヒルナの姫ひめの膝ひざ枕まくら

こんな所ところを久く米め彦ひこが

一ひと目め見みたならさぞや嘸

妙めうな面つらしてさがるだろ

イヒヒヒヒヒ、イヒヒヒヒヒ」

と止とめ度どもなく涎よだれを流ながし、ヒルナの姫ひめのこ袖そでをとほして、柔やはらかい太ふ腿ともをぬらした。ヒ

ルナの姫ひめは、

ヒルナの姫ひめ「アレまあ、何なんだか温あつたかいと思おもつたら、將軍しやうぐんさま様のよだれ涎よだれだわ、ホホホホ」

鬼おに春はる別わけ「オイ、ヒルナ、貴様きさまも一ひとつ歌うたつたら何どうだ。戦争せんそうも大おほ方かたカタがついたな

り、最も早はや殺さつ伐ばつの空くう氣きも一いつ掃さうされるにま間まもなからうから、其方そなたと樂たのしく假かりのホーム

を造つくつて、陣中ぢんちゆうの花はなと謠うたはれる氣きはないか」

ヒルナ姫ひめ「ハイ、御勿體ごもつたいない其そのお言葉ことば、不束ふつつかな妾わらは、どうぞ可愛かあいがつてやつて下さくだいませ、左様さやうならば不調ぶてうはふ法な乍なら歌うたはして頂いたきませう」  
と鈴すずのやうな聲こゑで、隣となりの久米彦くめひこやカルナ姫ひめに聞きえよがしに、比較ひかくて的き透すき通とほる聲こゑで  
歌うたひ出だした。

ヒルナ姫ひめ「私の生うまはビクの國くに キールの里さとの豪農がうのうで

骨姓かばねは賤いやしき首陀しゆたの家いえ 數多あまたの下僕しもべにかしづかれ

今日けふは花見はなみよ明日あすは又また 月見つきみの酒さけと四方よも八方やもの

山野さんやに遊あそび贅澤ぜいたくの 限かぎりを盡つくしむたりしが

妾わらはの侍女ぢぢよのカルナ姫ひめ 引伴ひきつれまして神王しんわうの

森もりに參拜さんぱいせむものと スタスタ進すすみ來きたる折をり

殺風景さつふうけいな軍人いくさびと 槍やりや劍つるぎを拔ぬきかざし

雲霞うんかの如ごとく進すすみ來くるる 其その權幕けんまくの恐おそしさ

身みを逃のがれむといら立たちて 侍女ぢぢよに別わかれてマチマチに

さまよ 道ひみたる折もあれ  
にはか 俄に起る癩病

いのち 命たえむとする時に  
なまけ 情も深きスパールさま

わらは 妾を助け親切に  
いた 労はり乍ら將軍の

みまへ 御前に送らせ玉ひける  
ああ 惟神々々

ばんこしんのうじざいてん 盤古神王自在天  
かみがみさま 神々様の御恵

をし いのち 惜き命を助けられ  
いままためいぼう 今又名望いや高き

ぐん バラモン軍の總指揮官  
おにはるわけ 鬼春別の將軍が

たふと 尊き陣營に運ばれて  
おも 思ひもよらぬ御寵愛

かつむ 蒙る妾の身の冥加  
あさひ 旭は照る共曇る共

つき 月は盈つとも虧くるとも  
たとへてんち 假令天地はかへる共

つき 月おち星は失するとも  
このたいおん 此大恩はいつの世か

わす 忘れませうぞバラモンの  
いくさ 軍の君よ妾をば

いとこしへ いや永久に慈しみ  
なれ 汝が御側に朝夕に

つか 使はせ玉へ惟神  
かみ 神かけ念じ奉る

ああ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸倍ましましてよみたまさちはへ

と歌うたひ了をはり、

ヒルナ姫ひめ 將軍しやうぐんさま様、何なに分ぶん無む教育けういくの妾わらわ、歌うたなんか詠よめませぬ、何どう卒そこれでこらへて

下くださいら

鬼おに春はる別わけ 阿あ八は八は八は、てもさても立り派つぱなものだ。久く米め彦ひこが命いのちの親おやと頼たのんでる力ちから

ルらに比くらぶれば、器き量りやうと云いひ、學がく識しきの程ていどと云いひ、犯おかす可べからざる氣き品ひんと云いひ、年とし

頃ころと云いひ、着き物ものの着きこなしと云いひ、肌はだの艶つや、可か愛あいらしい手て足あし、瑪め瑙なうのやうな爪つめの

色いろ、どこに點てんのうつ所ところのない、最さい奥あう天てん國こくの天てん人にんも跣はだしで逃にげるやうな天てん下か無む二にのナ

イスいだ、阿あ八は八は八は ら

とワわザざと高たか聲こゑにて久く米め彦ひこ將しやう軍ぐんにへケけラらかしてやらうと呶ど鳴なり立たててる。

ヒルナ姫ひめ 阿あ八は八は八は、妾わらわのやうな醜し女こめを、さうお賞ほめ下くださいますと何なんだかククススぐ

つつたいやうな心こころ持もちが致いたしますワ。將しやう軍ぐん様さま、貴あ方なたは今いま妾わらわをそのやうに寵ちやう愛あいして下ください

まますが、又また外ほかの美うつくしき美び人じんが現あらはれた時には、キツと妾わらわをお捨すて遊あそばすのでムい

ませう。それを思ふと何だか恨めしうなつて参りましたワ」

鬼春別「ハハハハ、さすがは女だ。何でもない事にとりこしくらう  
其方の爲なら命でもやらうといふ決心だ」

ヒルナ姫「ホホホ何とマア辭令のお上手なお方、もし妾が今命を下さいと言つたら、すぐに臂鐵をくはすクセに、貴方は男に似合ず愛嬌のよい事を仰有いますね。流石は敏腕なる外交家丈あつて、仰有ることが垢拔が致して居りますよ、ホ

ホホホ」

鬼春別「アハハハハハ」

と悦に入つてゐる。そこへ久米彦は又ツと顔を出し、

久米彦「將軍殿、其狂態は何のザマでムるか、軍紀を何と心得めさる。拙者の目にとまつた以上は、最早了簡は致しませぬぞや」

鬼春別「アハハハハ、オイ久米彦、何だ其スタイルは、肩まで四角にして、何を氣張つてるのだ、陣中は相身互だ、チツと氣を利かさぬかい」

久米彦「將軍に一寸談判があつて伺ひました。確り聞いて頂き度い」

鬼春別「アハハハハ、戦も大方済んだのだから、さう固くなるものだない。それより早く歸つて、カルナ姫に肩でも揉んで貰うたがよからうぞ」

ヒルナ姫は久米彦將軍の面體をツラツラ眺めて、笑を湛へ、

ヒルナ姫「貴方様はバラモン軍中に於て驍名かくれなき久米彦將軍様で△いますし

たか、これはこれは失禮を致しました。妾の侍女が御世話になつた相で△います。

有難う、御懇情の程侍女に代つて、主人の妾が御禮を申し上げます」

久米彦は自分の折角手に入れたカルナ姫が、ヒルナ姫に比して美人ではあるが、

どこともなしに劣つてゐること、及第一癩に障るのは、鬼春別將軍が妻となさむ

とするヒルナ姫の侍女だといふ事を聞いたので、何だか自分の聲望を傷つけられ

たやうな氣分が仕出し、且鬼春別の妻の侍女を女房にしたとあつては、世間の聞

えも面白くない、同じ事なら、何とか云つて理窟をつけ、とつ換へつこをしてや

らうと、蟲のよい考へでやつて來たのである。ヒルナ姫は明敏な頭腦に早くも、

久米彦の心中を洞察した。何とかして兩將軍の間に隙を生ぜしめ、バラモン軍を

内部から破壊せむと思ふ心はカルナ姫同様である。ヒルナはワザと體をシヨナ

シヨナさせ乍ら、久米彦の側にツツと寄り、固い手を餅のやうな手でグツと握り、二三遍揺つて、妙な視線を向け乍ら、ワザとに頬を赤らめ、

ヒルナ姫「ああお恥しうムいます」

と意味ありげに顔をかくす。久米彦は益々悦に入り、顔の相好を崩して、

久米彦「エへへへ、これはこれはヒルナ姫どの、貴女は鬼春別將軍様と、既に業に情約を締結なさつた事は、隣室に於て、御兩所の御歌に仍つて確め得ました。

どうぞ肚の悪い、おだてないやうにして下さいな」

ヒルナ姫「ホホホ仰の如く、恥かし乍ら情約は結びましたが、まだ豫定でムい

ます。其次は内定、次に確定と、順序がムいますから、豫定内定の間は何うとも

融通のつくものでムいます。ラブは神聖でムいますから、到底権力や美貌や、金

錢や壓迫、又法律などで定めらるべきものではムいませぬ。さうでなくつてはコ

ンチーニアル・ラブが完全に成立ませぬからねえ。結婚問題は人生一代の大切な

事でムいますから、本當のデイヴァイン・ラブでなければ、末が遂げられませぬ

から、夫を定むるのは互の自由でムいますからねえ」

久米彦は既にヒルナ姫が自分に秋波をよせたものと早合點し、色男氣取になつて面の紐迄解いてゐる、之に反して鬼春別は顔面忽ち緊張し、眉をつり上げ、顔に殺氣を帯びて來た。

鬼春別「久米彦殿、ここは拙者の居間でゐる。貴方は自分の居間へ歸つて軍務に鞅掌なされ、不都合でゐるぞツ」

久米彦「へへへへ、拙者が参りますと、定めて不都合でゐませう。然らば吾居間へさがりませう。アイヤ、ヒルナ殿、拙者に跟いてお越し遊ばせ、貴女の侍女が待つて居りますよ」

ヒルナ姫「ホホホホ、妙な事を仰有いますね、侍女を主人から訪問するといふ道理がどこにゐませう。カルナ姫の方から妾の御機嫌伺ひに來る筈だゝいませぬか。どうぞカルナにさう仰有つて下さいませ」

久米彦「成程、姫様のお言葉には條理が立つて居ります。然らばカルナ姫を伺はせませ、一寸待つてみて下さい」

鬼春別「汚らはしい、カルナの如き女を拙者の居間へ伴れ來る事は罷り成らぬ…」



… ヒルナ其方は何と思ふか」

ヒルナ姫「將軍様の仰の通り、斯様な尊きお居間へ、侍女などを侍らすは畏れ多

うムいます」

鬼春別は顔色を和げ、稍得意となつて、

鬼春別「ああさうだらう、ヒルナの言ふ通りだ、流石は才媛だ。そして侍女と情

約を締結する如き下劣な人格者は吾居間に來るべきものではない、トツトと歸つ

たがよからう久米彦、これに違背はあるまいな、アハハハハ」

久米彦「これは怪しからぬ。貴方のお説では公私混淆といふもの、貴方も將軍な

らば拙者も將軍、軍務上の打ち合せも時々致さねばならず、又吾々は將軍として

お居間をお訪ね申したものの、決して一個人の資格だムらぬぞ」

鬼春別「其方は辨舌を以て、此場を糊塗せむと致せ共、左様な事に巻込まれるや

うな迂愚者ではムらぬ。サ、速にお立ちめされ、拙者のラブの妨害になり申す」

久米彦は軍刀をヒラリと抜いて、矢庭に鬼春別に斬りつけた。鬼春別はヒラリ

と體をかはし傍の軍刀取るより早く又もやスラリと引抜き、カチャカチャと刃を

合せ火花を散らし、數十合に及んだ。されど何れも手利きと手利き、龍虎の争ひ、何時果つべしとも見えなかつた。此物音に驚いて、カルナ姫はヒルナ姫の身の上を氣づかひ、慌ただしく飛んで來た。ヒルナはカルナの顔を見るより、目を以て合圖をし、……キツと仲に這入るな……といふ意味を牒した、そして二人の美人はワザと怖相に室の隅に机をかぶつて慄うてゐる、そして……何方か一人が……早くやられたら都合が好いがと、心の中に念じてゐた。

斯かる所へ、スパール、エミシの兩人は歸り來り、此態を見て驚き、二人は中にわつて入り、

スパール「モシ鬼春別將軍様、少時お待ち下さいませ」

エミシ「久米彦將軍様 暫く暫く」

と大手を擴げて立つた。これ幸と兩人は劍を鞘にをさめ、ハアハアと息を凝らし乍ら、俄作りの椅子に腰をおろした。

ヒルナ姫、カルナ姫はヤツと安心したものの如く、ワザと不安な面をし乍ら、ハアハアハアと息を喘ませ、胸を撫で下ろし居たりける。

(大正一二・二・一三 舊一一・一二・二八 於龍宮館 松村眞澄録)

第一三章 醜嵐しごもり(一三七六)

スパール、エミシじやうじん兩人の仲裁ちゆうさいによつて鬼春別おにはるわけ、久米彦兩將軍くめひこりやうじやうじんの斬きり合あひも漸やうやく治をさまつた。兩將軍りやうじやうじんは椅子いすにかかつてハートに波なみを打うたせ乍ながら汗あせを拭ぬぐつてゐる。スパールは鬼春別おにはるわけに向むかひ恭こつしく、

スパール「もし將軍様しやうぐんさま、何故なにゆゑのお争あらそひでムごいますか。三軍さんぐんを指揮しきし部下ぶかに模範もはんを示しめすべき尊たふとき御身おんみを持ち乍ながら、此状態このじやうたいは如何どうですか。之これには何なにかの様子やうすある事ことと思おもひますが、此副官このふくわんに包つつまず隠かくさず御打明おうちあかし下くださらば、拙者せつしやは拙者せつしやとして最善さいぜんの方法ほうはふを講かうずる考かんがへでムごいます」

鬼春別おにはるわけは赤面せきめんし乍ながら言いひ憎にくさうに、  
鬼春別おにはるわけ「いや、別にべつに大たいした事ことはない。あまり無聊ぶれうの餘あまり久米彦殿くめひこどのと擊劍げきけんの稽古けいこを

致して居つたのだ。アハハハハ

スパール「擊劍の稽古ならば何故竹刀をお持ちなさらぬ。互に眞劍を抜いて御打合とは險難千萬、拙者が驅け付けるのが、も少し遅かつたならば兩將軍共に如何なる運命に陥り玉ふかも計られますまい。萬一之丈の軍隊に重鎮を失へば軍紀は忽ち亂れ、部下の士卒は支離滅裂になつて了ひます。何卒戯れもいい加減にして下さいませ」

鬼春別「アハハハハ、えらい……もう氣を揉ませました。ツイ煽てが眞劍になつて、埒ちもない事だつたよ」

エミシは久米彦に向ひ、

エミシ「將軍様、今鬼春別將軍の仰有つた通り擊劍をなさいましたのですか」

久米彦は言ひ憎さうに、

久米彦「ウン、擊劍と云へば擊劍だが、實の所は鬼春別將軍は軍律を亂さむと致した故に一刀の許に斬りつけむとしたのだ。もう一息と云ふ時に其方がたがやつて来て、いかい邪魔を致したな。アハハハハ」

エミシこれ「之は將軍のお言葉とも覺えませぬ。拙者は貴方の副官として只今迄忠實に仕へて参りましたが、假令鬼春別將軍様に如何なる非違があるとも、刃を以て向ふと云ふ亂暴な事がありますか。拙者は之より貴方の部下を離れ、鬼春別將軍様に同情を致します。その御面相は如何ですか。顔部一面に、眼は釣り、色は褪せ、唇は紫に變つて居りますぞ。それに引替へ鬼春別將軍様は、顔色少しも變らせ玉はず餘裕綽々として存し、英雄の態度を崩さずに居られます。……何卒鬼春別様、一兵卒の末輩でも構ひませぬ。何卒貴方の直轄に使つて頂き度いものでいます」

鬼春別「又後ほど久米彦殿とトツクリ協議を致し、その意見を承はつた上、久米彦殿に異議がなければ、拙者の部下と致すであらう」

スパール「私が愚考する所によれば、此争ひはここにゐるヒルナ姫、カルナ姫の争奪戦だと考へますが、ヒルナ姫様は拙者が途上にてお助け申し鬼春別様に奉つたものでゝいますれば、別に争ひはゝいますまい。又カルナ姫はエミシがお助け申し、久米彦將軍様に奉つたものなれば、初めからきまりきつた話でゝいます。

どうか兩將軍とも如何なる御意見の衝突か知りませぬが、天から與へられた此ナイス、さうなさつたら如何ですか」

鬼春別はニコニコとし乍ら、

鬼春別「如何にも、スパールの申す通り、さう致せば問題はないのだ。久米彦殿、如何で△る。之に異存は△らうまいがな」

久米彦「はい、是非に及びませぬ。然らばカルナにて辛抱致しませう。當座の鼻塞ぎに」

と云ふのを聞いてカルナ姫は故意とに柳眉を逆立て、

カルナ姫「これ、久米彦將軍様、妾は一人前の女、當座の鼻塞ぎだとか、カルナ姫でも……とか、左様な條件のもとには身を任す事は出来ませぬ。貴方はラブ・イズ・ベストと云ふ事を御存じのないお方と見えまする。心の多い、女を玩弄物扱ひになさる悪性男の性質を遺憾なく暴露遊ばしたぢやありませんか。貴方は萍草の様な、フィランダラーで△いますな。妾の方からキツパリお断りを申し、フォーム・ウエーゼン・デヤ・リーベを辨へた鬼春別將軍様の假令下女になりとも

使つて頂く考へで△います。何卒これ迄の御縁と締めて下さいませ。左様な無情なお方に身を任すよりも、妾は寧ろセリバシー生活を営む方が何程樂いか知れませぬ。貴方の戀愛は所謂虚偽の戀愛です」

と手厳しく刎ねつけられ、又もや久米彦將軍は柄に手をかけ憤然として、カルナ姫を一刀の下に斬りつけむとした。此様子を見るよりエミシは久米彦の手をグツと握り、

エミシ「將軍殿、相手は女で△るぞ。チツトおたしなみなさい」

久米彦は「ウン」と氣の乗らぬ返事をして椅子に腰をおろした。

カルナ姫「ホホホホ、あのまア男らしうもない、見さげ果てたる久米彦將軍様、纖弱き女一人を相手に刃を抜かうとなさる其卑怯さ、未練さ、妾はゾツコン嫌になつてしまひました。ホホホホ、もし鬼春別將軍様、下女になつと使つて下さいと申したのは表向き、何卒妾を宿の妻としてイターナルに愛して下さいませ」

鬼春別は色男氣取になり、

鬼春別「アハハハハ、ても扱ても可愛いものだな。然し乍ら拙者にはヒルナ姫と

云ふ尤物が已にに豫約濟なれば、折角の願なれどもお断り申すより道はない。ヒルナ姫の許しさへあれば、其方も第二夫人として連れてやらぬ事もないがな」と云ひ乍ら、ヒルナ姫の顔を一寸覗いた。ヒルナ姫は故意と柳眉を逆立て聲を尖らし、

ヒルナ姫「これ將軍様、貴方は何とした薄情なお方です。妾に仰有つた事は皆虚偽でムいましたな。貴方の性質はアマンジャクだから甲の女にも乙の女にも手をおかけ遊ばすのでせう。眞の戀愛は一人對一人のものでムいますよ。斯う見えても妾は決して娼婦ぢやムいませぬから、カニパニズムの様な醜行は御免蒙ります。貴方は婦人に對し沈痛なる侮辱を加へましたね」

鬼春別「ア、いやいや、さう怒つて貰つちや堪らない。あれはホンの冗談だよ。お前の側であの様な事が云へるか、よく考へて見よ。流石は女だな」

ヒルナ姫「假にも三軍を指揮する御身を以て冗談を仰有ると云ふ事がありますか。左様な御戲談を仰有ると軍隊のコンテネンスが保たれますまい。どうして部下をコントロールする事が出来ませうか。よくお考へなさいませ。妾は假にも將軍様



と夫婦にならうと言擧げ致しました上は將軍様に對し、十分の御注意を申上げる  
權能が具備して居りますよ」

鬼春別「アハハハハ、賢明なるヒルナ姫の諫言により、いやもう鬼春別、目が覺  
めた様だ。何と其方は伶俐な女だな」

ヒルナ姫「カルナを貴方は如何してもお使ひなさるお考へですか」

鬼春別「さうだ。頼まれた以上は無下に斷る譯にも行くまい。下女になつと使つ  
てやらうかな。其方も腰元がなければ不便だらうからな」

ヒルナ姫「將軍様、腰元なんか要りませぬ。下女の仕事も皆妾が致します。女と  
云つたら牝猫一匹でもお側へ置きなさつたら此ヒルナが承知致しませぬぞや」

鬼春別「アハハハハ、何と嫉妬深い女だな。女は嫉妬に大事を洩らすとやら。チ  
ツトは心得たが宜からうぞや。嫉妬程女の徳を傷つけるものはないからのう」

ヒルナ姫「嫉妬のない様な夫婦關係ならば眞正の愛では無いませぬ。嫉妬せない  
女は屹度外に何かがあるのですよ。三角生活を營んでゐる不貞腐れのやる事です。

嫉妬は戀愛の神聖を表はすものです」

鬼春別おにはるわけ「アハハハハ、お面めん、お小手こて、お胴どう、お突つき、と手厳てきびしく打うち込まれては如何いかなる英雄えいゆうも退却たいきやくせざるを得えないわ。何なんと好男子かうだんしに生うまれて來くると氣きの揉もめるものだな。エへへへへ」

カルナ姫ひめ「鬼春別將軍様おにはるわけしやうぐんさま、貴方あなたが何なんと仰おつしや有あいまして、妾わらははお後あとを慕したひます。何卒どうぞお妾めかけでも宜よろしいから使つかつて下くださいませ」

ヒルナ姫ひめ「これカルナさま、お前まへさま、それ丈だけ鬼春別様おにはるわけさまにラブしてゐるならば主人しゆじんの妾わらはが貴女あなたの戀こひを横取よこどりしたと云いはれては片腹痛かたはらいたいから、何卒どうぞ鬼春別様の正妻せいさいになつて下ください。妾わらはは寧むしろ久米彦將軍様くめひこしやうぐんさまの正妻せいさいにして頂いたきます」

と兩人りやうにんが交互たがひちがひに腹はらを合あせて兩將軍りやうしやうぐんを操あやつる腕うでの凄すこさ。兩將軍りやうしやうぐんは戀こひの虜とりことなり了をり眼まなこを血走ちばしらしてナイスの爭奪戰さうだつせんに固唾かたづを吞のんでゐる。久米彦將軍くめひこしやうぐんは侍女じぢよのカルナ姫ひめに迄まで脇鐵ひぢてつを嚙かまされ、男をとこをさげ自棄氣味やけきみになつてゐた所ところへ、ヒルナ姫ひめが久米彦將軍くめひこしやうぐんの正妻せいさいにして頂いたきませうと云いつた言葉ことばに、百萬ひやくまんの援軍えんぐんを得えた様な強味つよみを感じかんじ、直ただちに得意とくいの色いろを滿面まんめんに漲みなぎらし、

久米彦くめひこ「エツへへへへ、ヒルナ姫殿ひめどの、拙者せつしやも將軍しやうぐんの一人ひとり、所望しょまうとならば御請求ごせいきうに

應じませう。人には添うて見よ、馬には乗つて見よと云ふ諺もムれば、鬼春別將軍の如き篤木さまに身を任すよりも、何程貴方は幸福かも知れませぬぞ」

ヒルナ姫「はい、有難うムいます。さう願へれば誠に幸福でムいます。マリド・ラブの眞味は、互に意氣の疎通した間柄でなくては、完全と云ふ事は出来ませぬからね」

鬼春別はヒルナ姫の形勢が何となく變になつたので又もや顔を顰め出した。カルナ姫は故意とに怒つた様な顔をして、

カルナ姫「もし、ヒルナ様、貴女は主人だと云つても妾のラブを横領する事は出来ませぬ。妾は久米彦將軍様にあの様な事を申しましたのは決して眞から云つたのぢやムいませぬ。一寸恪氣をして拗て見たのですよ。もし將軍様、妾と貴方は先約がムいますから、何卒ヒルナさまの様な方に相手にならない様にして下さいませ」

久米彦は二人の女に擲掬れてゐるのを戀に逆上せた目からは少しも氣付かず、得意になつて、

久米彦「へッへへへへ、アーア、困つた事だ。……此方立てれば彼方が立たぬ、彼方立てれば此方が立たぬ、兩方立つれば身が立たぬ。……好男子と云ふものは辛いものだなあ。もし鬼春別殿、お粗末乍ら、一旦約束を覆行し、拙者の妻と力ルナをした上、お古を閣下に進上しませうから靈相應と喜んでお受け召され。エへへへへ、之も全く上官に對する拙者の懇切と申すもの、よもや不足はムるまいな」

鬼春別は閻魔が煙草の脂を飲んだ様な顔して、巨眼を睜き、身慄ひし乍ら、劍の柄に手をかけ、顔を眞赤に染めて殺氣を漲らしてゐる。

ヒルナ姫「久米彦さま、自惚もいい加減になさいませ。貴方は腰元のカルナで結構ですよ、妾も一寸鬼春別將軍様の戀愛の程度を試す爲に斯様の事を申しました。決して心中より、誰が貴方の様なお方に秋波を送りませうか。お生憎様、チツと御面相と御相談なさいませ。ねえ鬼春別様、貴方と久米彦様とを比べれば月と蠶、雲と泥と位、其人格が違つてゐますわね」

鬼春別は忽ち顔の紐を解き、ニコニコ顔に變つて了つた。兩將軍の面相は二人

の女をんなに自由じいうじぎい自在ほんろうに翻弄あきされて秋そらの空ごとの如たちまく忽はれち晴たちまとなり、忽しぐれち時雨たちまとなり、その變轉へんてんの速すみやかさ、恰あだかも走馬燈そうまとうを見みる様やうであつた。

鬼春別おにはるわけ「おい、ヒルナ姫ひめ、随分ずいぶん其方そなたも人ひとが悪わるいぢやないか。當時たうじの教育けういくを受けた女をんなは到底たうてい一筋繩ひとすぢなはや二筋繩ふたすぢなはではおへないと聞きいてはゐたが、實じつに感心かんしんなものだな」

ヒルナ姫ひめ「ホホホホ、今時いまどきの女をんなは、こんな事ことは宵よひの口くちでこゝいいます。妾わらはは高竹寺かうちくじ女學校ぢよがくかうに於おいても最もつとも品行方正ひんかうほうせいと謳うたはれた淑女しゆくぢよでこゝいますよ。嘘うそと思召おぼしめすならば學がく

校かうへ行いつて妾わらはのメモアルを調しらべて來きて下くださいませ。行狀録ぎやうじやうろくには……品行方正ひんかうほうせいにして優美いうびなり、柔順じうじゆんにして克よく友ともを愛あいし、人ひとと親したしみ、智慧ち晃々あまくわうくわうとして日月じつげつの如ごと

輝かがやき渡り、目めは玲瓏玉れいろうたまの如ごとく、瞳孔どうこうより一種人いっしゆひとを壓あつするの光ひかりを放はなち、色飽いろあく迄まで白しろく、耳尋常みみじんじやうに、鼻はなは顔かほの中央まんなかに正ただしく位置みちを保たもち、紅くれなぬの唇くちびる、瑪瑙めなうの齒竝はなみ、背せは高たかから

ず低ひくからず、皮膚軟ひふやはらかく肉體にくたいの曲線美きよくせんびは天下てんかにその比ひを見みざるべし……とキツパリ記しるしてありますよ。ホホホホ」

鬼春別おにはるわけ「そら、さうだらう。教育者けういくしやも偉えらいものだな。よく調しらべてゐるワイ。いや、もう何なにも辨解べんかいは要いらぬ、百聞ひやくぶんは一見いっけんに如しかずだ。實物じつぶつを見みた以上いじやうは何なんにも文句もんくは

ない。いざ之より其方と將來の相談を致さう。久米彦殿、ここは拙者の事務室、  
どうか貴方の室へお歸り下さい」  
カルナ姫「最も愛する久米彦將軍様、さア歸りませう。何程ヒルナ様が妾の主人  
だつて、容貌が佳いといつても、あまり羨むには及びませぬ。本當の心と心との  
夫婦でなければ駄目ですからね」  
としなだれかかる。久米彦は、  
久米彦「ウン、よし、そんなら歸らう」  
カルナ姫「さアおじや」  
と睦じげに手を洩いて吾事務室に歸り行く。スパール、エミシの二人は逸早く軍  
務監督の爲めに、此悶錯の一段落を告げたのを見て出でて行く。

(大正一二・二・一三 舊一一・一二・二八 於龍宮館 北村隆光録)

第一四章 女の力(一三七七)

久米彦將軍は、不性不精ながらもカルナ姫を吾事務室に引入れ、葡萄酒を出して互につき交し、軍旅の憂さを慰めて居る。總て陣中は女の影無きをもつて、如何なるお多福と雖も、女と云へば軍人は喉を鳴らし、唯一の慰安として尊重するものである。久米彦はヒルナ姫と見較べてこのカルナがどこともなく劣つて居るやうに思ひ、何だか鬼春別に負を取つたやうな心持がして、女の爭奪に拔劍迄して大騒ぎをやつて居たが、事務室に歸つて來て二人差向ひ、互に意見を語り合つて見ると、鼻肩が知らねども別にヒルナ姫と何處が一つ劣つたやうにも見えない、否却て優みがあり品格が備はり、どこともなく優れて居るやうに思はれて來た。久米彦は現になつて穴のあく程カルナの優しき顔を凝視め笑壺に入つて居る。カルナ姫「もし將軍様、不思議な御縁で貴方のお傍にお仕へするようになりましてのは、全く神様のお引き合せてゝいますねえ」

久米彦「ウン、さうだなア、お前のやうな愛らしいナイスとこんな關係になるとは、遠の俺も夢にも思はなかつたよ。實にお前は平和の女神だ、唯一の慰安者だ。否々唯一の救世主だ。益良雄の心を生かし輝かし、英雄をして益々英雄ならしむ

るものは、矢張女性の力だ」

カルナ姫「何と云つても女は氣の弱いものでムいます。どうしても男には隸屬すべきものですなア。何程戀愛神聖論をまくし立てて居つても、男の力にはやつぱり女は一步を譲らなくてはなりませんわ。併し乍ら女は男子に服従すべきものと云つても程度の問題でムいまして、理想の合はない男に添ふのは生涯の不幸でムいますからな、どうかして自分の意志とピッタリ合つた男と添ひたいものと、現代の女は擧つて希望致して居ります」

久米彦「如何にも其方の云ふ通りだ。男のデヴァイン・イドムは女のデヴァイン・ラブに和合し、女の聖愛は男の聖智と和合した夫婦でなければ、眞の夫婦とは云へないものだ」

カルナ姫「左様でムいます。意志投合した夫婦位世の中に愉快なものはムいませぬなア。時に將軍様は戦争がお好きでムいますか」

久米彦「イヤ戦争の如き殺伐なものは心の底から好かないのだ」

カルナ姫「それならお尋ね致しますが、將軍様は何故心にない軍人におなり遊ば



したのでムいます。其點が妾には些とも合點が参りませぬわ

久米彦「イヤ實は拙者もバラモン教の宣傳將軍で、神の仁慈の教を説くものだ。

此度大黒主様の命令によつて、止むを得ず出陣致したのだ。實に軍人なんぞはつ

まらないものだよ

カルナ姫「貴方は今宣傳使だつたと仰せられましたねえ

久米彦「ウン其通りだ」

カルナ姫「それなら貴方は人を助けるのもつて唯一の天職と遊ばすのでせうね

え

久米彦「それや其通りだ。斯うして戦争を致すのも決して民を苦しむるためでは

ない、天國淨土を地上に建設せむためだ

カルナ姫「それでも貴方の率ゆる軍隊は民家を焼き人を殺戮し、ビクトリア城迄

も滅し、王様を虜となさつたではありませんか。ミロクの世を建設する所か、妾

の浅き考へより見れば貴方は破壊者としか見えませぬがなア

久米彦「アハハハ、建設のための破壊だ。破壊のための破壊ではない。そこをよ

く考へねば英雄の心事は分らないよ」

カルナ姫「貴方のお言葉が果して真ならば、ビクトリア城を一旦破壊されたる上は又建設なさるのでせうなア」

久米彦「尤もだ、直様建設を試み、國民を塗炭の苦しみより救ひ、至治泰平の世を來たす考へだ」

カルナ姫「そんなら貴方は、ビクトリア城の刹帝利や從臣などを捕虜になさつたさうですが、戦ひが治まつた以上は屹度解放なさるでせうなア」

久米彦「勿論の事だ。併し乍ら刹帝利其他の從臣を生かして置けば、又もや何時復讐戦を致すやら知れないから、氣の毒乍ら王を遠島に送るか、末代牢獄に放り込むか致さねばなるまい、これも天下萬民の爲だ」

カルナ姫はハツと驚いたやうな振りをして「ウン」と仰向けに倒れて仕舞つた。久米彦は驚いて抱き起し顔に水を注いだり、耳許に口をよせて、オーイ オーイと呼びかけて居る。カルナ姫は故意と息の止まつて居るやうな振を装ひ、暫くして目を開き四邊をキヨロキヨロ見廻し乍ら、

カルナ姫「アア偉い夢を見て居りました。貴方は久米彦將軍様、ようまあ無事で居て下さいました。妾は本當に怖い夢を見たのですよ」

久米彦はこの言葉が何だか氣にかかり、言葉急はしくカルナに向ひ、

久米彦「ああカルナ姫、お前は氣絶して居たのだよ。まあまあ結構々々、併し乍ら怖い夢を見たとはどんな夢だつた、一つ聞かして呉れないか」

カルナ姫「ハイ、申上げ度きは山々なれど、夢の事でムいますから、お氣を悪くしてはなりませんから、これ計りは申上げますまい」

久米彦「これカルナ姫、さうじらすものではない。何でも構はないから云つて見よ」

カルナ姫「キットお氣にさへて下さいますなや、夢でムいますからな」

久米彦「エエどうしてどうして夢なんかを氣にさへるやうな馬鹿があるか、早く云つて見よ」

カルナ姫「そんなら申上げます、妾が氣絶致しましてから随分時間が経つたでせうなア」

久米彦「何、今お前が卒倒したので直様、水をかけて介抱したのだ。先づ二分か三分間位のものだよ」

カルナ姫「そんな道理はムいませう、妾は少くとも、五六時間はかかったやうに思ひます」

久米彦「それやお前、氣絶してお前の精靈が靈界に行つたのだらう。靈界は想念の世界だから、延長の作用によつて五六時間だつたと思つたのだらう。實際は二分間だ。サア早う云つて見やれ」

カルナ姫「妾は何處ともなく雑草の原野を唯一人トボトボ参りました。さうすると天の八衢と云ふ關所がムいまして、そこには白い顔をした守衛と、赤い顔をした守衛とが嚴然として目を光らして居りました。そこへ不思議な事には鬼春別様、貴方様の御兩人が軍服嚴めしくお越しになり、八衢の門を潛らうとなさつた時に、赤の守衛は「暫く待て」と呼止めました。さうすると兩將軍は立ち止まり、「拙者はバラモン軍の統率者、鬼春別將軍だ、久米彦將軍だ」と、夫は夫は偉い元氣で仰せになりました。さうする中に牛頭馬頭の澤山の冥官が現はれ來り、貴方方

を高手小手に縛め一々罪惡の調を致しました。妾は其傍で慄ひ慄ひ聞いて居ると、先づ貴方様から訊問が始まりました。貴方も随分女を弄びなさいましたなア。さうして齋苑の館へ進軍なさつた事や、ビクトリア王を軍隊を向けて捕虜となし苦めたことや、數多の從臣を縛り上げ苦しめた事や、民家を焼き、且つ人を殺しなかつた事が調べ上げられましたよ。貴方は一々「其通りでムいます」と、大地に頭を下げ詫び入つて居られました。怖ろしい顔をした冥官は、節だらけの鞭をもつて頭部、面部、臀部の嫌ひなく、打ち据ゑます、貴方は、悲鳴をあげて叫んで居られます。それはそれは何とも云はれない慘酷い目に遇はされて居ましたよ。それから衡にかけられ、愈地獄行と定つた時の貴方の失望したお顔、私は見るも御氣の毒に存じました。さうすると白の守衛が仲に入つて、「この男は今迄罪惡を犯して來たけれど、肉體はまだ現界に居るのだから、今地獄に墮す譯には往かぬ。命數つきて靈界に來るまで待つがよい」との事でムいました。そこで貴方は非常に冥官に向つてお詫なさいました。そして其條件は「ビクトリア王をお助け申し、其他の從臣を解放し、刹帝利様を元の王位に据ゑ、自分はビクトリア王の

忠良なる臣下として仕へますから」と仰有いましたら、冥官は忽ち顔を柔げ、  
「汝果して改心致すならば、今度來る時地獄往きを赦して、花咲き實る天國に遣  
はす程に、もしこの約に背いたならば劍の地獄に落すぞよ」と、夫は夫は嚴しい  
云ひ渡しでムいました。私は身も世もあらぬ思ひで慄ひ戦いて居ると、どこと  
もなしに貴方の聲が遠い遠い方から聞えて來たと思つたら目が醒めました。やつ  
ぱり夢でムいました。何と不思議な夢ではムいませぬか」  
久米彦「何と不思議な事を云ふぢやないか、自分の精靈は何時の間にか八衢に往  
つて居たと見える。いやそれが事實かも知れない、困つた事ぢやなア」  
カルナ姫「どうぞ氣にして下さいますな、夢の事でムいますからな、併しあんな  
事が本當なら最愛の夫の身の上、悲しい事でムいます」  
と目に袖を當て差俯向いて泣き出した。久米彦は雙手を組み深い息を洩らし思案  
に暮れて居る。カルナは心中に仕済ましたりと喜びながら左あらぬ態に、  
カルナ姫「もし將軍様、貴方は大層お顔の色が悪くなつたぢやムいませぬか、妾  
の夢の中で見たお顔とそつくりでムいます。仕様もない夢の事を申上まして、御

氣分を悪くしてどうも相済みませぬ。お許し下さいませ  
と又もや泣聲になる。

久米彦「イヤ俺も些と考へなくちやならぬ。お前の夢はきつと正夢だ。あまり勢に乗じて、部下の奴が餘り亂暴をやり過ぎたと見える。併し部下の罪惡は將軍の責任だ。罪は將軍が負はねばならぬ。困つた事ぢやなア」

カルナはどこ迄も氣を引くつもりで、

カルナ姫「もし將軍様、貴方は堂々たる三軍の指揮者、かやうな夢問題に御心配なさるには及びますまい、將軍は職責として或場合には民家を焼き、人を殺し、城を屠るのは止むを得ないぢやムいませぬか。こんな事に心配しておいでなさつては、將軍として役目が勤まりますまい」

久米彦「お前は夢を見てから俄に鼻息が荒くなつたぢやないか、妙だなア。俺はお前の話を聞いて俄に未來が怖ろしくなつた。これや一つ考へねばなるまい、併し乍ら吾頭の上には鬼春別將軍が控へて居る。何程久米彦が善に立ちかへり、刹帝利を助けむと致しても、上官が首を横に振つたが最後、到底駄目だ。ああ引く

に引かれぬ板挟みとなつた。どうしたら此解決がつくだらうかなア  
と又もや思案に沈む。

カルナ姫「貴方さう御心配には及ばぬぢやムいませぬか、御決心さへ定まればその位の事は何でもムいますまい。鬼春別様は妾の主人を妻に持つて居られますから、妾よりヒルナ様に申上げ、ヒルナ様より將軍様に申上げるようにすれば、比較的この問題は解決が早いでせう。それより外方法はムいますまいなア」と心配さうに故意と首を傾ける。

久米彦「遠はカルナ姫だ。よい所に氣がついた。そんならこの問題は其方に一任する事にしようかなア。併し乍ら拙者は鬼春別將軍と何處ともなしに意志が疎隔して居る最中だから、何程ヒルナ様の諫言と雖も容易に聞くまい。ああ心配な事が出来て来たものだなア」

カルナは久米彦の顔を見て、稍嬉し氣に打笑ひ、  
カルナ姫「アア貴方のお顔は俄に輝いて來ました。何とまあよいお顔なこと、やっぱり貴方の靈に光が顯れて來たのでムいますなア。人間の顔は心の索引だと云



ひますから、心に悪心あれば悪相を生じ、善心あれば、善美の相を現ずるものと聞きました。が、今貴方のお顔の變相によつて、的確に聖哲の言葉を認識致しました。ああ益々麗しきお顔になられますよ。ああどうして妾はかかる尊い美しい夫に添うたのだらうか、盤古神王様、大自在天様、有難う存じます。何卒妾等夫婦を貴神の鎮まります高天原に、靈肉共にお助け下さいまして、現世も未來も、久米彦様と睦じく暮せますやう偏にお願い申上げます」

と誠しやかに祈願する。久米彦將軍はすっかりカルナ姫の容色と辨舌に巻込まれ、最早何事もカルナ姫の言とあれば、利害得失を考へず、正邪の區別も辨へず、喜んで聽従するやうになつて來た。實に女の魔力と云ふものは怖るべきものである。武骨一片のバラモンの名將軍も、美人の一瞥に會つては實に一耐りもなく參つて仕舞うたのである。ああ男子たるものは心を潜めて、女に注意せなくてはならぬものである。女は俗に魔物と云ふ、金城鐵壁をただ片頬の壓に覆へし、柳の眉、鈴の眼に田畑を呑み、家倉を跳ね飛ばし、男の命を取り、さしもに威儀堂々たる將軍を初め、數千の軍隊の必死の努力も、容易にメチャメチャに壞すものである。

世の青年諸氏よ、敬愛なる大本の信徒よ、此物語を讀んでよく顧み、虚偽的戀愛に身心を盪かし、一生を誤る事なきやう注意されむ事を望む次第である。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・二・一三 舊一・一・一二・二八 於教主殿 加藤明子録)

第一五章 白熱化(一三七八)

鬼春別將軍はヒルナ姫と共に、頗る上機嫌で喋々喃々と雲雀のやうに囀り乍ら、葡萄酒を傾け、舌鼓を打つてゐる。

鬼春別「アイヤ、ヒルナ姫殿、其方は拙者を嫌ひだと申し、非常に恥をかかし、久米彦將軍に非常な秋波を送つたぢやないか。さう秋の空の様にクレクレと心が變る女は、心を許して信用する事が出来ないぢやないか。本當に飛切り上等のお狭だね」

ヒルナ姫ひめ「そらさうですとも さうですとも、貴方あなたの御心おこころが御心おこころですもの、何時いつ何方どちらへ尻しりを向むけらるるか、險難けんなんでたまりませぬから、恥はぢをかかされない内に一寸ちよつと豫防線よぼうせんを張はつて見たみたのですよ。妙齡めうれいのナイスがこんな處ところへ出でて來きて男をとこに恥はぢをかかされては、兩親りやうしんの名折なをれですからね」

鬼春別おにはるわけ「アハハハハ、お前は中々まへ隅なかなかすみにはおけない代物しろものだ。男女だんぢよの道みちにかけては徹てつ底的ていてきに抜目ぬけめのない姫様ひめさまぢやなア。千變萬化せんべんばんくわ祕術ひじゆつを盡つくして戰陣せんぢんに臨のぞむ、流石さすがの鬼春おにはる別將軍わけしやうぐんも、お前の辣腕らつわんには舌したを卷まいたよ。本當ほんたうに偉えらいものだなア」

ヒルナ姫ひめ「ホホホホ、一進一退いっしんいつたい祕術ひじゆつを盡つくするのが戀愛戰れんあいせんの奧義おくぎでムいますからね」  
鬼春別おにはるわけ「何だか知しらないが、お前の天稟てんびんの美貌びぼうと云いひ、その優やさしい聲こゑと云いひ、雨う後の海棠かいだうか、露つゆを帶おびた白梅しらうめの花はなか、咲さき誇ほこつたダリヤか、牡丹ぼたんか芍藥しゃくやくか、形けい容ようし難がたいそのスタイルには、三軍さんぐんを叱咤しつたする勇將ゆうしやうも、旗はたを卷まき矛ほこを逆さかしまにして降かう伏ふくせなくちやなくなつて來くるわ、ハハハハハ」  
ヒルナ姫ひめ「ようマア、ソナ事ことを云いつて人ひとのわるい……若い女わかをんなを擲から拵かひ遊あそばすのですか。ほんに憎にくらしい人ひとだわねー」

と横目を使ひ乍ら、將軍の手の甲を血の出る程抓つた。將軍は優しい手で血の出る所まで抓られ、益々相好を崩し、聲の調子迄變へて、鬼春別「オイ、ヒルナ、馬鹿にすない。これでも一人前の男だぞ」

ヒルナ姫は、

ヒルナ姫「エー憎らしいお方、ヨウそんな事を仰有いますワイ。貴方は三千人前の立派な男さまぢやありませんか。三千人の軍隊を引率れ、その總指揮官となつてゐるのでせう。さうすれば貴方一人の心で三千人の軍が、廻れ右、左へオイ、と三寸の舌に依つて、自由自在にゼンマイ仕掛の人形のように動くのぢやありませんか。本當に憎らしい將軍様だなア」

と云ひ乍ら、優しい手で頬邊を痺れる程三つ四つ続け打ちに打つた。

鬼春別は惚氣切つてゐるので、……ヒルナが假令撲つても抓つてもかまはぬ、一遍でも身體に觸つてくれたら、それで満足だ……と云ふ氣持になつてゐる。其間の消息を見ぬいてゐるヒルナ姫は、一口云つては頬を叩き、一口云つては腕を抓り、しまひには髭をひつぱり、鼻を撮み、兩手に顔をかかへて唾を吐きかけた

り、玩弄物いらへものにしてゐる。鬼春別おにはるわけはただ、

鬼春別おにはるわけ「エへへへへ、無茶むちやすない。誰たれが見みてゐるか知しれないぞ。俺おれの面つらがそれ程ほど

面白いおもしろか」

なぞと、笑壺えつぼに入いつてゐる。

ヒルナ姫ひめ「古今ここんどつ獨歩どつぽ珍無類ちんむるみ奇妙きめつ天烈きてれつ、世界せかいに類るの無ない、何處どこともなしに惚々ほればれす

る男をとこらしい面かほだね。妾あたこんな面かほを百年ひやくねんも千年せんねんも覗のぞいてゐたいわ」

鬼春別おにはるわけ「エへへへへ、覗のぞかしてやりたいのは山々やまやまなれど、苟いやしくも身軍籍みぐんせきにあるも

の、何時いつ馬腹ばぶくに鞭むちを加くはへ、砲煙彈雨ぱうえんだんうの中なかを疾驅しつせなければならぬかも知しれない

職掌しよくしやうだからの。マア今いまの内うちに穴あなのあく程ほど樂たのしんで見みて置おくがよいわ」

ヒルナ姫ひめ「オホホホホ、本當ほんたうに縦たてから見みても横よこから見みても申分まをしぶんのない好いい男をとこだわ。

丸まるで神かみさまの様やうな御面付おかほつき、あんまり可愛かあいくて此このふつくらとした頬邊ほほへたの肉にくを一口食ひとくちた

べたい様やうだわ」

鬼春別おにはるわけ「エへへへへ、何程なにほど可愛かあいうても頬邊ほほへたに噛かみつかれちや困こまるよ」

ヒルナ姫ひめ「それでも貴方あなた、よう考かんがへて御覽ごらんなさいませ。愛熱あいねつの極點きよくてんに達たつした時ときに

は屹度嚙ぶり付くものですよ。猫が子を生んで直様其子を嘗めてやつて居ります  
が、餘り可愛くなつて終には皆喰つて了ひませうがなア。妾貴方の身體を頭の先  
から爪の先まで、スツカリ食つて見たい様な氣がいたしますわ」

鬼春別「可愛がつてくれるのも程度があるからなア、鬼娘かなんぞのやうに食は  
れて耐るものか。さうでなくても既に既に精神的にはお前に肉體も魂もスツカリ  
食はれて居るぢやないか。何と猛烈な戀だなア」

ヒルナ姫「さうですとも、あの蠅螂や蠱斯を御覽なさいませ。雌雄が交尾した後  
で、その雌は夫が可愛くなつて皆頭から食つて了ふぢやありませんか。妾貴方が  
食つて見たいと云ふのは、押へ切れない情熱が燃えさかつて居るからですよ」

鬼春別「アハハハハ、エへへへ、ここ迄女にラブされるのは男としては餘り悪  
い氣持ぢやないが、一面から考へると恐ろしい様な氣分になつて來たワイ。イヒ  
ヒヒヒ」

ヒルナ姫「コレ將軍様、貴方は妾の戀愛の程度が何處迄深いか分りましただらう  
ね」

鬼春別「ウーン、オコツク海の底よりも未だ深い様なア。到底測定は出来ないわ」

ヒルナ姫「さうでせう。妾の戀は眞劍ですよ。オコツク海の底は未だ愚か、龍宮海のドン底迄届いてみますよ。貴方の戀は汀の戀で、満潮の時には浅い水が漂うてゐますが、干潮になつた時には本當に殺風景な砂原の様なものですわ。本當にそんな事思うと貴方が憎らしうなつて來ました」

と云ひ乍ら、グツト鼻を捻る。鬼春別は鼻聲になり、鬼春別「コラコラ放せ放せ、そう無暗に鼻をいぢつてもらつちや、やりきれぬぢやないか。可愛がるのも好い加減にして止めて置いてくれ、有難迷惑だから。お前の猛烈なラブには鬼春別將軍も本當に三舍を避けざるを得ないわ」

ヒルナ姫「さうでせう。それ見なさい、白状なさいました。妾がうるさくなつて御逃げ遊ばす考へでせう。ソんならそれで宜しうムいます。妾をこんな辛い思ひをさせて焦すよりも、態よう貴方の軍刀で一思ひに殺して下さいませ。それが妾の無上の望みでムいます」

鬼春別「コレ八怪しからぬ。そこ迄深はまりをしちや駄目だよ。コレ、ヒルナ、お前は俺の美貌に戀着の餘り、眼が眩んでゐるのぢやないか。頭腦がどうかなくて居るのぢやあるまいかなア」

ヒルナ姫「ソラさうですとも、些とは頭が變にもなりませう。攝氏の百度以上に

も逆上せあがつてゐるのですもの」

鬼春別「ヤ、それも結構だが、俺もさう兩方の手で頬を抱へられてゐると首も廻らないから、マア一寸一服さしてくれ、肩が凝るからなア」

ヒルナ姫「エ、憎らしい此人、髯むしつて上げませうか。肩が凝るなんて、そら、さうでせう。カルナさまだつたら御氣に入るのでせうけれど、妾の様な土堤南瓜の七お多福では御氣には召しますまい」

と頤の髯をグツと握つてチヨイチヨイとしやくつた。

鬼春別「アイツタタタ、マア待つてくれ、さう熱愛されては、イツカナ好色男子も往生だ。何とマア猛烈な戀慕者が出來たものだなア。へへへへへ」

ヒルナ姫は鬼春別の息が臭くて堪らなかつたけれども、態と惚た様な面をして



一秒時間も早く離れたいのを辛抱し、わざと鬼春別が困る所迄根比べをしてゐたのである。

鬼春別「オイ、ヒルナ姫、男が手を合して頼むからチツト許り放れて居つてくれ。斯う云つたつて決してお前を嫌ふのぢやないから、悪うは思はぬやうにして呉れ」  
ヒルナはわざと不足相な面をして、

ヒルナ姫「ハイ、お氣に入りませぬからねー」  
と云ひ乍ら、左の手で目と目の間を平手でグツト突いた。

鬼春別「アーアー、山の神さまのエライ御劍幕、イヤもう、恐れ入谷の鬼子母神だ。俺は又どうしてこんな女に好かれる男に生れて來たのだらう。何故モツト俺の両親は不細工に生みつけなかつただらう。今となつては却て恨めしいわ。女に嫌はれるのも餘り氣の好いものぢやないが、斯う好かれるのも餘り有難迷惑ではない、嬉しいわ」

ヒルナ姫「ソラさうでせうとも、迷惑でせうとも、カルナさまの様な氣の利いたお方だとねー、お氣に召すんですけれどねー、何と云つても頓馬ですから、將軍

の御氣には入りますまい。さうだと云つて、何だか知らぬが妾は此人が可愛くて堪らないのだもの。何程嫌はれたつて、假令假情約にもせよ、結んだ仲だもの、モットモット耳を抓つたり、髭を引いたり、鼻を撮まして貰ひますわ」

鬼春別「オイ、ヒルナ、さう御面、御小手、御胴、御突と來られちや將軍だつて恠へ切れないわ。何程三千人の代表者だと云つても軍服を脱いで裸になれば、只の人間だからなア」

ヒルナ姫「妾今の御言葉が大變氣に入つてよ。正直な告白ですわ。男は裸百貫と云ひましてね、軍服だの位階だの、爵位だのと云ふ人工的の保護色に包まれてゐる人は、本當の人間味の分らない人ですわ。貴方はこれ丈け立派な地位に身を置き乍ら、平民主義だから、本當に好きですわ。平民主義の人は些も女房にだつて又世間の人にだつて壓迫を加へたり、苦しめたりしませぬからね」

鬼春別「ウン、そらさうだ。俺は平民主義だよ。人間の作爲したレツテルなんか、抑末だからね。人間は神様の御子だから、何處迄も博愛と仁義とを以て世に立たねばならぬ。殺伐な利己主義の悪行は人間の爲す可き事ぢやない。俺はさう云ふ

人間を見るところと忽ち嘔吐を催す様な氣になるのだ」  
ヒルナ姫「本當に賢明な仁慈の深い將軍様ですな、妾それが大好きですよ。久米彦さまは一寸見た所では男前は貴方さまより、少し立派なやうですが、何と云つても殺伐な御方だから、妾御存じの通り思想が合ひませぬので肘鐵をかまして辱しめてやつたのですよ。貴方は仁慈の將軍様だから決してビクトリア王を攻めたり、城を破つたり數多の從臣を捕虜にしたり、民家を焼いたり、そんな慘酷な事はしませぬわねえ。道行く人の話を聞いても、兵隊さんの話を聞いても鬼春別將軍様は本當に聖人君子のやうな將軍様だ。それに引かへ久米彦將軍は氣の荒い情知らずだから、ビクの國のビクトリア城を攻めたり、刹帝利様を捕虜にしたり、城内の從臣を酷い目に合すのだ。これは決して鬼春別將軍様の御心ではあるまい、久米彦將軍の軍が頑張つて、アンナ事をするのだらう。鬼春別將軍様が之を御聞きになつたならば、屹度久米彦將軍を叱りとばし、性來の御仁慈を以てビクトリア王を救ひ出し、其他の從臣をお助け遊ばすに違ひないと、十人が十人迄噂をしてゐましたよ。貴方の人望は本當に大變なものですから、將軍様の後姿なりと一

目拜まして頂き度いと思ひ、一年前から神様に願つてみたのですよ。本當に貴方の御心は神様見たやうですね」

鬼春別は最愛のヒルナに斯う云はれては言葉を返す勇氣もなかつた。俄に顔色を和らげて、

鬼春別「ウーン、お前の云ふ通りだ。あの久米彦と云ふ奴、獸性を帯びてるから仁慈も道德も何も辨へてゐないのだ。併し乍ら大黒主様の御命令に依つて將軍になつたのだから、俺が何程總司令官だと云つて無暗に免職さす譯には行かず、困つたものだ。俺は一步も外へ出ないのだから、久米彦の奴、何をして居るかわかつたものぢやない。抑も兵を動かすのは内亂を鎮定したり、又外敵を防いだりする時用ゆるもので、無名の戦を起すのは軍人として最も恥づべき所だからなア」

ヒルナ姫「承はれば承はる程、將軍様は何とした至仁、至愛、至善、至美、至眞な御方でムいませう。斯様な勇將に假令半時なりとも可愛がられる妾は、世界第一の幸福者でムいますわ。どうぞ將軍様、何處迄も可愛がつて下さいませねえ」

鬼春別「ウーン、お前の事なら何でも聞いてやる」

ヒルナ姫「妾それ聞いて益々貴方が好きになりますわ。將軍様の御名譽の爲、久米彦の向ふを張つて一つ刹帝利以下の從臣を御救けなさつたらどうでムいませう。さうすれば天下は翕然として將軍に信用が集まり、大黒主様以上の大將軍と仰がれます様に御成り遊ばすでせう。將軍が御出世をして下さらば女房の妾も出世をさして頂くのですからね。謂はば將軍の御出世は妾の出世、貴方の身體は妾の身體、貴方の悲みは妾の悲み、貴方の喜びは妾の喜び、密着不離の切つても切れぬ關係が結ばれてゐるのですからね。此處で一つ男を賣つて下さる氣はありますまいか」

鬼春別「成程、素より仁慈の某、お前が云はなくても刹帝利様に對し左様な事を致したとすれば、聞捨てにはならぬ。左様な不都合な事を致せば、一日も早く部下に命じ助けてやるであらう」

ヒルナ姫「さうなさいませ。將軍様の御名譽の爲ですから、従つて妾の名譽ですからね」

斯く話す處へ、久米彦將軍はカルナと共にほろ酔機嫌になつてやつて來た。

久米彦「これはこれは鬼春別の將軍殿、エライ御機嫌でゐるなア。拙者は一つ貴殿に御相談があつて参りましたが、拙者の申す事を、何と聞いては下さいますまいかなア」

鬼春別「何事か知らねども、其方事、上官の命令もきかず、無性矢鱈に民家を焼き、敵人を傷つけ、畏くもビクトリア王を辱しめ、左守右守の重臣を始め其他の役人共を縛り、或は傷つけ、亂暴狼藉を致したな。左様な命令を一體誰が下した」

ヒルナ姫の手前わざと呶鳴りつけた。久米彦將軍は怪訝な面をして、

久米彦「將軍は狂氣召されたか。但しは御酒の機嫌か、心得ぬ貴殿の御言葉、拙者は今回の戦争は一切閣下の指揮命令の通り、遺憾なく致したのでゐる。民家を焼き城内に侵入したのも、刹帝利以下を捕虜と致し獄内に打ち込んだのも、皆閣下の御命令に依つて致したので、實に將軍は仁慈を辨へぬ虎狼にひとしき御性格だから、部下は大に其残酷さを嫌忌して居ります」

とカルナ姫の手前、自分の聖人たる事を示さむと横車を頻に押してゐる。鬼春別は、

鬼春別「以の外の其方の雑言無禮、拙者に限つて左様な事を命令いたす筈がないぢやないか。一例を擧ぐれば其方は齋苑の館へ軍隊を引率れ、片彦將軍と共に神の館に攻寄せむといたし、河鹿峠に於て屁古垂れ、逃げ歸つたであらうがなア。某はランチ將軍と共に浮木の陣營に碁を圍み、殺伐な戦争に與らなかつたのを見ても、拙者が如何に仁慈の武士たる事は證明さるであらう」

久米彦「ナント理窟は無茶で通せば通るものですか。へへへへへ、餘りの事で開いた口が閉りませぬわ」

ヒルナ姫は二人の仲に割つて入り、

ヒルナ姫「仁慈深き兩將軍様、どうか左様な内輪喧嘩は止して下さいませ。妾悲しうムいますわ」

カルナ姫「ヒルナ様、久米彦將軍様は本當にお情深いお方でムいますよ。あの刹帝利様以下の捕らはれ人を御助け申したいが、上官の御意見を伺はねばならないと云つて、今此處へお越しになつた所ですよ」

鬼春別は云ひ遅れては一大事と氣を焦ち、わざと空惚け、

鬼春別おにはるわけ「ヤア久米彦くめひこ、貴殿きでんも其處迄改心致したか、天晴々々あつぱれあつぱれ、然らば拙者の意見せつしやいけんに御同意ごどういと見えるな。ヤア満足々々まんぞくまんぞく、サ一時いつときも早くスパール、エミシ、シヤム、マルタの屬僚ぞくれうに命じ、刹帝利以下せつていりいを救ふ可く嚴命げんめいをなさるがよからう」  
久米彦くめひこ「ナント、マア將軍様しやうぐんさま、貴方あなたは靈界れいかいへ行つた夢ゆめを見たと思みえますね。何なには兔ともあれお互たがひに満足まんぞくでムる。然らば一時いつときも早く其運そのはこびにかかると思みませう」  
鬼春別おにはるわけ「早速さつそくの承知しやうち、鬼春別満足おにはるわけまんぞくに思おもふぞや。サ早く其準備そのじゆんびにおかかりめされ」  
ヒルナ姫ひめ「流石さすがは妾わらはの夫を、鬼春別將軍様おにはるわけしやうぐんさま、何なんと見み上げた御人格ごじんかくだなア」  
カルナ姫ひめ「妾あたの夫を、久米彦將軍様くめひこしやうぐんさまは、何故なぜマア斯こんなにお情深なさけぶかい武士ものふだらう」  
と云いひ乍ながら、ヒルナの面かほを一寸覗ちよつとき、「願望成就御目出度くわんまうじやうじゆし」と目めにも言いはせ乍ながら、久米彦くめひこに従したがひ、其室そのしつにかへつた。

夫それより久米彦くめひこは、スパール、エミシ、シヤム、マルタの屬僚ぞくれうに命じ、ビクトリア王わうはじ始め左守司さもりのかみのキュービット、右守司うもりのかみのベルツ、及びハルナ、カント、エム、エクス、シエール、タルマン、其外そのほか一兵卒いつべいそつに到いたる迄までき悉ことごとく捕繩ほじようを解とき放免はうめんした。而しかしてビクトリア王わうは、無事むじに城内じやうないに、左守さもり、右守うもりを従したがへて立歸たちかへり、大神おほかみの祭壇さいだんの



前まへに端坐たんざし、涙なみだと共に神恩しんおんを感謝かんしゃした。鬼春別おにはるわけ、久米彦兩將軍くめひこりやうしやうぐんは、和睦わぼくの祝宴しゅくえんに  
刹帝利せつていりより招まねかれて、ヒルナ姫ひめ、カルナ姫ひめを伴ともなひ、意氣揚々いきやうやうとして城内じやうないに進すすみ入  
り、刹帝利せつていりより手厚てあつき響應きやうおつを受うくる事こととなつた。  
アア今後こんごの成行なりゆきは如何いかに展開てんかいするであらうか。

(大正一二・二・一三 舊一・一二・二八 於龍宮館 外山豊二録)

### 第三篇 兵權執着へいけんしふちやく

## 第一六章 暗示あんじ〔一三七九〕

ビクトリア王わうが和睦わぼくの酒宴しゅえんに招まねかれて、鬼春別おにはるわけ、久米彦兩將軍くめひこりやうしやうぐん始め、スパール、

エミシ、シヤム、マルタは客人側として、上座に順序よく座席を占めた。一方には刹帝利を始め左守右守竝にタルマン、ハルナ、エクス、シエールなどがズラリ竝んで、平和克復の祝宴が始まった。ビクトリア王は鬼春別、久米彦兩將軍の前に恭しく頭を下げ、

刹帝利「兩將軍様、此度は御仁慈の思召を以て、吾々一族をお助け下さいまして、何とも御禮の申上げやうもムいませぬ」

と泥棒に家を焼かれ、家族を殺された上、自分の命を助けて貰うたのを感謝するやうな、割の悪い立場に立つて、さも嬉しげに、恨を呑んで挨拶をしてゐる。鬼春別は威丈高になり、さも鷹揚に胡床をかき、

鬼春別「ア、イヤ刹帝利殿、其お言葉には恐れ入る。拙者は武骨なる軍人でムれば、窮屈な行儀作法などは、大に困り申す。野武士の本領を現はし、尊き殿内をも省みず、胡床をかいて御無禮を致しまする。刹帝利殿心悪しく思はず、許して貰ひたいものでムる」

刹帝利「ハイ、何を仰せられます。軍人様は素朴なのが價値でムいます。現代

は虚禮虚式の流行する世の中、貴方の如き赤裸々の軍人様は本當に頼もしう存じます。サアどうか一つ召し上り下さいませ」

と杯をさす。鬼春別は毛だらけの太い手を又ツと出し、杯を前に突出し、刹帝利の手よりナミナミとつがれて、グツと呑み干し、

鬼春別「イヤもう結構な酒でムる、五臓六腑に沁み渡る様な妙味がムる。刹帝利殿、拙者の杯を一杯受取り下され」

と無雑作にグツと突出す。刹帝利は、斯様な猫を被つた豺狼の機嫌を損ねては大變と、さも満足の態にて杯を頂き、二三回も頭を下げ、

刹帝利「これはこれは、驍名高き將軍様のお杯、謹んで頂戴仕まつります」  
鬼春別「ヤ、遠慮には及ばぬ。澤山に呑んで下さい、拙者の壞が痛む酒でもなし、

御馳走は幾らなりと喰ひ放題、イヤ早戦捷の勇士の杯をお受けになれば、チツトはあやかつて貴方も豪傑になるでせう。アハハハハ」

と豪傑笑ひをやつてゐる。鬼春別の傍に怖相に控えてゐる女は、風態こそ變れ、刹帝利の目には、どうもヒルナ姫のやうに思はれてならなかつた。併し乍ら……

世間にはよく似た女のあるものだなア……位に、老眼の事とて軽く見てゐた。そして今回の刹帝利以下を助けたのも、ヒルナ姫、カルナ姫兩人の必死の活動に仍つた事は、少しも氣がつかかなかつたのである。又ハルナは……久米彦將軍の側にゐる美人は風こそ變つて居れ共、どこもなしに最愛の妻カルナにソツクリだ。そして時々自分の方へ視線を向ける事を見れば、カルナではあるまいか、今回思はぬ嬉しい解放に會うたのも、或はカルナが斡旋の力ではなからうか……などと考へ、盗むやうにして、チヨイチヨイと女の顔を見てゐた……見れば見る程よく似てゐる、……と思ひ乍ら又も一人の女を見れば、どう思つてもヒルナ姫とより見えない。ハルナのみならず、左守右守其外一同の心も同様な疑を抱いてゐた。久米彦將軍は威丈高になり、久米彦「オイ、カルナ姫、そちは拙者の最愛の女房だ。斯様な所で一つ鶯のやうな聲を出して歌つたらどうだ。何分陣中は男ばかりで殺風景極まる。そこへ其方がやつて來たのは天の配劑、拙者の心を生かす唯一の如意寶珠だ。テモさても美しい者だなア」

カルナ姫「ハイ、モウ少しお酒がまはりましたら、何か歌はして貰ひませう。將軍様からどうぞ先へ歌つて下さいませ。まだ貴方のお歌を聞いた事がムいませぬからねえ」

久米彦は刹帝利の手からナミナミと酒をつがれ、團栗目をむき乍ら大杯からグツと呑み干し、

久米彦「拙者は刹帝利殿に杯をさしたいのだが、見れば餘程の御老體、却てお困りだらうから、最愛のカルナにさすであらう。言つても女は社交界の花、一家に取つては女王様だから、先づ女王様の御機嫌を損じないやう、取計らうが拙者の利益……と申すもの、老さらばうた刹帝利様へさすよりも、何程氣分が可いか知れないからなア。アハハハハ」

鬼春別「オイ、ヒルナ殿、何濕つてゐるのだ。陣中へ來た時には、随分べらべらと喋つたでないか、チツとあの時の元氣を、こんな席で出して貰ひたいものだ。エへへへ、ぢやと云つて、頬べたをなめたり、鼻を撮んだり、爪疵を負はされちや困るよ」

ヒルナ姫「將軍様の、マア卑怯な事を仰有いますこと、貴方は千軍萬馬の中を疾駆する勇將だムいませぬか。槍や刀の創を何時受けるか知れないお身分で在り乍ら、纖弱い女が鼻一つ位捻ぢ取つた所が、何でムいます。そんな事仰有ると鬚をむしりますよ」

と腮の鬚をグツと握つて、三つ四つしやくつてみた。

鬼春別「アイタタタ、コレ、ヒルナ、さう無茶をするものだない。エへへへへ、ヤツパリ痛うても氣分が可いワイ」

ヒルナ姫「ホホホホ、そらさうですとも、貴方のお鬚の塵を拂ふものは澤山ムいますけれど、お鬚をむしつて赤い血を出す、誠の熱烈な女は妾より外にムいますまい。あのマア、奇妙奇天烈な、人好のするお顔ワイのう、ホホホホ」

鬼春別「イヤ久米彦殿、拙者のナイスは、顔にも似合はぬヤンチャでムる。昨日始めて會うてから、未だ一度も枕も交さないに拘らず、耳をひつ搔く、鼻を捻ぢる、鬚をむしる、抓る、しまひの果てにや、拙者の面に痰唾を吐きかけるのでムる。かやうなおキヤンに出會つた者は、誠に不仕合せ、……イヤ情熱の高調した

時は、先づこんなものとみえますワイ。アハハハハハ

久米彦「成程、それは随分お楽しみでムらう、拙者のナイスは比較的因循で、而も淑女でムるから、酒の座には面白くムらぬ。實にお羨ましようムる」

カルナ姫「將軍様、何と仰有います、妾が淑女だから氣に入らないのですか。宜しい、キツと敵を討つて上げます」

と云ひ乍ら、鼻を力に任せて、捻ぢ上げた。

久米彦「イタイ イタイ イタイ、コラ無茶な事を致すない、何ぼ惚れたと云つても餘りだないか」

カルナ姫「それでも貴方、ヒルナさまのやうな目に會はして欲しいのでせう。エ工憎らしい男だこと、あたゐ、こんな男、嫌……でもないけれど……」

と云ひ乍ら、ピシヤ ピシヤ ピシヤと頬を撲つた。

久米彦「あああ、天下の名將も女にかけたら、サツパリ駄目だなア、エへへへ。鬼春別殿、拙者の色男振は此通りでムる」

鬼春別「オイ、ヒルナ、些としつかりせぬかい。久米彦に夫がヒケを取るのは、

お前まへ何なんともないのかか」

ヒルナ姫ひめ「妾わらはは實じつの所ところ、モツとモツとひどい目めに會あはして上あげたいのでムごまいます  
が、どう考かんがへても、これ丈だけ澤たく山さんお歴れき々れきのあつしやる前まへですもの、あたかもチツ  
と心得こころえて居をりますのよよ」

鬼春別おに「妾わらはと云いつたり、あたいと云いつたり、人格じんかくが二人ふたりもある様やうだ。どちらかに  
一つ、きめて貰もらひたいものだなな」

ヒルナ姫ひめ「妾わらはといふのは貴方あなたの正妻せいさいですよ。あたといふのはバイタの靈れいが憑うつ  
て來きて貴方あなたの御機嫌ごきげんを取とつて居をりますのよ。どうです、バイタの靈れいが好すきです  
か、淑女しゆくぢよが宜よろしいか、どちらかにきめて下くださいなな」

鬼春別おに「妾わらはもあたしも私わたくしも僕ぼくも拙者せつしやも、某それがしも、やつがれも、皆みな一度いちどに來こい、かふ  
云いふ目め出でたい席せきは一人ひとりでも多おほいが可いいからなな」

ヒルナ姫ひめ「ホホホホ、氣きの多おほいお方かただこと、そんなら某それがしの靈れいを呼よんで參まゐりませ  
うかか」

鬼春別おに「ウンウン何なんでもいい、某それがしでも僕ぼくでも結けつ構こうだだ」



ヒルナは俄に態度を改め、

ヒルナ姫「オイ君、鬼春別君、随分デレ助だねえ。折角骨を折つて占領したビクトリア城をヒルナ姫にチヨロマカされ、刹帝利に還すとは、本當に何うかしてゐるだないかオイ、チツと確りし玉へ」

鬼春別「コーリヤ、さう猛烈にやつてくれば困るぢやないか、何を言ふのだ」

ヒルナ姫「だつて君、よう考へてみ玉へ、君はヒルナ姫を我物にせうとして、久米公と随分陣中で斬り合までしただないか、……モシ將軍様、何だか妙な靈が憑つて来て、あんな事を申しますワ、何う致しませうかねえ、妾は本當に恥しうて

堪りませぬワ」

鬼春別「アハハハハハ、随分憑られ易い靈だのう。大方拙者に對し、君々といふからは、ランチ將軍の靈がお前に憑つたのかも知れないよ」

ヒルナ姫「成程、さう承はりますと、何だか體がヘンになつて來ましたワ。……オイ君、お察しの通り、僕はランチだよ。君も随分亂癡氣將軍になつたね。モウこんな殺伐な事はよし玉へ。それよりもヒルナ姫と夫婦になる事を考へたがよか

らうぞ。併しヒルナは到底君の手には合ふまいよ』

鬼春別「コリヤ、ランチ、馬鹿を云ふな。貴様のやうなヒヨットコには、僕の熱

烈な戀愛が分るかい、ヒルナ姫は既に既に拙者と情約濟だ。御心配御無用、マア

一杯やり玉へ』

とヒルナ姫に杯をさす。

ヒルナ姫「あれマア將軍様、妾にそんなお言葉をお使ひになると、恐ろしうなり

ましたワ。チツと優しく言つて下さいな、妾は怖いのだもの』

鬼春別「エツへへへ、そらさうだらう、軍人といふ者は、元來荒つぱい性質の

ものだからなア。ましてランチといふ奴は、仕方のない男だから、お前の肉體に

憑つて、あんな事云ひやがるのだ。餘程けなりいと見えるワイ。エツへへへ』

カルナは又もや體を四角にし、軍人のやうな態度を装ひ、

カルナ姫「オイ、君、久米彦、久し振だねー。僕は片彦だよ。河鹿峠では随分泡

を吹いて將軍の威勢は全く地におちたでないか。本當に僕も君も軍人の面汚しだ

ね。併し君は偉いワ、ビクのやうな小さい國を占領しやうとやつて來たのは、本

當たうに先見せんけんの明めいありだ。併しかし乍ながら一ひとつの缺點けつてんは女をんなに溺おほれる事ことだ。

久米彦くめひこ「ヤ、又また此こいつ奴へん、變へんになりやがつたぞ。拙者せつしやのローマンスを羨望せんぼうして、片彦かたひこの精靈奴せいれいめ、大切たいせつなカルナ姫ひめの體からだを自由じゆうにしやがる。……コリヤ片彦かたひこ、貴様きさまの來く所ところだない、早はやくここを立去たちされ立去たちされ。」

カルナ姫ひめ「ホホホホ、もし將軍様しやうぐんさま、あたゐ、何なんだか、恐おそろしくなつて來きましたわ、何者なにものがあんな亂暴らんぼうな事ことを言いふのでせうかね。」

久米彦くめひこ「ウン、お前まへの知しつた事ことだない、心配しんぱいするな、お前まへは靈みたまが水晶すいしやうだから、確しつりせぬといろいろの靈れいに憑つられ易やすいからなア。」

斯かくしてヒルナ、カルナは互たがひちがひに兩將軍りやうしやうぐんを、刹帝利せつていりやハルナを始め其他その他の前まへに翻弄ほんろうして、それとはなしに自じ分の意い志しを悟さとらしめんと努つとめてみたのである。ビクトリア王わう始めハルナは早はやくも二女にぢよの態たい度どに仍よつて嫉妬しつとの念ねんも晴はれ、女をんなの恐おそろしき魔力まりよくに感歎かんとんし、且かつひそかに舌したをまいてみた。

鬼春別おにはるわけは醉ゑひが廻まはつて、ソロソロどら聲こゑをはり上げ歌うたひ出した。

鬼春別おにはるわけ「ここは名なに負おふビクの國くに ドツコイシヨウ ドツコイシヨウ

ビクの都みやこの刹帝利せつていり 老おいぼれ爺ぢいさまが頑張ぐわんばつて

左守さもり右守うもりの家來けらいをば 抱かかへて威勢ゐせいを近國きんごくに

示しめして居をつた時ときもあれ バラモン教けうで名なも高たかき

鬼春別おにはるわけの將軍しやうぐんが 率ひきゆるナイト三千騎さんぜんき

破竹はちくの勢敵いきほひてきし得えず 忽たちまち捕虜ほりよとなり果はてて

土藏どざうの中なかに手足てあしをば 縛しばりて無殘むざんに投なげ込まれ

無念むねんの涙なみだを絞しほる折をり 天女てんによの様なやうヒルナ姫ひめ

天てんの一方いつぱうから降くだつて來きて ドツコイシヨウ ドツコイシヨウ

色々いろいろ雑多ざつたと道みちを説とき 抑人そもそまとの生涯しやうがいは

ラブ・イズ・ベストが肝腎かんじんだ などとしほらしい事ことを云いふ

仁慈じんじに富とめる此方このほうは 兇惡きようあく一途いちちうの久米彦くめひこを

やつと説とき伏ふせ刹帝利せつていり 其他そのたいちどう一同いどうを解かい放はうし

助たすけてやつたは救世主きうせいしゆ 神かみに等ひとしき名將めいしやうぞ

其その酬むくいにやヒルナ姫ひめ  
一いち瞥べつ城しろを傾かたむける

様やうな眼まなこを光ひからして  
鬼おに春はる別わけを慇いん懃ぎんに

もてなしくるる樂たのしさよ  
ああ惟かむ神ながら々々

女をんなの惚ほれる男をとこぞよ  
情なさけを知しつた英えい雄ゆうぞ

コリヤ コリヤ久く米め彦ひ某それがしが  
申まをす言こと葉ばに無む理りなかる

アハハハハハ、アハハハハハ。

オイ、ヒルナ、モ一杯いっぱいついでくれ。そして一ひとつ歌うたつたり歌うたつたり  
『

ヒルナ姫ひめ 『今こんど此この度たびの戦いくさについてね 私わたしの好すきなは只ただ一ひとり人

色いろが黒くろうて齒はが田た螺にし  
眼まなこ團どん栗くりでベラ作さく眉まゆ毛

鼻はなは唐から獅し子し耳みみ兔うさぎ  
繻しゆ子すのシヤツてつポつンつ鐵てつの杖つゑ

ブリキの様やうなサみーつベルさげて  
自みづから率ひきゆる三さん千ぜん騎き

こんな男をとこがあればこそ  
今こんどの難なん儀ぎが助たすかつた

かく云ふ聲はヒルナ姫

其肉體の聲だない

ランチ將軍の精靈が

一寸ヒルナの體を借り

憎まれ口を言うたのだ

ドッコイシヨウ ドッコイシヨウ

ドッコイドッコイ

ドッコイシヨウ サーサ之から御本人

ヒルナの姫に任しませう。

モシ將軍様、又何だか、あたいに憑りましたよ。どうか退けて下さいませぬかね

え

鬼春別「ハハハハ、ヤツパリ靈が良いとみえて、憑り易い女だのう。併し今日は

酒の席だから、ランチだつて、ヤツパリ俺の友人だ。今日は一切治外法權だから、

何でも可いわ、どうかお前の本性で一つ聞かして貰ひたいものだなア

ヒルナ姫「將軍様、一つ唄はして頂きませう」

と云ひ乍ら、兩手をピシヤピシヤ叩き乍ら、

ヒルナ姫「酒を呑む人眞から可愛

酔うてクダまきや尚可愛

私や將軍さまに本當に惚た

石の飛越え見えなんだ

鬼春別「妙々、モ一つ唄つてくれぬか。何だかお前の聲は五臓六腑に沁み渡るや

うだ。天女の音楽だつてこれ程に感動は與へまいて、エへへへへ……オイ久米

彦どうだ、カルナ砲臺は非常に沈黙してゐるだないか、ヤツパリ靈相應のナイス

より天から與へられぬものと見えるね。ウツフフフ

久米彦「ヘン、仰有いますワイ、……オイ、カルナ、お前も夫の恥辱を雪ぐ爲、

シツカリ奪戦してくれ

カルナ姫「ハイ、畏まりました。そんなら噴火口の詰をぬきますから、そこら中

に火山灰が散るかも知れませぬよ。どうぞ警戒を願ひます、左様なら御一同様、

御免下さいませ

と云ひ乍ら、

カルナ姫ひめ「わしの好きなは「ハルナ」の都みやこ　ハルナハルナと朝夕あさゆふに

神かみの願ねがひを掛かけまくも　畏かしこき神かみの御おん恵めぐみ

戀こいしいお方かたの其その前まへで　お酒さけを頂いただく嬉うれしさよ

世せ間けんの人は何なになりと　誹そしらば誹そしれ云いはば云いへ

わが赤まごころ心こころはハルナさま　都みやこにゐます神かみぞ知しる

何なに程ほど好すきな面かほしても　心こころの底そこが承しょう知ちせぬ

メツタに操みさをは破やぶらない　安あん心しんなされよハルナ草ぐさ

もえ立たつやうな背せの君きみよ　ハ―レヤ―レあれワのサ―

コレワのサ―　ヨ―イヨ―イ　ヨ―イトサ―

とうたひ了をはり、ハルナに「だる」相さうな視し線せんを投なげ乍ながら久く米め彦ひこの前まへに杯さかづきをつきつけ、  
カルナ姫ひめ「將しや軍ぐん様さま、エライ不ぶ調てう法ぽう申まをしました」



久米彦「エへへへへ、ヤツパリお前の歌を考へて見ると、俺を眞劍に思うてると見えるのう、可愛いものだ。イヒヒヒヒ、鬼春別殿、拙者のナイスの歌は此通りでゐる、何と高等教育を受けた丈あつて、立派な者でゐらうがのう」

鬼春別「へへん、仰有いますワイ、今にアフンとさしてやらう。サ、ヒルナ姫、夫の一大事だ、カルナを美事に投つけ、久米彦の肝玉をひしぐは今此時だ。サ、一杯呑んで、確り頼むよ」

ヒルナ姫「あたい、又妙な者が憑つたら困りますワ。モウこらへて下さいな」  
鬼春別「エエエ、千騎一騎の此場合、モ一つで可いから、飛切り上等の奴を放り出してくれ、頼みだ」

ヒルナ姫「將軍様がヒケをお取り遊ばすやうな事があつては、あたい濟みませぬから、そんなら一つうたつてみませう」

鬼春別「ウン、ヨシヨシ出かした出かした、シツカリ頼むよ」

ヒルナ姫「歌へ歌へとせき立てられて

歌の文句に困ります

さはさり乍ら今となり 後へ引くのも卑怯だと

金輪奈落の力出し 飛切上等の名歌をば

一同様に聞かせませう 妾の好きなは刹帝利

刹帝利様を助けたる 心の鬼の悪黨な

やうに思はれた將軍さま 鬼春別の君様は

本當に本當にのろい人 人は見かけによりませぬ

妾は將軍の心根に ゴツコン惚てはゐるけれど

モ一つ何だか氣にかかる 將軍様の陣中へ

奇妙な女がやつて來て 將軍様をばチヨ口まかし

魂迄もぬき取つて 一切軍務を打忘れ

菟弱腰になられよかと そればつかりが心配ぢや

イヤイヤ心配はしませぬよ どうして心配するものか

却て安心致します 其故如何と言ふならば

將軍様の聰明な 心にしまりがあることを

妾は信じてゐるからだ 刹帝利さまを助けたは

鬼春別の將軍が 仁慈無限の御心の

發露なりとは言ふものの 陰に女性がつきまとひ

操つて居つたのだ皆さまよ ドツコイ ドツコイ ドツコイシヨ

將軍さまは偉い人 女にかけたら尚エライ

鼻を捻ぢられ手をかかれ 鬚をしゃくられ面體に

痰や唾をかけられて それでも一寸も怒らない

寛仁大度の御精神 見下げたものでドツコイシヨ

見上げたお方でムいます こんなお方と添へぬなら

妾は死んだがマシですよ 妾の本當に好きなのは

ビクの都の刹帝利 ビクトリア王さまを助けたる

誠の誠の勇士ぞや お情深い英雄の

心事にホロリとなりました ああ惟神々々

目玉飛出しましたませよ ア、オットドツコイ惟神

御靈幸はへましませよ』

と一方は刹帝利に向つて自分の赤心を現はし乍らも、鬼春別、久米彦がカンづかないやうに、うまくうたつてのけた。此歌を聞くより、刹帝利、左守、右守、ハルナ、タルマンの面々は始めて、兩女が赤心を悟り且未だ身を汚してゐない事を確め、心中深く感激した。

兩將軍は二人の女に盛り潰され、女の膝を枕にして、前後も知らずゴロリと倒れ、グウグウと鼾をかき出した。刹帝利を始め、左守、右守、ハルナはソツと此場を立去り、別殿に入つてホツと息をつぎ、互に顔を見合せて、二人の女が辣腕を、目と目を以て褒めそやし居たりけり。

(大正一二・二・一四 舊一一・一二・二九 於龍宮館 松村眞澄録)

刹帝利、左守、右守其外一同は、鬼春別、久米彦兩將軍及四人の副官や屬僚が酒に酔ひつづれ、前後も知らず寝込んだのを見すまし、漸く口を開き善後策につき相談會をヒソビソと始め出した。

タルマン「刹帝利様を始め皆々様、實に意外の好結果を得たものでムいますなア。是れ全く盤古神王様の御守護の致す所は申すに及ばず、貞婦烈婦のヒルナ姫様、カルナ姫様の必死の御活動が此處に到らしめたものと考へます。誠にこんな有難い事はムいませぬなア」

刹帝利「感じ入つたる兩女の働き、其方等も王家の爲、國家の爲に隨分骨を折つてくれたなア。實に感謝の至りだ」

タルマン「刹帝利様に一寸伺つておきたいのですが、貴方はヒルナ姫に暇をお出し遊ばした方が、併し乍ら斯くの如く勳功が顯はれた上は、元のお妃にお直し遊ばすでムいませうなア」

刹帝利「彼れの如き貞婦烈婦は、又と世界にあらうまい。此方も彼の爲に國家の危急を救はれたのだから、少々の過がありとて、國を思ふ爲にやつた仕事だから、

別に咎る譯には行くまい。此件に付いては其方に一任致す」

タルマン「早速の御承知、有難う存じまする。ヒルナ姫様もさぞ御満足遊ばすこととでムいませう」

左守「ヒルナ姫様と云ひ、カルナ姫と云ひ、實に天晴な者だ。右守司の率ゆる軍隊も相當にあつたけれど、弱將の下に弱卒ありとでも言ふものか、一人も間に合はなかつた。カルナ姫は右守殿の妹と云ひ乍ら實に天晴の女丈夫だ。ハルナ、其方も手疵を負うて苦しからうが、あれ位な女房を持つ上は聊か慰むる所があるだらうのう」

ハルナ「ハイ」

と云つたきり面赤らめて俯いてゐる。

左守「斯く和合の出来た上は、鬼春別將軍はヨモヤ、ビク城の軍隊まで指揮せうとは致すまい。バラモン軍はバラモン軍として、又別に陣營を造るであらう。さすれば此際右守殿の兵馬の權を、スツパリと刹帝利様に奉還なさるが可からうと存ずるが、右守殿如何でムらうな。其方は内憂外患を防ぐ爲の軍隊だと主張し乍

ら、國家危急の場合になつてから弱腰をぬかし、此城内をして零敗の憂目に陥らしめたのは全く其方の責任でゐるぞ。其方も一片の赤心あらば、此際罪を陳謝し、スツパリと兵馬の權を、王様にお還しめされ」

右守はさも不愉快な面をし乍ら、

右守「これは心得ぬ左守殿のお言葉、拙者の家は兵馬の權を握る家筋なれば、其家系より生れたるカルナ姫は、拙者に代つて軍功を立てたではゐらぬか。カルナ姫は左守の家に遣はしたりとは云へ、ヤハリ右守家に生れた者、右守家に生れたカルナ姫が斯の如き勳功を立てた上は、決して右守家に兵馬の實力がないとは言はれずまい。千軍萬馬を動かして勝利を得るも、又一人の女に仍つて、目的を完全に達するも同じ事ではゐらぬか。又ヒルナ姫は拙者が親族の娘、ヤハリ右守家の系統を曳いた者、之を思へば、どこどこ迄も、右守が兵馬の權を握つて居らなくては、ビクの國家は保たれますまい。左守殿は老齡の事とてチツと計り耄碌遊ばしたなア」

左守「邪智佞辨を揮つて、飽く迄野望を達せむとする憎くき其方の心根、いいか

げんに改心なさらぬと、神罰立所に至りませぬ。畏れ多くも王妃を取込み、且道ならぬ道を行はしめ、遂には不羈の謀計を達せむと致した極重悪人、世が世ならば、逆磔にしても許し難き其方なれども、何を云つても其方は兵馬の權を握つてゐた實權者だから、刹帝利様も涙を呑んで今日迄お忍び遊ばしたのだ。此左守だとして其通り、又ヒルナ姫様も國家を思ふ一念より、いろいろと御苦心遊ばした跡は、歴然として居りますぞ。其方も右守の家に生れたものならば、なぜ男らしく割腹して王の前に罪を謝するか又、兵馬の權を奉還して、民家に下り其罪を陳謝なさらぬか」

右守は少時考へて居たが、何か心に頷き厭らしい目付をし乍ら、俄に下座に直り兩手を仕へ、

右守「ハハア、刹帝利様、其外のお歴々様、右守は今日只今より、仰に従ひ前非を悔い、兵馬の權を奉還仕りますれば、何卒御受取り下さいませ。そして吾々の罪、お赦し下さらば右守は民間に下り、首陀となつて田園生活に餘生を送る考へでムいます」



刹帝利は左右を顧み、

刹帝利「タルマン、左守殿、今右守の申した事、汝等に異存は無いか」

タルマン、左守はハツと頭を下げ、

左守「吾々は此事あらしめむと、日夜心を悩ませ居りました者、いかでか異存のムいませうや」

刹帝利「ウン、然らば右守の願を許すであらう、右守、有難く思へ」

右守「ハイ、君の御仁慈、肝に銘じ、有難く存じ奉ります」

左守「ヤア右守殿、天晴々々、武士はさうなくては叶はぬ。然らばここで奉還状をお認めなさい。そして拇印を押して貰ひませう」

右守は此言葉にハツと當惑し、……奉還状を書いたが最後、自分の地位は臺なしになつて了ふ。コリヤ困つた破目に陥つたものだ……と思ひ乍ら、さすが老獪

な右守、素知らぬ面にて、

右守「刹帝利様に恐れ謹み申し上げます。拙者も右守家を相續致す武士の片割れ、一旦奉還すると申上げた以上は、決して變がへは致しませぬ。武士の言葉に二言

はムいませぬ。何卒私の人格を買つて下さいませ。言葉の上にて奉還さして頂き  
たうムいます」

左守は嚴然として言葉鋭く、

左守「右守殿、人格を認めよと言はれたが、其方に人格があると思はるるか、よ  
く胸に手を當ててお考へなされ。能くもマア左様な圖々しい事がいへるものだな  
ア」

右守「御不承知とあれば已むを得ませぬ。然らば武士の言葉であれど、奉還する  
と申出でた事は、刹帝利様始めお歴々のお氣に召さぬと見えます。此上は止む  
を得ませぬ、依然として祖先の家を繼ぎ、右守となつて兵馬の權を掌握するでム  
いませう」

タルマン「右守殿、苟くも王様の前に申上げた言葉、決して後へは引かれま  
すまい。左様な没義道な事を仰らるるならば、やむを得ませぬ。拙者にも考へが  
ムる」と片方にあつた弓に鏑矢をつがへ、満月の如く引しぼつて、矢の穂先を右守の面  
體に向けた。流石の右守も之には辟易し、サツと面色を變へ、唇を慄はせ乍ら、

右守「イヤ、たつて、自説を主張しようとは申しませぬ。あ、然らば奉還致しませう」

タルマンは尚も弓を満月に張り、アウンの息を凝らしてゐる。タルマンの弦にかかった拇指が一寸でも動いたが最後、右守の命は忽ち風前の燈火である、否寂滅に陥るのである。

左守「然らば右守殿、サ、早く、此處に料紙も硯もムれば、奉還状を御認めなされ」

右守は齒ぎしりし乍ら、

「ああ是非に及ばぬ」

と小聲に呟きつつ、机に向ひ筆を染め料紙に對して、手をビリビリ慄はせ乍ら、奉還状を認め、左守の手に渡した。左守は一度文面を檢めむと、よくよく見れば、

一、拙者事、右守家の相續人として、兵馬の權を握り、國家の保護に任じ、今日迄何の不都合もなく、ビクの國及び王家をして泰山の安きにおきたる事、右守家

の相續者として茲に刹帝利様に軍職奉還の義を申出づる事を光榮とす。

一、此度のバラモン軍の襲撃に際し、右守家に生れたるカルナ姫の軍功は、右守家が兵馬の權を握れる家系にして勇壯活潑な血液の傳はり居る事を檢證したるを以て光榮とす。

一、刹帝利の妃ヒルナ姫は、ヤハリ右守家の血統より生れ、今日の軍功を立て、祖先の血統を明かにせしことを光榮とす。

一、右の如く軍功顯著なる家柄なるを以て、ここ三年の間は此儘兵馬の權を握り刹帝利殿を始め、左守に軍學の素養備はりし時を以て、兵馬の權を奉還する事を約す。

右の條々相違之れなく候也。

年月日 右守、ベルツ

と記してある。左守は口をへの字にまげ、改めて王の前に朗讀した。王は無言のまま一言も發せず、口を結んで控えてゐる。タルマンは弓に矢を番へ乍ら、

タルマン「右守殿、此條文に仍れば、其方が兵馬の權に戀々たる執着心は十二分に現はれてゐることを認めざる得ない。傲慢不遜の言詞を改め、キツパリと男らしく、直様奉還致す様お書替へなさい。左様な奉還状は反古同様でゐる」

左守「右守殿、タルマンの言はるる通り、サ、素直に、男らしく、キツパリと奉還状をお認めなされ」

右守「サア、それは、暫くの御猶豫を願ひ、沈黙考の上認めて呈出致すでゐらう」

タルマン「右守殿、佞辨を揮ひ、一時を糊塗し、此場を遁れて、又もや野心を企む所存であらうがな。汝が面體に歴然と現はれて居りますぞ」

と心の底まで矢を射ぬかれて、遁る途なく執着心の鬼を押へ乍ら、引くに引かれず進むに進まれぬ此場の仕儀と決心の臍を固めて、再び状を認め始めた。

### 兵權奉還状の事

一、今日迄右守家の祖先がビクトリア家より委託されたる兵馬の權を悉皆、現刹

帝利ビクトリア王の御許に奉還仕り度候間、何卒特別の御詮議を以て御採納下され度、偏に懇願奉り候也。

年月日 右守、ベルツ

と記し、左守の手に渡した。左守は又之を王の前に朗讀した。

刹帝利「ウン、ヨシ、直様聞届る。一時も早く左守司に引つぎを致せよ。併し乍

ら之に念の爲に、拇印を押しておくがよい」

右守「拇印を押すべき處なれど、昨日の騒動にカルナの奴に腕を傷つけられ、指

の先迄痛みを感じ到底拇印は出来ませぬ。全快する迄御猶豫を願ひまする」

左守「右守の劔は右の手ではムらぬか、拇印は左の手に限りませぬ。サ、早く押

して貰ひたい」

と前へ突き出す。タルマンは弓に矢を番へたまま、右守の面體を睨みつけてゐる。

右守は後日の言ひ掛りを拵へん爲、ソツと右の鬢の毛を「むし」り、指に當て、

墨をつけて拇印を押した。これは指紋を誤魔かさむが爲である。左守は目敏く之

を見て、

左守「右守殿、此拇印は間違つてゐる。マ一度押し直して貰ひたい」

右守「これは心得ぬ左守殿の言葉、拙者の左の拇指は一本よりゝらぬ。之がお氣

に入らなくば、左守殿、拙者の代理に其方が立派に押し置いて下され」

左守「益々以て不埒千萬な右守の言葉、髪の毛を以て指紋を變じ、後日の言ひが

かりを拵へむとの、伏線でゝらうがな。左様な事の、老眼と雖も、分らぬ拙者で

はゝらぬ。サ、早く男らしく捺印なされ」

右守は無念の涙を零し乍ら、進退惟れ谷まつて、厭々乍らも、今度は本當に拇

印を捺した。

左守「ヤ、天晴々々、刹帝利様、之にて手續きは済みましてゝいます。お目出度

う御座います。ヤ、右守殿、其方も目出度いなア」

右守「ハイ、根っから……お目出度うゝいます」

と齒切れせぬ答辨をやつてゐる。右守は刹帝利に向ひ、

右守「目出度く奉還を御許可下さいました上は、拙者は館に歸り、暫く謹慎を致

し、君の御命令を御待ち致します。何分宜しく御願ひ致します。』  
と言ひ乍ら、タルマン、左守其他の面々を尻目にかけて乍ら、ドシドシと廊下をワ  
ザと鳴らして出でて行く。

(大正一二・二・一四 舊一一・一二・二九 於龍宮館 松村眞澄録)

## 第一八章 八當狸(一三八一)

右守司のベルツは不機嫌な顔して、入口に竝べてあつた箒やバケツを蹴り倒し、  
はね飛ばし乍ら玄關から上つて、そこにおとなしく留守番をしてゐた桐の火鉢を  
無残にも蹴り倒し、欄間の額を引おろし、バチバチバチと足にて踏み碎き、襖を  
押し倒し、畳ざわりも荒々しく奥の間に入つて、  
右守「コラーツ、何奴も此奴も一寸來い」  
と唝鳴り立てた。上女中も下女中も下男も、此聲に驚いて縮み上り、次の間に頭



を下げ、

「旦那様、何ぞ御用でムいますか」

と慄ひ慄ひ伺つてゐる。右守は氣がモシヤクシヤしてたまらず、見る者さはる者  
八當りに當らねば胸が鎮まらなかつた。

右守「何奴も此奴も、此處へ來いッ」

七八人の男女は恐る恐る側により、

「旦那様、お氣分が悪うムいますか、お肩を揉まして頂きませう」

と優しい女が左右からかかるのを、

右守「エーエ、煩さい、そつちへ行けッ」

と叱り飛ばし、側にあつた火鉢をポンとぶつつけた。男女は驚いて逃げようとす

るのを見て、又ベルツは、

右守「コリヤ、どこへ行く、主人の許しを受けずに勝手に動くといふ事があるか

ッ

「ハイハイ」 「ハイハイ」 と一同は跣んでゐる。右守は又もや、

右守「何奴も此奴も一齊に面を上げい」

と呶鳴る。止むを得ず一同は顔を上げた。右守はツト立つて、塵拂を取り、

右守「エエ刹帝利奴」

と言つて、下男の横面を擲りつける。擲られて悲鳴をあげ、そこに倒れるのを組

付け、蹴り倒し、又次へまはつて、

右守「コレ、タルマン」

と云ひ乍ら横面をポンと蹴りちらし、

右守「貴様は左守だ……ハルナだ。……」

とメツタ打ちに打ちのめし、次に女の方に矛を向け、

右守「貴様はヒルナだ、……カルナだ……」

と髪の毛をひん握り、座敷中を引きまはす。男も女も悲鳴をあげキヤーキヤー

ワンワンと忽ち右守の奥の間は阿鼻叫喚の巷と化して了つた。そこへ宙を飛んで

歸つて来たのは家令のシエールであつた。シエールは此體を見て、大に驚き、

シエール「旦那様、お腹立は御尤もでムいます、御心中察し申します。此シエー

ルとても御同様でムいまする」

と云ふより早く、床の間の掛地をバリツと引破り、置物を庭先にぶつつけ、障子を押し倒し、踏み碎き、襖をパリパリと残酷な制敗に會はせ、尚も狂ひ立つて、炊事場に闖入し、手當り次第に、膳、鉢、茶碗、徳利などを投げつけ、ガラガラパチパチ、メチャメチャケレンケレンカリカリと阿修羅王の荒れたる如く止め度もなく荒れ狂ふ。流石の右守もシエールの亂暴に呆れ果て、自分の鬱憤はどこへやら、忽ち此場に駆け來つて、

右守「コリヤコリヤ、シエール、さう亂暴なことをしちや可けないぞ、マアマア鎮まつてくれ。お前の腹立は俺も知ってる」

シエールは尚も狂ひ立ち、

シエール「エエ残念や、口惜や」

と水瓶に庭の石をなげつけ、ポカンと肚を破つて忽ち庭一面の水と化せしめ、猶も竈を引くり返し、衝立を倒し、力限り荒れ狂ふ。右守は漸くにして取押へ「マアマアマ」と宥め乍ら、あれはた自分の居間に連れ歸り、胸をなで乍ら、

右守「オイ、シエール、何といふ不都合な事をするのだ。怪しからぬ代物だな」  
シエール「へ、今日殿中に於て、右守家に傳はる重大の兵權を取上げられ、旦那様より私の方が業が煮えてたまらず、殿中に於て、所在器物一切をメチヤメチヤに叩き壊し鬱憤を晴らさむと思ひましたが、タルマンの奴弓に矢を番へて、矢大臣の役を務めてみやがるものですから、無念をこらえ、此處迄歸つて参りました。其餘憤が勃發致しまして、かやうな狼藉に及びました。マアこれでスツと致しましたよ」

右守「ソリヤ貴様はスツとするだらうが、右守家の財産をさうメチヤメチヤにやられちや堪らぬでないか。かやうな不都合な事を致せば直に免職を致し、首を取る所なれど、元を糾せば此方に同情しての腹立だから、寧ろ、褒むべき者だ。吾心の中を知る者は只シエール一人のみだ」  
と撫然として頂低れる。

シエール「旦那様、貴方も随分おやりなさつたやうですな。玄關口から奥の物まで、随分落花狼藉、私もつい旦那様に感染致しました。併しまだ少し鬱憤が残つ

て居りますから、一層の事此お館を主従が力を併せて叩き壊したら何うでせうか、鬱憤のやり所がありませんがな」

右守「内わばりの外すぼりでは、根つから氣が利かぬでないか。オイ、シエール、徹底的に鬱憤をはらし、再び兵馬の權を握り、あはよくば刹帝利になり、此恨を晴らす氣はないか」

シエール「エエ何と仰有います。徹底的に鬱憤を晴らすとは、軍隊を以て王城を圍み、クーデターをやらうと仰有るのですか。一方にはバラモン軍が徘徊致してをるなり、味方の勇士は四方に散亂したではありませんか」

右守「そこには一つの計略があるのだ。オイ、シエール、耳をかせ」

シエール「右守の口許に耳を寄せ、何事が聞き終り、厭らしい笑を浮べて、シエール「成程、君の妙案奇策には感服致しました。然らば時を移さず、幸日も暮れましたなれば参りませう」

と何事がよからぬ事を牒し合せ、黒頭巾に黒装束の儘、裏口より、ソツとぬけ出したり。

第十九章 刺客(一三八二)

ビクトリア王は敵の捕虜となり、生命の程も覺束なき破目になつて、非常に心を悩ませてゐたが、思ひもよらぬ助けに仍つて、再び元の館に歸り、且ヒルナ姫の無事なる顔を見て、胸を撫でおろす際、年來の希望たる兵馬の權を右守より奉還させ、又鬼春別、久米彦將軍は兩女が操り居れば大丈夫と安心すると共に、氣が緩みグツタリとして、寢に就いた。ハルナは右守司の様子をただならざるを氣遣ひ、父の許しを受けて今晚は特に王の隣室に宿直を勤むることとなつた。

ハルナはカルナ姫の事を思ひ浮かべ……ああ實に立派な女性だ。ヒルナ姫様と彼とがなかつたならば、ビクの國は云ふも愚か、王家も左守家も忽ち破滅の悲運に陥るところだつた。今となつて思へば、カルナ姫を自分がラブしたのは人事では

ない、全く神様の御攝理だつたのだらうか。ああ有難し有難し……と暗祈黙禱し  
つつあつた。そこへ足音を忍ばせて、王の居間に向つて進み来る者がある。ハル  
ナは耳をすませて様子を考えてみると、ボンヤリとした行燈の側に現はれた黒い  
男の影、行燈の火に長刀をスラリと抜いて刃を打眺め乍ら、ニタツと笑つてゐる。  
寢臺の上にはビクトリア王が吾身に危急の迫つたことも知らずに、安々と眠つて  
ゐる。ハルナはスツと足音を忍ばせ、綱を以て男の後より首に引かけて、綱の端  
を肩に引かけ、トントントンと廊下を走り出した。腮を引かけられた男は拔身を  
持つたまま、ウンともスンとも言はず、廊下を引ずられて行く。

王は此物音に目を醒まし、よくよく見れば、刀の鞘が落ちてゐる。聲を立てて  
は一大事、何者かの刺客が來たに相違あるまいと、廊下をみれば、黒い影、王は  
矢庭に長押の槍を提げ、廊下に行ってみれば、ハルナが一人の男の首を引掛けて引  
摺りまはし、男は氣絶してゐる様子である。王は聲を潜めて、  
刹帝利、其方はハルナではないか、何事ぢや  
ハルナ、ハイ、怪しき者が参りまして、君の御寢室を窺ひ居りました故、後より

窺ひよつて、首に綱をかけ、ここ迄引摺つて参りました」

刹帝利「ヤ、出かした出かした、一寸何者か、此奴の顔を調べて見よ」

ハルナは「ハイ」と答へて、首をしつかり締めておき、手燭を燈して、刺客の面を見れば、右守の家令シエールであつた。王もハルナもハツと驚き、少時主従は顔を見合せてゐた。

ハルナ「刹帝利様、此奴は右守の家令でムいます。之から察しますれば、右守は今日の兵權奉還を恨に思ひ、何か謀反を企んでゐると見えます。之は騒ぎ立てを致せば却て敵の術中に陥るかも知れませぬ。ソツと、シエールを、假令生き還つても動けないやうに手足を縛り、隠しておきませう」

刹帝利「ウン、ア、それが宜からう。實に右守といふ奴は、暴惡無道の曲者だのう」

ハルナ「御意にムいます。王様も十分に御注意をなさいます」と言ひ乍ら、シエールを高手小手にいましめ、押入の中に突つ込んで素知らぬ顔をなし一睡もせず、刹帝利の居間に、ハルナは付添ひ、厳しく守つてゐる。



ヒルナ姫、カルナ姫は、鬼春別、久米彦、スパール、エミシ、シヤム、マルタの賓客が他愛もなく酔ひ潰れてゐるので、席を外さうかと一度は考へたが、注意深き兩人のこととて……イヤイヤ待て待て今が一大事の場合だ。刹帝利様に會つて、一度事情を詳しく申上げたいけれど、六人の中に一人や二人、熟睡を装ひ、もしや様子を考へてる者があれば大變だ。ああ會ひたいなア……と心は頻りに焦つて共、大事をふんで、鬼春別將軍に膝枕させ、自分は何喰はぬ面にて、日が暮れてもジツと坐つてゐた。又カルナ姫は一時も早く戀しき夫のハルナに事の顛末を報告したいものだ、そして一言褒めて頂きたいものと思へ共、これ亦、六人の中に一人や二人は様子を考へてゐるものがあらうも知れぬと大事をふんで、ヒルナ姫同様に久米彦に膝枕させ、時々ヒルナ姫に目を以て、話をしてゐた。併し乍ら此六人は何れも眞劍に酔ひ潰れ、前後も知らずになつてゐたのである。

夜の嵐は館の外を音を立てて吹いてゐる。風に煽られて雨戸はガタガタガタと慄ひ聲を出してゐる。二女はウトリウトリと夢路に入つた。そこへ覆面頭巾の大男が大刀を引き抜き足音を忍ばせて入り來り、先づ久米彦將軍に向つて、

一いつ刀たうの下もとに斬きりつけむとした。此この時ときハツと目めを醒さまし、矢や庭にはにカルナ姫ひめは曲く者せものの腕かひなの急きふ所しよを叩たたいた。曲く者せものはバラリと大だい刀たうを落おした、姫ひめは手て早はやく後うしろ手でに廻まし、細ほ紐そひもを懐ふところより出だして縛しばり上げ、グツと頭あたまを押おへて動うごかせず、

カルナ姫ひめ「將しやう軍ぐん様さま、ヒルナ様さま、皆みな様さま、起おきて下くださいませ、刺しかく客まぬが参まりました」

と呼よばはる聲こゑに何いづれも目めを醒さまし、

「何なんだ何なんだ」

とカルナその側そばに寄よつて來くる。カルナは、

カルナ姫ひめ「モシ將しやう軍ぐん様さま、曲く者せものが参まりました。貴あなた方がを刺さす積つもりでやつて來きましたの

で、妾わひめが今いまふん縛しばつた所ところでムいます」

久く米め彦ひこ「ヤ、それはお手て柄がら手て柄がら、某それがしも危あぶない所ところでムいつた。して曲く者せものは何なに者ものでムい

るかな」

カルナ姫ひめ「何なに者ものだか黒くろ頭づきん巾をかぶを被かつて居をりますので分わかりませぬ、何どう卒そ燈あかり火を此こ處こへ

持もつて來きて下くださいませ」

ヒルナ姫ひめは行あん燈どうを提さげて近ちかづき來きたり、黒くろ頭づきん巾をぬがせば、豈あ計にはらむや、右う守もりの

ベルツであつた。ベルツは前にカルナに腕を短刀にて刺され、夫れが爲に思ふ様に手が動かず、苦もなくカルナに縛られたのである。ヒルナもカルナもハツと驚いたが、素知らぬ面にて、

「アレまあ」

と空とぼけてゐる。カルナは心の中に……人もあらうに、自分の兄を捕縛せねばならぬとは、何とした身の因果だらう。併し乍ら御國の爲、王家の爲ならば、假令兄だとして見逃す譯に行かぬ……と直に心を取直した。

鬼春別「大方刹帝利の廻し者でムらう。命を助けて貰ひ乍ら、酒宴に事よせ、吾々に油斷を致させ、暗殺致さうなどは、以ての外の不都合千萬。ヨーシツ、これから拙者が刹帝利は申すに及ばず、何奴も此奴も一人も残らず、炮烙の刑に處してくれむ。や、スパール、エミシ、百人計りの兵士を、直様引率れ來れ」

ヒルナ姫は慌てて押し止め、

ヒルナ姫「モシ將軍様、一寸お待ち下さいまし、決してこれは刹帝利様の謀だムいませぬ。此男は刹帝利に仕ふる右守司といふ惡逆無道の曲者でムいます。貴方

様の御威勢を妬み、自分が兵馬の權を握らむと企て、夜中に忍び込んだものとみえます。何卒少時軍隊を引入れることはお待ち下さいませ」

久米彦「鬼春別殿、容易ならざる事變で△る。仰せの如く、少くとも一百計りの兵士を此場へ引よせた方が御互の安全で宜しからう」

カルナ姫「吾夫、久米彦様、先づお待ちなさいませ。音に名高き英雄豪傑の將軍様、かかる腰拔男一人位に、兵を用ふるなどは、將軍様の沽券に拘ります。何

卒妾を愛し玉ふならば、左様なことをなさらずに、此處で處置をして下さいませ」  
久米彦は最愛のカルナに止められ、且又カルナに危き命を救はれたのだから、之を否む勇氣はなかつた。

久米彦「ウン、ヨシヨシ、然らば其方に一任する。鬼春別殿、てもさても弱蟲共で△るな。拙者が妻、カルナ姫の細腕に脆くも捕はれたる如き蠅蟲、最早御安心なさいませ」

カルナ姫「モシ兩將軍様、此男は如何なさいませるか」  
鬼春別「ウン、久米彦の奥方にお預け致す。併し乍ら決して秋波を送つちやな

らないぞ」

カルナ姫「ホホホホ、何御冗談仰有います。ササ曲者、こちらへ來れ……ヒルナさま、貴女と妾と此奴を庫の中へ突込んでやりませうね」

ヒルナ姫「左様でムいますな。憎き奴共充分に懲らしめてやりませう。鬼春別將軍様、少時お暇を下さいませ、直に歸つて参ります。此曲者を、妾等紅裙隊が思ふ存分苦めねばなりません、此様な者を生かしておけば、何時又貴方様の首を狙

ふか知れませぬからね」

鬼春別「ウン、ヨシヨシ、突殺さうと、鶯殺しにしよう、焼いて食はうと、煮て食はうとお前の勝手だ。云はば紅裙隊の戦利品だ。早く何處へ伴れて行つて片付けたがよからう」

ヒルナ姫「左様なれば、此曲者を自由にさして頂きます。カルナさま、本當に愉快です。身體一面空地なく短刀でついてついて突きまくつてやりませうかね」

カルナ姫「さうです、面白いでせう。併し男さまが見てゐられると恥しいワ。

久米彦將軍様に残酷な女だと愛想つかされるのが厭ですもの……」

久米彦「タカが腰拔武者の一人、拙者の眼中にない、お前の目ざましに、自由自在にさいなんで来るがよからうよ」

二人は都合よく兩將軍を誤魔化し、城の裏門に右守を連れ行き、聲を潜めて、ヒルナ姫「貴方はベルツさままだムいませぬか。何といふさもししい心をお出しなされたのですか」

ベルツ「ウン、面目次第もないことだ。どうか許してくれ、……いやお姫様、許して下さいませ」

カルナ姫「貴方兄上だムいませぬか、妾が居らなかつたなれば、貴方の命は到底助かりませぬぞえ。ああして六人の男が寝たマネをしてゐるのは、決して本當に寝てゐるのぢやムいませぬ。酔うた眞似をして、スツカリ様子を考へてゐるのですよ。貴方は早く改心して下さらぬと、右守家はどうか知れませぬよ。早く兵馬の權を刹帝利様に奉還し、誠を現はしなさいませ」

ベルツ「實の所は、スツカリ奉還して了つたのだ。併し乍ら、それが残念さに、刺客となつて入り込んだのだ」

カルナ姫「姫様、何うでムいませう。助けてやる譯には行きませうかな」

ヒルナ姫「コレ右守さま、サ、此裏門から落のびなさいませ。貴方の陰謀が露見した上は到底命はありませぬ。之を路銀にして暗に紛れて、田舎の隅へでも身をお忍びなさいませ」

と懐から路銀を出してベルツに渡した。

ベルツは幾度も押し戴き、感謝の涙と共に裏門より何處ともなく落ちのびて了つた。二人の女は漸くにして元の座席に歸つて來た。

ヒルナ姫「將軍様、永らくお待ち申しました。随分骨が折れましたよ。何と云つても女のチヨロイ腕で、所構はず切りさいなんだのですもの、私もあんな厭らしいことはゾツと致しますワ」

鬼春別「そらさうだらう、平和の女神様が、人を殺すのだもの」

ヒルナ姫「イエイエ私はホンの髪の毛丈切りそめてやりました。後はカルナさまがスツカリやつて了つたのです。本當にカルナさまは女丈夫ですワ」

久米彦「アハハハハ、流石はカルナだ。曲者を引捉へたのもカルナ、制敗したの

もカルナだ。へへへへ、久米彦將軍の意を得たりと云ふべしだ』  
と得意になる。

刹帝利はハルナ、左守を伴ひ、此場に現はれ來り、一同の前に手をついて、  
刹帝利「皆様、私の居間には大變なことが出來まして、お蔭により命だけは助かりました」

鬼春別「何事が出來致しましたかな」

刹帝利「ハイ、つい只今のこと、覆面頭巾の黒装束をした男が、拙者の寢息を伺ひ、大刀を提げ、アワヤ打おろさむとする時しも、宿直を勤めてる此ハルナがツと後から綱をかけて曲者を引き倒し、縛りつけ、今押入の中へ突込んでおいたとこでムいます。實に物騒千萬なことです」

カルナは、ハルナが功名手柄をしたといふことを聞いて何となく誇りを感じた。  
鬼春別「其曲者は何者でムるかな」

刹帝利「ハイ、實にお恥しいこと乍ら、右守の家令シエールといふ惡人でムいます」



鬼春別おにはるわけ 成程なるほど、拙者せつしやの居間ゐまへもたつた今いま、右守うもりのベルツといふ奴やつ、忍び入しのいり、暗あん殺さつせむと致いたした所ところ、此このカルナの腕うでに取押とりおさへられ、高手たかて小手こてにいましめられ、今いまや、此この二人ふたりのナイスに恨うらみの刃やいばを喰くつて、寂滅じやくめつ致いたした所ところでムる。アハハハハハハ

刹帝利せつていり 何なに、右守うもりが、左様さやうなことを致いたしましたか、實じつに無禮ぶれいな奴やつでムいます。併しかし乍ながら悪人あくにんは貴方あなたがたの爲ために滅ほろび、此この様な嬉うれしいことはムいませぬ。サ、之これから悪あく魔拂まばらひに、マ一度いちど二次會にじくわいでも開ひらきませう

鬼春別おにはるわけ 〇ヤそれは痛いたみ入いる。アア併しかし乍ながら、かやうな危険きけんを遁のがれたのだから、遠ゑん慮りよなく頂いたきませう。そして其そのシエールといふ曲者くせものを肴さかなと致いたし、一杯いっぱい頂いたけば尚なほ々なほ妙めうでムらう。アハハハハハ

かくして再酒宴ふたたびゆえんに移うつり、其夜そのよを明あかし、翌日よくじつも晝ひるの七ななつ時迄ときまでおつ續つづけに歌うたを歌うたひ舞まひ狂くるひ十二分じふにぶんの歡くわんを盡つくすこととなつた。

(大正一二・二・一四 舊一一・一二・二九 於龍宮館 松村眞澄録)

第四篇 神愛遍滿

第二〇章 背進（一三八三）

鬼春別、久米彦兩將軍が連戰連勝の結果、ビクの都の兵士迄も從へて、自分の部下としてゐたのはホンの暫くの間にあつた。ヒルナ姫、カルナ姫の千變萬化の秘術を盡しての斡旋に、漸くビクの國の軍隊の一部分は刹帝利の支配の下に隸屬し、左守は兵馬の權を刹帝利より臨時委任され、城内の秩序を保つこととなり、又タルマンは依然として宣傳使兼内事司を勤め、エクスは拔擢されて右守となつた。そして城下の陣營は暫時バラモン軍に其大部分を貸し與へ、茲にビクトリア家とバラモン軍とは整然たる區劃がついた。鬼春別、久米彦兩將軍は齋苑の館へ進軍するのも好まず、さりとしてハルナへ歸ることも出來ず、黄金山へ向はむか、又々敗北せむは必定である。兔も角ビクトル山を中心に假陣營を築き、此處にて

兵力を練り、附近の小國を切なびけ、一王國を建設せむと兵營の増築に全力を盡し、未來に希望を抱いてゐた。そしてヒルナ姫、カルナ姫は元の如く將軍に仕へてゐた。併し乍ら種々の辭柄を設けて、二人の美人は兩將軍に身を任せなかつた。何時も辨舌と表情と酒とにて誤魔化し、殆ど同衾の暇をなからしむべく、兩女が互に入り亂れて助け合ひつつあつた。ビクトリア王もハルナも兩女の心を能く察知し、少しも素行上に付いては疑をさし挾まなかつたのである。只々兩女が身を犠牲にして、我國家の安泰を守る其苦心を感謝するのみであつた。

大急ぎで作られた兵營は大半落成した。鬼春別はビクトル山の麓の最も要害よき地點に本營を築き、久米彦將軍と軒を並べて兵を練ることへのみ力を盡し、一方には最愛のナイスを唯一の力と頼み、未來には晴れて完全なる夫婦たるべしと期待してゐたのである。

斯かる所へ慌ただしく入來るは河守の雜兵甲乙丙の三人である。シヤムは受付に事務を執つてゐると、三人は息を喘ませ乍ら、

申上げます。只今、ライオン河を渡つて、數多の騎士此方に向ひ驀地に驅けつ

けて參る様子でムいます。兔も角御注進申上げます」

シヤム「ナニ、澤山のナイトが川を渡つて來るとは、ハテ心得ぬ 何者であらう

かなア」

と首を傾ける。甲は、

甲「工工察する所、旗印を見れば、どれもこれも三葉葵の紋所を染めなし居りま  
すれば、正しくバラモン教の軍隊かと存じます」

シヤム「ハテ、バラモン教の軍隊が、さう澤山に此方に渡る筈はない。ランチ將  
軍が浮木の森に控へ居れば、三五教の奴輩が伴つて、三葉葵の旗を立て、攻めよ

せ來る筈もない、ハテ合點の行かぬことだなア。何は兔もあれ將軍様に申上げむ、  
汝等は一時も早く川端に立歸り、敵か味方が取調べた上報告せい」

といひすて、鬼春別將軍の居間に進んだ。そこには折よく久米彦が來て居つた。  
スパール、エミシも側に侍して何事か嬉しげに話してゐる。そこへ現はれたシヤ

ムは鬼春別に向ひ、一寸目禮し乍ら、  
シヤム「將軍様に申上げます。只今川守の報告に依れば、數百のナイトが三葉葵

の旗を振り立て振り立てライオン河を渡り来る様子でムいます、如何取計らひませうかな

鬼春別「ハテナ、合點の行かぬ旗印、まさかランチ將軍が逃げて來たのではあるまい。

久米彦殿、貴殿の御意見は如何でムるか

久米彦「察する所、浮木の森のランチ將軍は治國別の言靈戦とやらに敗を取り、

血路を開いて逃げて參つたのでせう。三五教ならば、左様に澤山の同勢は伴れて

は居りますまい。ハテナ困つたことだなア

鬼春別「何は免もあれ、スパール、シヤム、汝は駒に跨がり、一時も早く敵か味

方か様子を窺ひ報告いたせ

と下知すれば、「ハツ」答へて兩人は直に駒の用意をなし、蹄の音も勇ましく、

川縁さして一目散に走り行く。

兩將軍は雙手を組み、さし俯いて、稍思案にくれてゐた。ヒルナ姫、カルナ姫

はニコニコし乍ら、あどけなき態を装ひ、琴などをいぢつてゐる。

鬼春別「ヒルナ姫、暫く琴の手を止めてくれ、一大事が起つたからなア、カルナ

殿も同様だ、琴所の騒ぎぢやあるまいぞ」

ヒルナ姫「ハイ、何か御心配なことが突發致しましたか。それは氣の揉めたこと  
でムいますねえ」

鬼春別「ウーン、別に心配致すやうな事ではないが、どうも怪しい報告に接した  
のだ、都合に仍つては、吾々も防備の用意を致さねばなるまい」

ヒルナ姫「ホホホホ、防備なんか必要はありません。妾にお暇を下さいますれ  
ば、駒に跨つて、攻め来る軍隊と折衝致しませう」

鬼春別「イヤイヤ、お前を左様な所へ差向けては、案じられる。又將軍に秋波を  
送られては、聊か氣が揉めるからなア」

ヒルナ姫「オホホホ、將軍様の仰有ること、そんな柔弱な女ぢやムいませぬ。  
ねえカルナさま、妾と二人駒に跨り、紅裙隊を指揮して、群がる敵をアツと云は

せてやりたいものですね」  
カルナ姫「本當にさうですワ。妾も將軍様のお許しさへあれば、一働き致したい

ものでムいますわ」

と兩女はうまく馬に跨り此場を立出で、……もしバラモン軍なれば是非なく首將を連れ歸り、鬼春別に會はしてやらうが、萬々一三五教の宣傳使又は軍隊であつたなれば之幸ひに此場を脱け出し、暫く姿を隠さむ……かと期せずして兩人の心に閃いたのである。されど兩將軍は、可愛い二人の女に疵をさせては大變だと案じ過ぎして容易に出陣を許さなかつた。

かかる所へ法螺貝の響ブーブーと聞えくる。鬼春別はつつ立ち上り、眼下を見渡せば、數百の軍隊、列を亂して、一生懸命に此方に向つて走り來る其様子、どうも敵軍とは思はれない、敗兵が逃亡して來たと見て取つた鬼春別はヤツと胸を撫でおろし、

鬼春別「アハハハハ、久米彦將軍、あれを見られよ。數百の軍隊が此方に向つて攻め來る様子、併し乍ら吾々は仁義を以て主義と致すもの、決して一兵卒も動かしてはなりません。只吾々が愛の徳に仍つて敵を悦服さす方法あるのみですから」

久米彦は又高欄より打眺め、ヤツと安心したものの如く、

久米彦「アハハハハ、仰せには及ぶべき、如何なる巨萬の敵、一齊に押寄せ來る共、愛の善徳を以て之に對し、決して殺伐の行り方は致さぬ覺悟でゐる。戦はずして敵を悦服さすは、勇將の能くならず所、どうだ、カルナ姫、某の無抵抗主義、博愛主義は實に徹底したものだらうがなア」  
としたり面にいふ。

カルナ姫「左様でゐいます、仁義の軍に敵はゐいませぬ。何卒、何處迄も無抵抗主義を抱持遊ばすやう御願致します。暴に對するに暴を以てするは、所謂下賤の人民の致す所、實に見上げた立派な將軍様の御志には、カルナも益々感服仕りました」

と表には云つたものの、……萬一敵が押よせて來て、此兩將軍を何とかしてくれば都合が好いがないア。さうすれば根本的にビクの國が安全に治まるだらう……と考へてゐた。ヒルナ姫も亦カルナと同様の考へを持つてゐた。

斯かる所へスパール、エミシに導かれ、息せき切つて走り來りしは、ランチ將軍の部下に仕へし、テルンスであつた。テルンスは數百のナイトを引率して、此



處に遁走し来たものである。

久米彦「ヤ、其方はランチ將軍の部下テルンスではないか、何か様子のあることと察する。ランチ殿は如何でムるかな」

テルンス「これはこれは兩將軍様御壯健にて、先づ先づお目出たう存じます。申上ぐるも詮なきこと乍ら、ランチ、片彦兩將軍は三五教の宣傳使治國別の爲に、スツカリ兜をぬぎ、今は軍隊を解散致し、自らは三五教の魔法を授かり、宣傳使となつて了ひました。ランチ、片彦、ガリヤ、ケースの錚々たる幹部が斯の如く相成りました以上は、やがて治國別を先頭にビクトル山へも押寄せ來るでムいませう。三千人の軍隊を抱へたランチ將軍でさへも、一たまりもなく降服致したのでムいます。實に恐るべき強敵でムいます」

久米彦は之を聞いて胸を躍らし、面を蒼白に變へて了つた、忽ち聲を慄はせ乍ら、

久米彦「鬼春別殿、タタ大變でムる。コリヤ斯うしては居られますまい。何とか工夫をめぐらさうぢやありませんか」

鬼春別も此報告にハツと驚いたが、ヒルナ姫の手前、餘り卑怯な醜態も見せられないので、ワザと平氣を装ひ、

鬼春別「アハハハハ、猪口才千萬な、假令三五教の宣傳使幾百萬押よせ來る共、拙者は自在天様より授けられたる妙法を心得居れば只一息に吹き飛ばさむは目の當りでムる、御心配なさるな、アハハハハ」

とワザとに身體をゆすり、腹の底より起つて來る小慄ひを紛らさうとする可笑しさ。

ヒルナ、カルナ兩女は、早くも兩將軍の恐怖心にかられてゐることを看破したが、何食はぬ面して、表面を包んでゐた。

久米彦「イヤ將軍殿左様な樂觀も出來ますまい、一時も早く軍隊を整へ、黄金山に攻め寄せようぢやありませんか。吾々の使命は、元よりかやうな所に籠城致すべき者ではムらぬ。治國別が押しよせ來るとすれば、彼に先立つて、黄金山を落とし、皆によつて治國別の寄せ手を防ぎ、殲滅致さうではムらぬか」

と口では立派に云つてゐるが、其内心は黄金山へ攻めよせるのは、最も兩將軍の

恐るる所である。さりとして、ここにグズグズしてゐては、何時治國別が押寄せ來るかも計り難い、ブザマな敗軍をなし、ヒルナやカルナに内兜を見すかされ、卑怯な男と思はれ、愛想をつかされては大變だと、それ計りに氣を揉んでゐる。

鬼春別「成程……言はばビクトルル山の陣營はホンの休養所でゐる、ここには立派に刹帝利もゐますことなれば、吾々がお節介を致す必要もムるまい。貴殿の御意見に共鳴致し、然らば軍隊を全部引率れ、進軍の用意にかかりませう」

と落ち着き拂つて言つてゐるものの、已に治國別はライオン河を渡つて、此方へ來て居るのではあるまいかと氣が氣でなかつた。併し治國別は部下を引つれ、クルスの森やチームス峠で悠々閑々と講演會を開き子弟を教育してゐたのは讀者の知る所である。水鳥の羽音に驚いて、脆くも遁走した平家の弱武者其儘の心理状態に、兩將軍は襲はれてゐた。それ故に何となく落つかない風が見える。

ヒルナ姫は落着き拂つて、

ヒルナ姫「モシ將軍様、折角此處まで兵營を築き上げ、如何なる敵も防ぐ丈の準備が整つてゐるぢやありませんか。かやうな風景の佳い所で、貴方と一生暮したう

ムいますワ。進軍なんかおやめになつたら何うですか」

鬼春別はシドロモドロの口調にて、

鬼春別「ウンウン、それもさうだが、機に臨み變に應ずるは、三軍に將たる者の

行ふべき道だ。さう心配は致すな、どこ迄も其方を伴て行つてやるから、假令

進軍したと云つても、吾々は將軍だ。矢玉の來るやうな所へは決しておかないか

ら……サ、其方も覺悟をして拙者に跟いて來るのだ。キツと心配は要らないよ」

ヒルナ姫「それでも何だか、殺伐の氣に襲はれるやうでなりませぬワ、ねえカル

ナさま、貴女どう思ひますか」

カルナ姫「妾も何時迄も此陣營において頂きたうムいますがねえ、モシ久米彦さ

ま、どうかさうして下さいますまいかね」

久米彦「左様な氣樂なことが言つて居れるか。敵は間近く押よせたり、時遅れて

は味方の非運、サ、一刻も早くここを引上げ進軍致すでムらう」

カルナ姫「モシ、久米彦將軍様、進軍とは眞赤な詐り、豫定の退却ぢやムいませ

ぬか」

久米彦「馬鹿を言へ、敵は黄金山に在り、かうなる上は一時も早く神謀鬼策を廻らし、黄金山を占領すべき必要が起つたのだ、一時も早く進軍の用意を致さねばならぬ」

とモジモジしてゐる。

カルナ姫「貴方の進軍は背進でムいませうね、どうでも理窟はつくものですね」  
久米彦「何とまあ口のいい女だなア」

鬼春別「サ、早く馬の用意を致せ、そして姫には牝馬の用意だ。スパール、エミシ、テルンスは全軍を指揮して後よりつづけ、いざ久米彦殿、先鋒隊を仕らう」と態のよい辭令で、早くも逃仕度にかかつてゐる。

ヒルナ姫「モシ將軍様、先鋒隊は斥候の役ぢやありませんか。貴方様は總司令官、最後に御ゆつくりとお進みになつた方が安全でムいませう」

鬼春別「それもさうだが、先んずれば人を制すといふことがある、之が兵法の奥義だ。頭が廻らねば尾が廻らぬといふからな。長蛇の陣を張つて行くのだから、蛇の歩く如く如く頭を先に尾が後から行くのだ、それで長蛇の陣といふのだ」

と姫の前に體裁を作り、自分の卑怯をかくすことにのみ努めてゐる。

鬼春別、久米彦はヒルナ、カルナの兩美人と駒を竝べ、一目散に西へ西へと驅けり行く。後に残つたスパール、エミシは周章狼狽の餘り、軍隊を整理する暇もなく「退却々々」と呼ばはり乍ら、尻に帆かけて、駒に跨り、軍帽を後前に被つたり、靴を片足はいたり、無性矢鱈に馬の尻を叩いて、敗軍同様の爲體で逃げ出した。一匹の馬が狂へば千匹の馬が狂ふとやら、後から強敵が襲ひ來るやうな恐怖心に驅られて、三千の兵士は人を突倒し踏み越えて、吾れ先にと西方さして、一人も残らず逃げ散つて了つた。

ビクトル山の森の繁みに數十羽の梟がとまつて、

「ウツフーウツフーオツホホ、アホーアホーアホー」  
と聲を揃へて鳴き出したり。

(大正一二・二・一四 舊一一・一二・二九 於龍宮館 松村眞澄録)

第二章 軍議（一三八四）

刹帝利を始め、タルマン、左守のキュービットや新任の右守なるエクスはハルナと共に、王の居間に首を鳩めてバラモン軍の退却に對し、いろいろ臆測談に耽つてゐる。

左守「エエ、タルマン殿に神勅を伺つて貰へば分るでせうが、あれ丈立派な陣營を建てビクトリア城を威壓致して居りました兩將軍が全軍を率ゐて俄に退却致したのは、どうも合點の行かぬ事でありますが、貴方は何う御考へなさいますか」

タルマン「どうも私には神懸がムいませぬので、詳しい事は存じませぬが、察する所、忠勇義烈のヒルナ姫様、カルナ姫様が、ビク國の絶對的安全を保たせむとして、兩將軍をうまくチヨ口まかし、立去らしめ玉うたものと推察致しまする」

刹帝利「大方さうかも知れない。彼れ兩女は本當に國家の柱石だから、一身を犠牲にして國家を救うたかも知れないよ。ああ天晴れの女丈夫だ、偉い奴だなア」

左守「何ともハヤ、ヒルナ姫様の御誠忠には、左守も恥かしうムいます。併し乍

ら刹帝利様は之れ丈老齡にお成り遊ばして、萬機の政治を御覽し玉ふに、内助に仕ふべき後の君がなくては嘸御不便でムいませう、ヒルナ姫様は左様な決心を持つておいでになつた以上は、ヨモヤお歸り遊ばすやうな事はムいますまい。ついでにはお后様を選定致さなくては、王様もさぞ御不便でムいませう」

刹帝利「否々、此方は決して左様な事は思つて居ない。假令少々不便でも、ヒルナ姫の貞節に對し、どうして後添が持たれうものか、彼の心もチツとは汲取つてやらねばなるまいからかう」

左守「御言葉御尤にムいます、何を云つても新に兵馬の權を取り戻され、一國の主權者として、御獨身では到底完全なる國政を御覽す事は難しうムいませう。何とか一つ御考へを願ひたいものでムいます」

と左守は自分の息子ハルナにも嫁を持たせたい、それに就いては刹帝利様より先に后をきめておかねば、臣下の身として憚るといふ考へから頻りに勧めてゐるのである。されど刹帝利はヒルナ姫の心を察し、何と云つても承諾せなかつた。タルマンは左守司の心を推し量り、



タルマン「吾君は何と云つても御老齡、又數多の從臣もお仕へ致して居り、澤山の侍女も居りますれば、御聖慮に任し奉るも是非なき事乍ら、ハルナ殿はまだ年の若き御方、カルナ姫は最早歸られないものと思はねばなりません。さすれば適當の縁を選んでお娶りなさなくては左守の家の胤が斷れるぢやありませんか。之は一つ吾君様にお願致して、何とかせなくてはなりませんまい」

左守はタルマンの親切な言葉を聞いて、祕に感涙に咽んでゐる。ハルナは進み出で、

ハルナ「タルマン殿、決して決して御心配下さいますな、刹帝利様でさへも、尊き御身を以て、獨身生活をしようと思召すのでムいます。斯の如き御老齡の御身を以て獨身で行かうと思召すのでムいますから、拙者の如き若い者は、決して獨身で居つても少しも苦しくはムいません。又カルナ姫の犠牲的活動を思へば、何うして第二の妻が持たれませう。拙者の戀愛は實に神聖でムいます。此後カルナに會ふ事がなく共終世妻帯は致しませぬ」

タルマン「實に見上げたお志、感服致しました。ああ併し乍ら、左守家の爲に子

孫を傳へねばなりません、獨身では子を生む事も出来ずまい。これは枉げて承諾を願ひたいものでムいます」

ハルナ「何と仰せられましても、此事計りはお許しを願ひます。刹帝利様も嗣子がないぢやありませんか、況んや左守家に嗣子なしとて、夫れを憂ふるに及びますまい。何事も皆神様の御心の儘よりなるものぢやありませんか。左守家はハルナの子孫でなくてはならないといふ道理もありますまい、現にエクス殿が新に右守になられた例もあるぢやありませんか」

タルマンは頻りに首を傾け、感じ入り、返す言葉もなかつた。

世の中には最愛の妻に別れ、今後は決して妻は持たない、彼に對して濟まないから、誰が何と云つても獨身生活をするゝ頑張つてゐる男が澤山あるものだ。或は追悼の歌を作り、或は追懷の書籍を作り、之を知己友人に配布し、或は天下に公にして獨身生活を表白した男が、其宣言をケロリと忘れて、遅いのが二月或は三月、早いものになると三日目位に、早くも第二の候補者をつかまへてゐる。これが人間としての赤裸々な心理状態である。然るに刹帝利を始めハルナは有りふれ

世間的の僞人ではない、眞に其妻の心を憐み、一生歸つて来る望みのない女房の爲に、獨身生活を續けたのである。

斯く話す所へ慌ただしくやつて來たのは牢番のエルであつた。エルは心配相な顔をして、疊に頭を摺つけ、

エル「申上げます、大切な咎人シエールが、何時の間にか牢屋を破り逃走致しました。誠に職務怠慢の罪、申し譯もムいませぬ」

と泣いてゐる。右守のエクスは、

「ナニ、シエールが脱獄致したか、ソリヤ大變だ、左守殿、如何致したら宜しからうかな」

左守「ハテ、困つた事を致したものだ。併し乍ら今となつて悔んだ所で仕方がない、彼が脱獄致したのは恰も虎を野に放つが如きもの、キツとベルツと牒し合せ、

又何事か謀反を企むに相違ムらぬ、就いては彼が行方を搜索致す必要がムらう」  
刹帝利「速に人を遣はし、彼が所在を尋ね出し、召捕歸るべく取計らつてくれ、

右守殿、萬事拔目のなき様に頼むぞよ」

右守は「委細承知仕りました」と此場を立出で、河守の長を勤めたカント及びエルに命じ、變装させて、ベルツの隠れてあるといふキールの里へ入り込ましむる事とした。

話替つて、ベルツは三方山に包まれ、一方に大河を控へたキールの山奥に立籠り譜代の家來を集め、武を練り、時を待つてゐた。そこへバラモン軍が一人も残らず退却したといふ報告を耳にし、願望成就の時こそ來れり、今を措いて何時の日か吾目的を達せむや……と無慮一千騎を引率し、道々農民を徵發し、同勢三千人を以て、チリリチリりと攻め寄せ來る内報がカントより届いて來た。刹帝利始め左守の驚きは一方でない。例の如く秘密會議を開いて、反軍の攻撃に備ふべく凝議をこらした。されど何れも右守に代々仕へたる武士のみ僅に八百餘名、兵營に國防の大機關として蓄へあるのみ、萬一ベルツ押寄せ來ると聞かば、何時反旗を掲げ、王に逆襲するやも計られ難い、其心痛は一通りでなかつた。刹帝利は涙をハラハラと流し、

刹帝利「ああ一難去つて一難來る。どうしてこれ丈心配が絶えないのであらう」

と悲歎ひたんに沈むしづ。タルマンも左守司さもりのかみも一向名案いつこうめいあんが浮うかんで來こない、何いづれも青息吐息あをいきといきの爲體ていたらくであつた。ハルナは儼然げんぜんとして立上たちあがり、

ハルナ「必ずかならず必ずかならず、御心配ごしんぱいなさいますな、城内じやうないはつびやく八百の兵へいは何いづれも誠忠無比せいちうむひの人物じんぶつ計ばかりでムいますれば、メツタに裏返うらがへる氣遣きづかひはありませぬ。此このハルナはまだ兵士へいしに面かほを知られてゐないのを幸さいはひ、種々しゆじゆざつた雑多ざつたに身みを糞やつし、兵營へいえいを乞食こじきとなつて、夜よな夜よなめぐり、彼等かれらが話はなしを考かんがへて居をりまするが、一人ひとりとして王わうの爲ために命いのちを捨すつる事ことを否いなむ者ものはありませぬ。そしてベルツの惡業あくごふを非常ひじやうに憎にくみ居をりますれば、何程譜なにほどふだ代の家來けらいなりとて、大義名分上たいぎめいぶんじやう、左様さやうな不義ふぎな事ことは斷だんじてないと信しんじます。拙者せつしやに此軍隊このぐんたいをお任まかせ下くださらば、みん事敵ごとてきを打破うちやぶり、再野心ふたたびしんを起おこさぬやうに致いたしてみせませう。そしてキツとベルツ、シエールの兩兇りやうきやうを生捕いけどりに致いたし、お目めにかけませう、之これに就ついては拙者せつしやに成案せいあんがムいます」

左守さもり「コレ倅せがれ、左様さやうな事ことを申まをして、萬一敗軍まんいちはいぐんを致いたしたら、何どうして吾君様わがきみさまに言譯いひわけを致いたすのだ。其方そなたは年としが若わかいから、左様さやうな樂觀らくくわんを致いたして居をるが、あのベルツといふ奴やつは卑怯者ひけふものなれど、シエールは軍略ぐんりやくの達人たつじん、シエールあつて後のちベルツの光ひかりが出で

るやうなものだ。汝の如きうら若き弱輩の知る所ではない。及ばず乍ら、年  
りと雖も、父キユービットが君の御爲、國の爲、右守殿と全軍を指揮し矢面に立  
つて奮戦激闘してみよう程に、父は餘命も幾何もなき老齡、捨ても惜うない命、  
其方は行先の長い未來のある男子、吾君のお側に仕へ、安全の地位に身をおいて、  
吾亡き後は君の爲、國の爲、十分の忠勤を勵んで貰はねばならぬ。吾君様、何卒  
此防戦は、左守、右守にお任せを願ひます  
刹帝利「左守の言葉、實に吾肯綮に當つてゐる。然らば全軍の指揮を、左守、右  
守に一任する」

左守「ハイ、御懇命を辱なうし、有難う存じます、命を的にあく迄も奮戦致して、  
王家及國家を守護致しませう」

右守「及ばず乍ら、左守司の指揮に従ひ、命を鴻毛と輕んじて奮戦激闘致します  
れば、必ず御安心下さいませ」

タルマン「左守、右守殿、命を捨つるは匹夫のなす所、兩將は身を安全地帯にお  
き、全軍の指揮を終局までなさらねばなりません。輕舉妄動を謹み、最後の一人

迄までながらへるお覺悟かくごでなくては此戦このたたかひは駄目だめでごぎいます」

左守さもり「なる程ほど、タルマン殿どのの仰おほせの通り、委細承知あさいしやうちかまつ仕つかつてごぎ

右守うもり「タルマン殿どのの仰おほせには決けつして反そむきませぬ、御安心ごあんしん下くださいませ」

ハルナ「お父上ちちうへが全軍ぜんぐんの總指揮官そうしきくわんとなられた以上いじやうは、何卒私どうぞわたしを參謀長さんぼうちやうとしてお使つか

ひ下くださいます様に、たつてお願ねがひ致いたします」

左守さもり「イヤイヤ其方そなたは最前さいぜんも申まをした通り、決けつして危険きけんな所ところへ行いつてはならない。

王様わうさまのお側そばに忠實ちうじつに仕つかへ、御身邊ごしんぺんを守るまもるが其方そなたの役目やくめだ」

と親おやの情なさけで吾子わがこを戰場せんぢやうに向むけ討死うちじにさせまいと頻しきりに心こころを惱なやましてゐる。

ハルナ「父上ちちうへの御指揮おんしきなれば、今度こんどの戦たたかひは零敗ぜろはいでごぎいます。これに就ついては吾々われわれ

に深遠しんゑんなる計畫けいくわくがごぎいますから、何卒なにとぞ、刹帝利せつていり様、拙者せつしやにお任まかし下くださいませぬか、

キツと手柄てがらを現あらはしてお目めにかけます」

刹帝利せつていり「ハテ心得こころえぬ汝なんぢが言葉ことば、其計畫そのけいくわくとは如何いかなる事ことか、餘よが前まへに言いつてみよ」

ハルナ「恐おそれ乍ながら、すべてのお人拂ひとばらいを願ねがいます。拙者せつしやの申まをし上あぐる事ことが若もし御不ごふし

承知ようちなれば御採用ごさいよう下くだされずとも、お恨うらみは致いたしませぬ」

刹帝利せつていり、若輩じやくはいの言げんにも亦また取るべき事ことがあらう、然しからば聞きいて遣つかはす……ア、イヤ、一同いちどうの者もの、暫しばらく席せきを遠とほざかつたがよからう、  
と鶴つるの一聲ひとこゑに、タルマン始めはじめ左守さもり、右守うもりは不性不精ふしようぶしように席せきを遠とほざかつた。ハルナは王わうの側近そばちかく進すすみ、聲こゑを潛ひそめて、  
ハルナ「實じつの所ところは昨夜神王さくやしんのうの森もりに參拜さんぱいを致いたし、眞心まごころを籠こめて國家こくかの安泰あんたいを祈いのる折をりも、盤古神王ばんこしんわうと思おもひきや、神素盞鳴尊かむすさのをのみこと現あらはれ玉たまひ、仰おほせらるるやう、……其方そのほうは國家こくかを思おもふ忠良ちうりやうの臣しんだ、實じつにビクの國くにの柱はしらだ。今いまやベルツは反旗はんきを掲かかげ、一千騎いつせんきの軍隊ぐんたいを引率ひきつれ、數多あまたの農民共のうみんどもを從したがへて、無慮むりよ三千人さんぜんにん、日ひならず押寄おしよせ來きたるであらう、あ、其時そのときは決けつして手向てむかひを致いたすでない、城内じやうないを固かたく鎖とぎし籠城るつじやうを致いたせよ。さすれば八百はつびやくの味方みかたは一人ひとりも裏返うらがへる者ものはない。もしも城外じやうぐわいへ出いでて戰たたかはむか、裏切うらぎりするものが現あらはれて、味方みかたの不利益ふりえきであるぞよ。兔とも角かくも籠城るつじやうの心持こころもちにて、四方しはの入口いりぐちを固かため居をれば不思議ふしぎな援軍えんぐんが現あらはれて敵てきを追おひ散ちらすであらう。又またヒルナ姫ひめ、カルナ姫ひめは歸かへり來きたつて、敵てきの背後うしろより、奇兵きへいを放はなち、叛軍はんぐんをして、一人ひとりも残のこらず降伏かうふくせしむることが出來できるであらう……とアリアリとお示しめになりました。



何卒、夢とは云へ、決して虚妄の言ではムいませぬ。賢明な吾君は必ずや、吾進言を御嘉納下さる事と固く信じて居りまする。」

刹帝利「いかにも、汝の言葉には一理ある。到底人間の力では及ぶものでない、素盞鳴尊様のお示しになつた戦略は、實に完全な戦法だ。然らば全部、汝に臨時兵馬の權を委任する。」

ハルナは嬉し涙をハラハラとながし乍ら、

ハルナ「若年者の言葉、御聞き届け下さいまして、有難うムいます。キツと御神力に仍りて、國家の大難を救はして頂きませう。御安心下さいませ。ああ惟神靈幸倍坐世。」

と合掌した。王はさも頼もしげに、ニコニコとして面色とみに輝き出したり。

(大正一二・二・一四 舊一一・一二・二九 於龍宮館 松村眞澄録)

ハルナは刹帝利より全軍の總指揮權を委任され八百の兵士を城内に集め各門戸を固く守らしめ武備を十分に整へて敵の襲來を待つてゐた。ベルツ總指揮のもとに、シエール一隊を指揮し元帥旗を初夏の風に靡かせ乍ら、鬨を作つて城の東西南北より驀地に攻め來る。然し乍ら今度はバラモン軍の如く民家に火を放つ様な事はない。一千の騎士を初め俄づくりの二千の農兵は各自に柄物を携へ、惡魔の牙城を亡ぼし國民の塗炭の苦を救ふは今や此時とベルツの佞言に謬られ、農業をそつち除けにして迫り來る其勢、破竹の如くであつた。ベルツは先づ騎馬にて表門に向ひ大音聲に呼ばはつて云ふ、

ベルツ「民軍の總大將ベルツ將軍、五萬の兵を率ゐて進み來れり。如何に刹帝利の權威を以てするも、よもやこれには敵すまじ。速に門を開いて降服するか、さもなくば此城は四方八方より味方の軍勢をもつて十重二十重に圍みあれば、瞬間に粉碎するは必定也。返答承はらん」

と呼はつた。然し城内の衛兵は森として一人の答ふるものもなく、寄らば斬らむと手具脛引いて息を凝らして待つてゐる。流石のベルツも城門固く容易に進み入

れず、又あまりの敵の静けさに如何なる計略のあるやも圖り知られずと稍躊躇の色を現はし、兔も角城の周圍を圍み持久戦をなさば忽ち城内は兵糧つき白旗を掲げて降服せむ。然らば味方の一兵卒も損せずして大勝利を得べしと、蟲のよい考へを起し、時々「ワイワイ」と喊聲を作つて城内の守兵を威喝させ乍ら、持久戦をとる事となつた。又裏門より向ひしシエールは俄將軍となつた嬉しさ、吾力を現はすは今此時と云はぬばかりに裏門を打叩き進み入らむとする時しも、雨の如く降り来る矢に辟易して遠く遁れ一丁ばかりの間隙を隔てて遠巻に巻いて居た。夜は篝火の光、晃々と燃え上り城内より見れば得も云はれぬ美觀であつた。總指揮官のハルナは城内を彼方此方と駆け巡り指揮をなしつつ何れも櫓大鼓の鳴る迄は戦ふべからずと嚴命し、八百の猛卒は息をこらして治まりきつてゐた。四方を圍みし三千の敵軍は一丁許り間隔を保ち、押し寄せようとせせず對陣殆ど一ヶ月に及んだ。朝から晩まで用もなきに城を眺めて命令の下るを待つてゐる位、苦しいものはない。中にはそろそろ喧嘩でも初めて無聊を慰めむと角力をとる奴、酒に酔うて鐵拳を揮ふ奴、陣中は漸く規律亂れて、中にはソツと夜陰に乘じ暗に

紛れて逃げ行くものさへ出来て来た。前に寄せた三千の兵は滞陣一ヶ月の間に其  
大半を減じ、今や約一千五百の手兵となつた。城内にては刹帝利、左守、右守司、  
タルマン等は高殿に登り敵の陣形を見下し或は神を念じ或は酒酌み交し援兵の來  
るを待つてゐる。話變つて鬼春別、久米彦兩將軍に引きずられ馬に跨り遠くビク  
トリアの都を立去つたるヒルナ姫、カルナ姫は將軍と共にシメジ峠の麓に着いた。  
此間の距離殆ど五十里に及んでゐる。此シメジ峠は猪倉山の峰續きにて最も難所  
である。到底騎馬にて通ふ事は出来ない。兩將軍は眞先にここ迄逃げのび青草の  
上に胡床をかき、「ここ迄逃げて来たなら、先づ一安心」とヒルナ、カルナの二  
人の美人を前に侍らせ携へ持つたる瓢の酒をチビリチビリと惜さうに舌嘗めずり  
して飲み乍ら後よりおひおひ逃げ來る味方の全軍をここに集めて隊伍を整へ、再  
び猪倉山の岩窟に立籠らむとの協議を凝らした。もとより黄金山へ攻め上る勇氣  
は少しもない。然し乍ら士氣を沮喪せしむる事を虞れて、黄金山征服を標榜して  
ゐたのである。適當の場所あれば全軍を率ゐ、小國を併呑し猪倉山に城砦を構へ  
て一大王國を建設せむとの企みであつた。生命からがら、逃げて來たので兩將軍

は非常に空腹になつてゐた。そこへ矢庭に酒をあほつた事とて酒の量に比して非常に酩酊をし出した。

鬼春別「ヒルナの女王さま、よくまあ途中で落馬もせず跟いて來ましたね、お手柄お手柄、軍人の妻たるものは、これ位の事が出來なくては駄目だ。お前は鬼春別將軍の奥様として十分の資格が備はつてゐるよ」

ヒルナ姫「ホホホホ、大變お褒め下さいますこと、妾は初めて馬の背に乗つたものですから、腿の邊りが痛くなり、お尻が擦り剥けまして到底此上動く事は出來ませぬ。アイタタタ」

と故意とに顔を顰める。

鬼春別「あ、これからは馬に乗る事は出來ない。ここを三里ばかり馬の轡をとつて急坂を登り、猪倉山に行つて暫く滞陣するのだ。もう一足だから……こんな處に屁古垂れちや困るよ、何と云つても將軍の奥様だからな」

ヒルナ姫「だと云つて、もう一足も歩けないのだもの。カルナさま、貴女如何でムいますか」

カルナ姫「妾も腿が擦れお尻が剥け、痛くて堪りませぬわ。もう此上一足だつて動けませぬわね」

久米彦「斯様の處で弱音を吹いて貰つちや困るぢやないか。猪倉山に行けば、もはや金城鐵壁も同じだ。こんな處にマゴマゴして居れば三五教の治國別に……いや、ウーン」

と行きつまる。

カルナ姫「もし將軍様、三五教の治國別に追はれるのが怖さに、ここ迄逃げて來たのですか。貴方は之からエルサレムの宮を襲撃し、黄金山を占領するのだ、と仰有つただぢやありませんか。一時も早く行かなければ時機がおくれば大變だと兩將軍様とも仰せになつたでせう、何故猪倉山等に滞陣をなさるのです。妾は、それがチツとも腑に落ちませぬわ」

久米彦「ウーン、エー、凡て兵法には千變萬化の祕術があるものだ。時と場合によつては軍略上、如何なる事を致すかも知れない。マアマア黙つて吾々のお手際を見てゐるが宜いわ」

カルナ姫ひめ「へー、妙めうですな」

ヒルナ姫ひめ「もし鬼春別様おにはるわけさま、本當ほんたうに足あしが痛いたくて仕方しかたがありません。如何どう致いたしませ

うかな」

鬼春別おにはるわけ「拙者せつしやの手てで撫なでてやつたら屹度きつと直なほるよ」

ヒルナ姫ひめ「擦すり剥むけたお尻いどや腿ももを、そんな毛けの生はえた硬かたい手てで撫なでられちや堪たまり

ませぬわ、何卒どうぞそれ丈だけは御免ごめん下くださいませ」

鬼春別おにはるわけ「アハハハハ、いきなり肱鐵ひぢてつを喰くはされたな。何なんと女をんなと云いふものは得とくなも

のだな」

ヒルナ姫ひめ「そら、さうですとも。女をんななればこそ、將軍様しやうぐんさまの鬚ひげを【むし】つたり頬ほほ

邊べたを叩たたいたり鼻はなを捻ひねつても喜よろこんでゐらつしやるのだもの。そこが女をんなですわね」

數多あまたの兵士へいしは漸やうやく足揃あしぞろひが出来できた。兩將軍りやうしやうぐんは、

「さア、之これから此急坂このきふはんを一ひときばりだ」

と云いひ乍ながら立上たちあがり、

「さア姫ひめ、陣中ぢんちゆうだ。仕方しかたがない。チツと痛いたくても辛抱しんぱうするのだな」

ヒルナ姫「貴方徒歩でおいでなさいませ。妾は馬でなけりやチツとも動かせぬわ。ねえカルナさま、貴女だつてさうでせう」

カルナ姫「さうですとも。馬に乗せて頂きたいものですわ」

久米彦「斯様な急坂を馬に乗らうものなら、それこそ命を捨てる様なものだ。何とかして歩いたら如何だ。こんなきつい坂は空馬でさへも容易に行けないのだからな」

カルナ姫「妾は貴方に命まで差上げてラブしてるのですもの、貴方の馬に乗つて落ちて死んだら得心ですわ。ねえヒルナさま、さうでせう」

ヒルナ姫「さうですとも、死んだつて將軍様に獻げた生命、何にも恨は残りませぬわね」

鬼春別「エーエ、無理云ふ女王さまだ。そんなら仕方がない。馬の口をとつて、行ける所迄上げて上げませう」

と云ひ乍ら、ヒルナ姫を抱へて馬にヒラリと乗せた。久米彦も亦カルナを馬に乗せてやつた。二人の姫は足が痛い、尻が痛い、駄々を捏たのは馬に乗つて逃げる



爲であつた。

二人は馬に乗るや否や馬首をクレリと東に向け、一鞭あて一目散に疾風迅雷の如く駆け出した。兩將軍は聲を囁らして、

「やアやア部下の者共、彼を追つ付けて引捕らへよ」

と下知する。此急坂にかかつたので何れの騎士も全部馬を下り、鞍には拍車のつ

いた靴を括りつけ登坂の用意をして了つた際とて、俄に馬に乗る譯にも行かず靴

を解き足に穿ち、グズグズしてゐる間に、二人は早くも目の届かぬ所まで逃げて

ゐる。忽ち幾百とも知れぬ獅子を引連れた三五教の空助に扮した摩利支天は、巨

大なる獅子に跨り「ウー」と四邊の山嶽を響かせ、軍隊の中を縦横無盡に駆け廻

つた。將軍初め全軍は思はぬ獅子の襲來に肝を潰し、腰をぬかす者、眞裸足で逃

げるもの、泣き叫ぶ者、其外種々雑多に思ひ思ひに逃走し、残るものは腰を抜か

した弱蟲ばかりであつた。馬は獅子の聲に驚いて思ひ思ひに逃げ散つて了つた。

獅子の群は一所に集まり、一齊に聲を揃へて「ウー」と百雷の轟く如く唸り立て

威喝を試みた上、ヒルナ、カルナの後を追うて、摩利支天指揮のもとに雲を霞と

追うて行く。

ベルツは一ヶ月餘の滞陣に、士氣漸く亂れ、夜陰に乗じて脱隊するもの相次いで踵を接するため一戦して士氣を鼓舞せねばならぬと覺悟をきめ、シエールは裏門よりベルツは表門より獅子奮迅の勢にて、猪武者を先頭に、さしも堅固の大門を打破り城内に亂れ入つた。ハルナは八百の手兵を指揮し、兵を八方に分つて防ぎ戦うた。されど潮の如く押寄せた敵軍は、刻々に其數を増し、一旦逃げ散りし雑兵迄歸り來つて「ワイワイ」と喚き立ち乍ら、又もとの如く三千の兵士は城内に残らず進入し、手當り次第に暴れ出した。忽ちハルナは捕虜となり刹帝利、左守司、タルマンの身邊も今や危しと見る間に、表門に當つて宣傳歌の聲が聞えて來た。之は治國別が松彦、龍公、萬公の部下を率ゐて救援に向うたのである。

神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

音に名高きビクの國  
西にビクトル山控へ

東にライオン川を負ひ  
要害堅固の鐵城を

ここに築きて永久に

百の國民治めます

ビクトリア王の御居城

八岐大蛇や醜神に

誑惑されし右守の司

ベルツの司は軍隊を

率ゐて不羈を圖らむと

攻め寄せ來る淺ましさを

天地を造り玉ひたる

誠の神は善を褒め

惡を懲して地の上に

天國淨土を建設し

上は王者を初めとし

下國民の端迄も

守らせ玉ふ尊さよ

三五教の宣傳使

治國別の一行が

現はれ來る上からは

幾十萬の強敵が

一度に襲ひ攻め來とも

如何でか恐れむビクの國

刹帝利王よ心安く

思召されよ天地の

神の賜ひし言靈を

完全に委曲に打出し

救ひまつらむ惟神

神に誓ひて宣りまつる

ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

誠一つは世を救ふ 誠に刃向ふ仇はなし

勇めよ勇め刹帝利 従ひ玉ふ諸々の

誠の司よ悪神の 此襲撃を恐れずに

神に心を任せつつ 祈らせ玉へ惟神

神に代りて宣り傳ふ

此言靈を聞くよりベルツは俄に慄ひ出し、駒に跨り裏門より驀地に駆け出す。

此時シエールは庭石に躓き倒れた途端に、足を折り悲鳴を擧げて救ひを求めてゐ

る。怖氣ついたる軍勢は、現在目の前に倒れた大將を見向きもやらず、土足のま

ま踏み越え踏み越え、シエールの身體一面泥まぶれにし乍ら、先を争うてバラバ

ラバラと逃げ出す可笑しさ。ベルツの後に従つて大多数の軍隊は西へ西へと駆け

り行く。此時向ふの方より駒に跨り驀地に馳歸つたのはヒルナ、カルナの兩女で

あつた。續つづいて空助もくすけに扮ふんした摩利支天まりしてんは、巨大きよだいな獅子ししに跨またがり數百すうひやくの獅子ししを引連ひきつれ、ベルツが逃にげ路みちを扼やくし、聲こゑを揃そろへて「ウーウー」と百雷ひやくらいの轟とどろく如ごとく唸うなり出だした。ベルツは此この聲こゑに驚おどろいて馬上ばしやうより眞逆まつさかさま様に轉落てんらくし、路傍ろばうにふんのびてゐる。其他そのたの軍卒ぐんそつは獅子ししの呻うなり聲こゑに戦をのき恐れおそれ、身體しんたい竦すくみ大地だいちに嚙かぶりついて慄ふるひ戦をのいてゐた。ヒルナはベルツの倒たふれた姿すがたを目敏めざとくも見みつけて馬うまの背せなに引括ひつくくり、敵てきの乘のり棄すてた馬うまを見みつけて、又またもやヒラリと飛とび乗のり、カルナと共に王わうの一大事いちだいじと驀地まつしぐらに夏々かつかつと裏門うらもんより勢いきほひよく歸かへり來きたりぬ。

(大正一二・二・一四 舊一一・一二・二九 於龍宮館 北村隆光録)

## 第二三章 純潔じゆんけつ (一三八六)

治國はるくにわけ別わけは先まづ城内じやうないの總司令官そうしれいぐわんたるハルナが敵てきの捕虜ほりよとなり庭木にはきに縛しばられて居ゐるのを助たすけやり、ハルナに導みちびかれ殿中でんちゆう深く王わうの居間ゐまに通とほされた。此處こゝには王わうを初はじめ、

左守、右守、タルマンが一生懸命に神前に祈願して居た。

ハルナ「刹帝利様、神様のお蔭によりまして、危機一髪の際、三五教の宣傳使治國別様一行に救はれました。此方が治國別様でムいます。」

と紹介する。王はまづまづ此方へと上座に治國別を請じた。治國別は此處で澤山

でムいますと辭退して上座には着かなかつた。王はまアまアと上座をすすめ乍ら、

刹帝利「危急存亡の場合どうも誠に有難うムいます、貴方はビクの國を救ふ生神

でムいます。此御恩は何時になつても決して忘れは致しませぬ。サアどうぞ御緩

りと御休息下さいませ。」

治國別は叮嚀に首を下げ、

「初めて御目に懸ります。尊き御身をもつて吾々宣傳使に御叮嚀なる御挨拶痛み

入りましてムいます。決して吾々は貴方のお國を救ふやうな力はムいませぬ。嚴

の靈瑞の靈の御神力に依りまして惡魔の敵が脆くも敗走したのでムいますから、

何卒神様にお禮を仰有つて下さいませ。」

刹帝利「ハイ、何とも御禮の申しやうがムいませぬ。嚴の靈様、瑞の靈様、盤古

神王様有難うムいます」

と合掌し、嬉し涙を流して居る。

左守「拙者は王に仕ふる左守司キュービットでムいます。よくまアこの大難を神様と共に助け下さいました。又危き倅の命迄お拾ひ下さいまして實に感謝に堪えませぬ。ああ惟神靈幸倍坐世」

と涙にかき曇る。

治國別「私はテームス峠に於て、神様の修業を致して居ります所へ、神素盞鳴尊が現はれ給ひ、「汝は一時も早く道を轉じてビクの都へ参り、刹帝利殿の危難を救へ」との御命令、取るものも取り敢ず、三人の弟子と共に駆けつけて見れば危急存亡の場合、結構な御用をさして頂きました」

左守「大神様の思召し、貴方方御一行の御親切、お禮は言葉に盡せませぬと嬉し涙にまたもや掻き曇る。

右守「拙者は右守司を勤めて居りますアクスと申すもの、お禮は言葉に盡せませぬ。何卒今後御見捨なく御懇情をお願い申し上げます」

治國別はるくにわけ「お互様たがひさまに宜敷よろしうお願い致ねがしませう」

タルマン「拙者せつしやはウラル教けうの宣傳使せんでんしでムいまして、刹帝利せつていりさま様の御信任ごしんにんを忝かたじけなうし、内事ないじの司つかさを兼ねて居をりますが、この危急ききふの場合ばあひに際さいし、神徳しんとく足らざる爲ために爲なす所ところもなく困こまり果はてて居をりました。よくまあお助け下くださいました。どうか私わたくしを貴方あなた様の

のお弟子でしにお加くはへ下くださらば實じつに有難ありがたう存ぞんじます」

治國別はるくにわけ「左様さやうでムいますか、貴方あなたはウラル教けうの宣傳使せんでんし、御苦勞ごくらうさま様でムいます。就つい

ては貴方あなた計ばかりではなく、刹帝利せつていりさま様も三五教あななひけうの教をしへをお聞きき遊あそばしては如何いかがでムりま

せう。三五教あななひけうの祠ほこらの森もりには、國治立くにはるたちのおほかみさま大神様あななひけう、盤古ばんこ神王しんのうさま様、大自在だいじざいてんさま天様あまがお祭まつり致いた

してありますれば、教をしへの名なは變かはれども、神様かみさまには少すこしも變かはりはありませぬからな

ア」

タルマン「何分なにぶん宜敷よろしくお願い申ねがします。もし刹帝利せつていりさま様、如何いかがでムいませう」

刹帝利せつていり「申まをす迄までもなく治國別はるくにわけ様さまにお世話せわにならうぢやないか、イヤ治國別はるくにわけ様さま何分なにぶん

よろしくお願い申ねがします。就ついては左守さもり、右守うもりを初はじめ、城内じやうないちどう一同そろは揃そろうて貴教きけうに歸きじ

順致ゆんいたしますから、何卒なにとぞ大神様おほかみさまにお取とりなしをお願い致ねがします」



はるくにわけ 治國別 〃 八しやうちう承知かまつ仕りました 〃

まつひこ 松彦 〃 お師匠ししやうさま様、祝いはひの歌うたをさし上げたら如何いかでがムこいませうか 〃

はるくにわけ 治國別 〃 如何いかにも 〃

いと云いひ乍ながら、

はるくにわけ 治國別 〃 天地あめつちの神かみの恵めぐみの深ふかくして

もも 百ももの禍わざはひ逃にげ失うせにけり。

ビクくの國こ國王こきしの永と遠はに守まもります

この神城かみしろは永とこ久しへにあれ 〃

せつていり 刹帝利 〃 あら尊たふと生いける誠まことの神かみに遇あひ

なみだ 涙なみだこぼるる今日けふの嬉うれしさ。

はるくに わけ 治國はるくにの別わけの司つかさよビクくの國くに

守まもらせたまへ千代ちよに八千代やちよにに

タルマンに「あななひ三五かみの神をしへの教まを目のあたり

聞ききて心こころも榮さかえけるかな。

皇神すめかみの惠めぐみの露つゆに霑うるほひて

ビクトリア城じやうは生いきかへりけるに

左守さもり「たぐひ類かみなき神ちからの力たまを保たもちます

治國はるくにわけ別の司尊つかさたふとし。

言靈ことたまの幸さちはふ國くにと聞ききつれど

かほど迄までとは思おもはざりけりに

右守うもり「なやみはてし今日けふの軍いくさを詳細まつぶさに

幸さちあらしめし君きみぞ畏かしこき。

今いまよりは心こころ改あらため三五あななひの

畏かしこき道みちに仕つかへまつらむ」

ハルナ「大君おほぎみと國くにと吾身わがみを助たすけられ

如何いかに報むくはむ吾われの身みをもて。

さりながら人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや

いつかは報むくいむ君きみの惠めぐみに」

萬公まんこう「齋苑館いそやかた吾師わがしの君きみに従したがひて

功いさをを立てし今日けふぞ嬉うれしき。

世の爲に靈と體を捧たる  
吾身の上の樂しきろかも

松彦 君が代は千代に八千代に常磐木の

松の縁と榮えますらむ。

常磐木の松に巢ぐへる田鶴のごと

いと清らけき刹帝利の君

龍彦 立つ鳥も落すやうなる此城を

抜かむとしたる人の愚かさ。

皇神のいや永久に守ります

ビクの國王を狙ふ愚かさ

刹帝利せつていり 皇神すめかみの嚴いづの力ちからに救たすけられ

今は心こころも冴さえ渡わたりける。

さりながらヒルナの姫ひめは今いまいつこ

さまよひ居ゐるぞ尋たづねまほしき。

カルナ姫ひめさぞ今頃いまごろは背せの君きみを

慕したひて泣なかむ野邊のべに山邊やまべに

ハルナ 卍 よし妻つまは屍かばねを野邊のべに晒さらすとも

厭いとはざるらむ君きみのためには。

曲神まががみのベルツの軍逃いくさげ散ちりて

いとも静しづけき城しろの中なかかな

かく歌うたを取とり交かはす所ところへ、表門おもてもんに駒こまの蹄ひづめの音おと勇いさましく歸かへり來きたつたのは、刹帝利せつていり、

ハルナの束の間も忘る事能はざる、ヒルナ姫、カルナ姫であつた。二人はベルツからだの體を門内もんないに卸おろし、守兵しゆへいをして之これを守まもらせ置き、馬うまを飛とびおり、王わうの居間ゐまにイソイソとして進すすみ入いつた。王わうは二人ふたりの姿すがたを見みて驚喜きやうきし、刹帝利せつていり「ヤア其方そなたはヒルナ姫ひめ、よくまア無事ぶじで歸かへつて來きやつた。まアマ結構けつこう々々けつこう隨分ずいぶん骨ほねを折をらしたなア、ヤア其方そなたはカルナ姫ひめ、よくも今迄いままで忍しのんで王家わうけの爲ため、國くにの爲ため盡つくして呉くれた。何も云いはぬ此この通とほりだ」

と、兩手りやうてを合あはして感謝かんしゃの意いを表へうしたり。二人ふたりは嬉うれし涙なみだをポロポロと流ながして其場そのばに泣なき伏ふした。左守司さもりのかみ、ハルナは氣きも狂くるはむばかりに驚きやうきし、立たつたり坐すわつたり、火鉢ひばちを提さげて室内しつないを右左みぎひだりと驅かけ廻まはつて居ゐる。喜よろこびの極きよくに達たつした時ときは、如何いかなる賢者けんじゃと雖いへども度を失うしなひ狼狽うろたへるものである。タルマン「左守殿さもりどの、ハルナ殿どの、落おち着つきなされ」

と注意ちういされ、提さげて居ゐた火鉢ひばちをそつと卸おろし、ハルナ「貴女あなたはヒルナ姫様ひめさま、其方そなたはカルナであつたか、どうして歸かへつて來きたか」

と嬉うれし涙なみだに沈しづむ。カルナは餘あまりの嬉うれしさに涙なみだをハラハラと流ながし俯うつむ向むいて居ゐる。

刹帝利せつていり「其方そなたはどうして歸かへつて來きた、定めし難儀なんぎを致いたしたであらうのう」

ヒルナ姫ひめ「ハイ有難ありがたうムいます。シメジ峠たうげの麓迄ふもとまで參まゐりました所ところ、摩利支天まりしてんさま様が現あらはれて、數百頭すうひやくとうの獅子ししとなり、バラモン軍ぐんを狼狽らうばいさせ給たまうた爲ために、都合つがふよく逃にげ歸かへる事ことが出来できました」

刹帝利せつていり「成程なるほど、神様かみさまのお助けたすけだなア。ああ有難ありがたし有難ありがたし惟かむながら神靈たま幸倍ちはへ坐世ま。カルナ其方そなたもヒルナと共にとも隨分ずいぶん苦勞くろうをしたであらうなア。お前等まへらりやうにん兩人ごころの心こころは、私わたしもハルナもよく知しつて居ゐる。本當ほんたうに貞女ていぢよ烈婦れつぷの龜鑑きかんだ」

カルナ姫ひめ「ハイ有難ありがたう」  
と僅わづかに云いつたきり、これ又また嬉うれし涙なみだに袖そでを濡ぬらしてゐる。

刹帝利せつていり「ヒルナ其女そなたが骨ほねを折をつて呉くれたお蔭かげで、バラモン軍ぐんが退却たいきやくして呉くれたと思おもへば、ベルツ、シエールの兩人りやうにん、數千すうせんの兵へいをもつて吾城わがしろを圍かこみ、たつた今三五いまあななひの宣傳使せんでんし治國はるくにわけ別樣さま一行いっかうのお蔭かげによつて退却たいきやく致いたした所ところだ。どうか治國はるくにわけ別樣さま御一行ごいっかうにお禮れいを申まをして呉くれ」

ヒルナは無言むごんの儘首ままくびを傾かたむけ、次ついで治國はるくにわけ別はうの方むかに向むかひ、恭うやうやしく兩手りやうてを支つかへ、

ヒルナ姫「貴方様の御援助により、ビクトリア城も無事に保てました。有難く感謝を致します」

と云ふ聲さへもはや涙になつて居る。

治國別「初めてお目にかかります。貴女はヒルナ姫様で△いましたか、よく王家の爲め國家のためお骨折りなさいました。實に感服致します。併し貴女途中に於て何か拾ひものを遊ばしたでせう」

ヒルナ姫「ハイお察しの通り敵の大將ベルツを生擒り、厳しく縛り連れ歸つて参りました」

治國別「さうで△いませう、お手柄なさいましたねえ」

刹帝利「何、ベルツを生擒にしたと申すか、何と偉い功名を現はして呉れたものだ。きつと其女には改めでお禮を申すぞや」

カルナ姫「勿體ない臣が君のために働くのは當然で△います。何卒お氣遣ひ下さいますな、其お言葉を承はりますれば十分で△います」



と又もや嬉し涙を絞る。

斯かる所へカントは走り來り、

カント「申上げます、敵の副將軍、シエールを生擒ましてムいまする」

刹帝利「何！シエールを生擒つたと、ヤ天晴々々、後程褒美を遣すから逃げな

いやうに大切に保護して呉れ」

タルマン「吾君様、お目出たうムいます。これにてビクトリア王家も無事安泰、

ビクの國も泰平に治まりませう」

左守「斯くなるも全く神様の御蔭でムいます。治國別様、よくまあ來て下さい

ましたなア」

治國別「皇神の經綸の絲に操られ

知らず知らずに上り來ましぬ。

惟神に任せば何事も

いと安々と治まりてゆく」

左守さもり 「いすくはしたふと尊たふとき神かみの御み恵めぐみを

目まのああたり見みる吾われぞうれ嬉うれしき。

大君おほぎみもさそ嘸さそやうれ嬉うれしみ給たまふらむ

今日けふの戦いくさの治をさまりを見みてみてみて

刹帝利せつていり 「有あり難がたしかたじけ忝かたじけなしと云いふよりも

外ほかに言こと葉ばは無なかりけるかなな」

ヒルナ姫ひめは涙なみだを押おさへ歌うたひ出だした。

ヒルナ姫ひめ 「千ちは早はや振ふる古ふるき神かみ代よを造つくらししすめ皇おほ大神かみの現あれまして

八や十その曲まが津つの猛たけり狂くるふビクトリアしろの城しろを

守まもらせたまひかたむ傾かたむきかけし城しろの中なかを

もとの如くに立て直し 救はせたまひし嬉しさよ

妾は君に見出だされ 後の宮と任けられて

御側に近く仕へしが 右守の司のベルツ司が

心の中を計りかね 試めして見むと思ふ中

醜の魔風に煽られて 情なや女として

行くべからざる道を行き 深き罪をば重ねたる

其償ひをなさむものと バラモン軍の中に入り

カルナの姫と諸共に 千々に心を碎きつつ

素性卑しき荒男 鬼春別や久米彦の

軍の司の心を奪ひ 縦横無盡にあやなして

君の禍國の仇 遠く追ひそけ奉り

尊き神の御使に 守られ乍ら漸々に

都路近く歸り見れば 俄に聞ゆる鬨の聲

唯事ならじと氣を焦ち 駒に鞭打ちとうとうと

カルナの姫と諸共に 馳せ歸り見れば道の邊に

いとも無残に倒れたる 目に見覚えの荒男

逃げ往く軍に目も呉れず 直ちに駒より飛び下りて

其面ざしを調べれば 思ひがけなきベルツの軍君

何はともあれ駒に乗せ 歸らむものと心を定め

歸りて見れば御館 激しき軍の痕跡は

黄金の城や鐵の壁に いとありありと現はれぬ

唯事ならじと駒を下り ベルツの魔神を地に捨てて

衛兵共に守らせ置き カルナと共にいそいと

歸りて見れば吾君は いと健かに坐しぬ

其外百の司等も 常に變らず健に

君のめぐりを取り巻いて 左も嬉しげに坐しぬ

ああ有難や有難や 神の恵と喜びて

心に感謝の折もあれ 治國別の神司

現はれまして吾君の  
軍を救ひたまひしと

聞きたる時の嬉しさよ  
ああ惟神々々

尊き神の御前に  
罪に汚れしヒルナ姫が

御前を畏み畏みて  
大御恵の尊さを

喜び感謝し奉る  
ああ惟神々々

神の御靈の幸倍ひて  
これの館は永久に

ビクの國王はいつ迄も  
壽長く榮えまし

百の國人平けく  
いと安らかに榮ゆべく

守らせたまへ大御神  
赤心籠めて願ぎまつる

と歌ひ終りける。

これより治國別初め、萬公、松彦、龍彦は、刹帝利の懇情により、三五の教理  
や儀式を城内の重役その他に教導し、神殿や教殿を新に創立し、夏の中頃一同は  
鬼春別以下の跡を追かけエルサレムを指して進み行く。

(大正一二・二・一四 舊一一・一二・二九 於龍宮館 加藤明子録)

(昭和一〇・六・一二 王仁校正)

}\

靈界物語 第五三卷 眞善美愛 辰の巻

終り